

Oracle® Data Relationship Management

Oracle® Data Relationship Steward

Oracle® Data Relationship Management for Oracle Hyperion Enterprise Planning Suite

Oracle® Data Relationship Management for Oracle Hyperion Financial Close Suite

Oracle® Data Relationship Management for Customer Hub

Oracle® Data Relationship Management Read Only Access

User's Guide

リリース 11.1.2.3

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	9
第 1 章 はじめに	11
Data Relationship Management について	11
Data Relationship Management へのアクセス	11
パスワードの変更	12
セキュリティ	12
ナビゲーション・メニュー	13
メタデータ・オブジェクトの名前付け	14
第 2 章 バージョンの管理	15
Data Relationship Management バージョン・ライフサイクル	15
バージョン・タイプおよびステータス	17
バージョンの作成	17
バージョン変数の操作	18
バージョン変数の使用	18
バージョン変数の作成	18
変数へのバージョンの割当て	19
バージョン変数の削除	19
バージョンのコピー	19
バージョンの保存	20
時点バージョンの作成	20
バージョン・プロパティの編集	21
バージョンへの検証の割当て	22
ドメインへのノードの割当て	22
バージョンへのドメインの割当て	23
バージョンのアンロードおよび削除	23
バージョンのバックアップおよび復元	24
第 3 章 階層の管理	27
階層の作成	27
階層プロパティの編集	28
ノード・タイプの有効化および無効化	30

階層のオープン	30
階層グループ	31
階層グループの作成	31
階層グループへの階層の割当て	31
制御されたプロパティの割当て	32
制御されたノード・アクセス・グループの割当て	32
検証の割当て	33
階層の削除	33
第4章 ノードの操作	35
ノードについて	35
ドメインの使用	36
ノードの追加および挿入	36
ID 関数	39
ノードのモデリング	39
ノード・プロパティのコピー	41
ノードの移動および順序付け	41
緩やかな移動オプション	42
ノードのソート	42
ノード削除方法	43
ノードのマージ	44
ノードの削除	45
ノードの除去	45
ノードの取消し	46
ノードの非アクティブ化	46
ノードの再アクティブ化	47
検証の割当て	47
孤立ノード	48
孤立ノードの表示	48
孤立ノードの削除	48
ツリー・ビューでのナビゲート	49
ノードの検索	49
ノード・セキュリティ	51
共有ノードの使用	51
共有ノードおよびドメイン	52
共有ノード・プロパティ	52
共有ノードの有効化	53
共有ノードの追加および挿入	53
共有ノードの除去および削除	54

共有ノードの名前変更	54
プライマリ・ノードへの共有ノードの変換	55
共有ノードの表示	55
第5章 プロパティの管理	57
プロパティ・カテゴリ	57
システム・プロパティ	58
統計プロパティ	59
プロパティ値の範囲および元	59
プロパティ・ステータス	60
プロパティ値の編集	61
プロパティのフィルタ	62
第6章 データの検証	63
バージョンの検証	64
階層の検証	64
ノードの検証	64
検証結果の操作	65
リスト・ビューでのバージョンおよび階層結果のナビゲート	65
リスト・ビューでのノード結果のナビゲート	65
ツリー・ビューでのノード結果のナビゲート	66
ノード結果のダウンロード	66
検証結果の消去	66
第7章 ガバナンス・ワークフロー	69
ワークフロー・モデル	69
ワークフロー・タスク	70
ワークフロー・ステージ	70
要求の操作	70
要求の変更	71
改善要求	71
要求アイテム	71
アイテム詳細	71
要求アクティビティ	72
要求アクション	72
要求のライフサイクル	73
要求の作成	74
要求の送信	75
要求の請求	75
要求の承認	76

要求のエンリッチ	76
要求のプッシュバック	77
要求のエスカレート	77
要求のコミット	78
要求の拒否	78
ワークリストの移動	78
ワークリスト・ビュー	79
経過時間別の要求の表示	79
要求の検索	79
要求のプレビュー	80
要求を開く	80
要求の削除	80
プロセス・コントロールおよび自動化	81
ワークフロー・パス	81
ワークフロー・タグ	81
要求および請求期間	82
ステージのスキップおよび自動エスカレーション	82
再承認	83
アラートおよび通知	83
Web クライアント・アラート	83
電子メール通知	84
第 8 章 クエリーの使用	85
クエリー・タイプ	85
クエリーの作成	86
演算子の説明	88
クエリー結果の操作	89
リスト・ビューでのナビゲート	90
ツリー・ビューでのナビゲート	90
クエリー結果のダウンロード	90
クエリーの管理	91
クエリーを開く	91
クエリーのコピー	91
クエリーの移動	92
クエリーの削除	92
第 9 章 階層の比較	93
比較タイプ	93
視覚比較	93
構造比較	93

プロパティ比較	94
名前変更比較	94
比較の作成	94
比較結果の操作	96
リスト・ビューでのナビゲート	96
ツリー・ビューでのナビゲート	97
バージョン間でのノードの移動	97
比較結果のダウンロード	98
比較の管理	98
比較のオープン	98
比較のコピー	98
比較の移動	99
比較の削除	99
第 10 章 アクション・スクリプトの操作	101
アクション・スクリプト・パラメータ	101
フラット・ファイルからのアクション・スクリプトのロード	105
アクション・スクリプト結果のダウンロード	107
トランザクション・ログからのアクション・スクリプトのロード	107
ノード・モデルからのアクション・スクリプトのロード	109
第 11 章 インポートの操作	111
インポート・セクション	111
インポートの作成	113
インポートの実行、コピー、移動および削除	118
インポート結果の表示	119
第 12 章 バージョンのブレンド	121
ブレンダの作成	121
ブレンダの実行、コピー、移動および削除	126
ブレンダの結果の表示	127
第 13 章 エクスポートの操作	129
エクスポートの作成	129
階層エクスポート	131
階層 XML エクスポート	137
世代エクスポート	139
比較エクスポート	143
差分エクスポート	148
EPM Architect エクスポート	151
バージョン・エクスポート	153

プロパティ・リスト・エクスポート	157
プロパティ検索エクスポート	158
トランザクション・ログ・エクスポート	161
マージ・ログ・エクスポート	164
エクスポート・ブックの作成	167
エクスポートおよびエクスポート・ブックの実行、コピー、移動および削除	168
第 14 章 ジョブ管理	171
ジョブの実行	172
ジョブの取消し	172
ジョブ結果の削除	172
第 15 章 トランザクション、ジョブおよび要求の監査	173
トランザクション履歴の監査	173
トランザクション履歴のデータ・アクション	175
リクエストの監査	179
ジョブ履歴の表示	180
第 16 章 Data Relationship Management バッチ・クライアントの使用	183
バッチ・クライアントの保護	184
バッチ・クライアント・ログイン情報の設定	184
バッチ・クライアントの実行	184
依存関係	185
バッチ・クライアントでのバージョンの保存	185
コマンドライン構文	186
構成ファイル構文	192
出力および結果コード	201
用語集	203
索引	207

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

この章の内容

Data Relationship Management について	11
Data Relationship Management へのアクセス	11
セキュリティ.....	12
ナビゲーション・メニュー.....	13
メタデータ・オブジェクトの名前付け.....	14

Data Relationship Management について

Oracle Data Relationship Management は、エンタープライズ内を全体的に移動する前にレポート構造を保持、分析および検証するためのハブとして機能します。

Data Relationship Management には、次の機能があります。

- 複数のシステムにわたってビジネス・エンティティ、階層、属性およびマッピングを管理します。
- データ関係を検証し、ビジネス・ルールを使用して属性値を計算します。
- サブスクライブ・システムおよび階層全体にわたって参照整合性を強制します。
- ユーザーが代替ビューを作成および管理できるようにします。
- 異なるソースの個別データ・セットをマージし、これらをマスター・セットに結合します。
- 比較レポートおよび分析の履歴バージョンを保持します。
- フル機能の監査ログを使用して階層および属性の変更をすべて追跡します。
- サブスクライブ・システムを更新するための主な入り口として機能するとともに、調整および分析の事後処理用として使用できます。

Data Relationship Management へのアクセス

➤ Data Relationship Management クライアントを起動するには:

1 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「Web クライアント」の順に選択します。

2 ユーザー名とパスワードを入力します。

ユーザー名とパスワードは大文字と小文字が区別されます。

- 3 アプリケーションを選択し、「ログオン」をクリックします。

パスワードの変更

► パスワードを変更するには:

- 1 Data Relationship Management のホーム・ページから、「プリファレンス」を選択します。
- 2 「パスワードの変更」をクリックします。
- 3 現在のパスワードを入力します。
- 4 新規パスワードを入力します。

注： ユーザーがネイティブに認証されており、PasswordPolicyEnabled システム・プリファレンスが True に設定されている場合、パスワードには次のうち 3 つの要素が含まれる必要があります。

- 大文字
- 小文字
- 数字
- 特殊文字

注： それ以外の場合は、ユーザーが Oracle Hyperion Shared Services を介して認証されるときに外部ディレクトリによって認証される場合を除き、パスワードは制限されません。

- 5 新規パスワードを再入力します。
- 6 「OK」をクリックします。

セキュリティ

ユーザー・アクセスは次によって決定されます。

- ユーザー役割割当て - 詳細は、Oracle Data Relationship Management Administrator's Guide を参照してください。
- バージョン・ステータス
 - 作業バージョン--セキュリティ権限に応じてすべてのユーザーがアクセスできます
 - 送信バージョン--バージョン所有者またはデータ・マネージャが編集できます
 - ファイナライズ済バージョン--すべてのユーザー役割に対して読取り専用です
 - 期限切れバージョン--バージョン所有者またはデータ・マネージャ役割に対して読取り専用です。

- **ノード・アクセス・グループ割当て:** ノード・アクセス・グループを使用して、階層およびノードに対するユーザー・アクセスを制御します。Data Relationship Management 内の特定のノードに対する権限を持つ特定のグループにユーザーを割り当てることができます。たとえば、勘定体系では、ユーザーのグループが資産構造のみを保持する必要がある場合があります。ユーザーが階層内の任意のノードに対するアクセス権を持たない場合、階層は表示されません。ユーザーがバージョン内の任意の階層に対するアクセス権を持たない場合、バージョンは表示されません。
- **プロパティ・カテゴリ割当て:** バージョン、階層およびノードの特定のプロパティ・カテゴリにアクセスを制限できます。ほとんどの場合、プロパティ・カテゴリはシステム基準に基づいています。

ナビゲーション・メニュー

Data Relationship Management の機能およびコンテンツは、一連の Web ページに編成されており、ホーム・ページの一元的なナビゲーション・メニューからアクセスできます。ユーザーに割り当てられた役割に基づいて、制限されたメニュー項目のセットを選択できます。次に、ホーム・ページのナビゲーション・メニューからアクセスできる Web ページの各グループの説明を示します。

- **「ワークリスト」**--「ワークリスト」ページは、データに対して提案された変更を処理するためのガバナンス・ワークフローを使用する要求の作成、表示および検索に使用します。要求が作成されるか開かれると、その要求は個別のインスタンス・タブに表示されます。各要求のインスタンス・タブでは、要求レベル・アクションが実行されます。
- **参照**--「参照」ページは、バージョン、階層、ノード、プロパティの参照、検索および編集に使用します。バッチ検証が実行され、その結果は「参照」ページに戻されます。アクセス権の作成、削除、割当てなど、バージョンや階層の管理もこれらのページで処理されます。バージョンの階層を参照する際、各階層は個別のインスタンス・タブに表示されます。各階層のインスタンス・タブでは、階層ノード・レベル・アクションが実行されます。
- **クエリー**--「クエリー」ページは、プロパティ・クエリーの管理と実行、およびクエリー・プロセスの結果の処理に使用します。各クエリーの詳細および結果は、個別のインスタンス・タブに表示されます。各クエリーの結果は編集できるため、「参照」ページに移動せずに、階層ノードおよびプロパティを変更できます。
- **比較**--「比較」ページは、比較の管理と実行、および比較プロセスの結果の処理に使用します。各比較の詳細および結果は、個別のインスタンス・タブに表示されます。各比較の結果は編集できるため、「参照」ページに移動せずに、階層ノードおよびプロパティを変更できます。
- **スクリプト**--「スクリプト」ページは、アクション・スクリプトのロードと実行、および処理されたスクリプトの結果の表示に使用します。一度に開くことができるアクション・スクリプト(およびその結果)は1つのみです。別のソースからロードされたアクション・スクリプトは、「スクリプト」ページから直接編集できます。

- **インポート**—「インポート」ページは、インポートの管理と実行、およびインポート・プロセスの結果の表示に使用します。各インポートの詳細および結果は、個別のインスタンス・タブに表示されます。
- **ブレンダー**—「ブレンダー」ページは、ブレンダの管理と実行、およびブレンダ・プロセスの結果の表示に使用します。各ブレンダの詳細および結果は、個別のインスタンス・タブに表示されます。
- **エクスポート**—「エクスポート」ページは、エクスポートとブックの管理、エクスポート・プロセスの実行、およびエクスポート・プロセスの結果の表示に使用します。各エクスポートまたはブックの詳細および結果は、個別のインスタンス・タブに表示されます。
- **監査**—「監査」ページは、トランザクション、ジョブ、外部要求の履歴のクエリーおよび表示に使用します。一度に選択および表示できる履歴のタイプは1つのみです。
- **管理**—「管理」ページは、Data Relationship Management アプリケーションのメタデータ、ワークフローおよびセキュリティの管理に使用します。各メタデータ、ワークフローまたはセキュリティ・オブジェクトの詳細は、個別のインスタンス・タブに表示されます。

メタデータ・オブジェクトの名前付け

エクスポートや比較などのメタデータ・オブジェクトに名前を付ける場合、名前にカンマを使用しないでください。

この章の内容

Data Relationship Management バージョン・ライフサイクル	15
バージョン・タイプおよびステータス	17
バージョンの作成	17
バージョン変数の操作	18
バージョンのコピー	19
バージョンの保存	20
時点バージョンの作成	20
バージョン・プロパティの編集	21
バージョンへの検証の割当て	22
ドメインへのノードの割当て	22
バージョンへのドメインの割当て	23
バージョンのアンロードおよび削除	23
バージョンのバックアップおよび復元	24

Data Relationship Management では、関連するデータ・セットはバージョンに編成されます。バージョンは、一定期間またはビジネス・シナリオを表すことができる独立した単一のデータ・セットです。各バージョン内のデータは、階層、ノードおよびプロパティに分類されます。すべてのデータ関連操作ではバージョンを選択する必要があります。バージョンを保存し、これらを他の Data Relationship Management アプリケーションにロードできます。

通常、次の目的で様々なバージョンが使用されます。

- 以前の期間の階層、ノードおよびプロパティの履歴コピーを管理します。
- 他のユーザーまたはプロセスに影響を与えずに新規データまたは既存のデータに対するモデル変更を作成します。
- 比較、合理化およびブレンドを目的として様々なソースからデータをロードします。

Data Relationship Management バージョン・ライフサイクル

ほとんどの組織は、業務カレンダーまたはレポート・カレンダーと一致する循環基準で Data Relationship Management を使用します。各カレンダー期間内では、Data Relationship Management は予測可能なパターンに従って使用されます。

1. **Data Relationship Management** の新規の「処理中」バージョンが以前の期間の「ファイナライズ済」バージョンのコピーとして作成されます。新規バージョンには、複数の階層(勘定体系、組織構造および製品構造用など)が含まれる場合があります。
2. 「処理中」バージョンに対する変更が行われます。ユーザーが階層データを入力または変更する際に検証が自動的に実行されます。
3. 必要に応じて、アクション・スクリプトを使用して階層データのバルク変更が実行されます。
4. レポート期間の最終期限の間際に、バージョン・ステータスが「送信済」に変更され、これ以上の変更は許可されなくなります。データの整合性を確保するために検証が実行されます。比較を使用して、現在のバージョンと以前の「ファイナライズ済」バージョン間の差異を識別できます。
5. データの整合性が確保されると、バージョン・ステータスが「ファイナライズ済」に変更され、これ以上の変更は許可されなくなります。
6. 以前のレポート期間のバージョン・ステータスは「ファイナライズ済」から「期限切れ」に変更されている場合があり、バージョンは将来的に履歴分析で使用されたり監査レコードとして使用される可能性があるために格納されます。
7. 階層データを参加システムに送信するために「ファイナライズ済」バージョンからのエクスポートが実行されます。すべてのエクスポートが完了し、宛先システムにロードされた後、期末のレポート・プロセスの基準となる一貫した階層データがすべての参加システムに行き渡ります。

Data Relationship Management によって既存の組織ワークフロー制約を適用できます。

- ビジネス・ルールにより、企業の財務部が新規費用センターをすべて承認する必要がある場合があります。この場合、承認を示すプロパティを追加し、プロパティが承認済に変更されるまではノードを他のシステムにエクスポートできないようにすることができます。企業の財務部には、インジケータ・プロパティのみを更新するアクセス権を付与できます。プロパティ・クエリを定義してインジケータ・ノードを識別することもできます。
- ビジネス・プロセスにより、すべての階層の更新を、このような更新の実装を担当する専用グループにリダイレクトする必要がある場合があります。レビューと承認の後、アクション・スクリプトを介して **Data Relationship Management** へバルク・ロードするために変更をフラット・ファイルに入力できます。この自動方式により、潜在的な入力エラーを大幅に軽減できます。
- 複数のユーザー入力の調整や変更のコミット前の承認が含まれるより複雑なビジネス・プロセスは、変更要求を使用して処理できます。

不定期に実行される他のタスクは、次のとおりです。

- 参加システムの範囲内における拡張をサポートするための新規階層を確立できます。階層を外部ソースからインポートしたり、**Data Relationship Management** 内で階層を直接作成できます。
- 変化するビジネス上のニーズに対応するために階層の再構築が必要な場合があります。個別バージョンを使用して、サブスクリプション・システムへのエク

スポーツ用として使用される他の製品バージョンからこれらの変更を分離できます。

- ブレンダ機能を使用すると、様々なバージョンで新しくインポートまたは再構築されたデータを他の既存の本番データとともに同じバージョンに結合できます。

バージョン・タイプおよびステータス

バージョン情報は、ナビゲーション・バーの参照タスクから入手できます。各バージョンには、次の特性があります。

- バージョン名
- バージョンの説明
- タイプ
 - 標準--編集が可能なバージョンで、そのステータスも変更できます。
 - ベースライン--標準バージョンが保存された際のそのコピー。このバージョン・タイプのステータスは「期限切れ」です。
 - 時点--期間またはトランザクション ID に基づく標準バージョンの履歴ビュー。
- ステータス
 - 処理中--このステータスのバージョンはユーザーが編集できます。
 - 送信済--このステータスのバージョンを編集できるのは、バージョンの所有者であるユーザーか、データ・マネージャのユーザー役割を持つユーザーのみです。
 - ファイナライズ済--このステータスのバージョンはだれも編集できません。
 - 期限切れ--このステータスのバージョンはだれも編集できません。

注：「「期限切れ」バージョンを表示できるのは、データ・マネージャ・ユーザーまたはバージョン所有者のみです。

- 保存済--バージョンがデータベースに保存されているかどうかを示します。保存されていない場合、バージョンはデータベースから切り離され、変更はメモリー内でのみ行われてアプリケーションの停止時に失われます。
- ロード・ステータス--バージョンがメモリーにロードされており使用可能であるか、初期化されているがメモリーにロードされていないことを示します。

バージョンの作成

▶ 新しい空のバージョンを作成するには:

- 1 「参照」から  をクリックします。
- 2 バージョンの名前と説明を入力して、「OK」をクリックします。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、新規バージョンが切り離された(保存されていない)状態で表示され、このバージョンに対するデータの追加を開始できます。

バージョン変数の操作

バージョン変数を使用すると、時間の経過に応じて変化するバージョンを動的に参照できます。データ作成者、データ・マネージャおよびアプリケーション管理者ユーザー役割は、バージョン変数を作成することにより、時間の経過に応じて様々なバージョンを参照できます。ユーザー変数は、これらのユーザーがその個人的な用途に応じて管理します。標準変数は、データ・マネージャ・ユーザーがすべてのユーザーによるパブリック使用を目的として管理します。システム変数は、アプリケーション管理者がシステム統合を目的として管理します。

1つのバージョンを複数の変数に割り当てることはできますが、1つの変数に割り当てることができるのは1つのバージョンのみです。変数にはバージョンを割り当てなくてもかまいませんが、クエリー、比較およびエクスポートなどのユーザー・メタデータ・オブジェクトとともに保存された変数の場合はお薦めしません。

詳細は、次を参照してください:

- [バージョン変数の使用](#)
- [バージョン変数の作成](#)
- [変数へのバージョンの割当て](#)
- [バージョン変数の削除](#)

バージョン変数の使用

Data Relationship Management のすべての領域で、バージョン変数はバージョン名と同じ方法で使用できます。バージョン変数を使用して、次を実行することもできます。

- バージョンの大規模なリスト内でバージョンを簡単に検索します。
- クエリー、比較、インポート、ブレンダおよびエクスポートとともにバージョン変数を保存します。

バージョン変数の作成

バージョン変数を作成する場合、ラベルを入力し、オブジェクトのアクセス権レベル(「ユーザー」、「標準」、「システム」またはカスタム・グループ)を選択する必要があります。ラベルは、すべてのバージョンおよび変数にわたって一意である必要があります。バージョン変数を作成するには、既存の変数のリストにバージョン変数を追加するか、バージョンを選択して新規変数を追加します。

▶ バージョン変数を作成するには:

- 1 「参照」から  をクリックします。

- 2  をクリックします。
- 3 バージョン変数の名前と説明を入力して、オブジェクトのアクセス権を選択します。
- 4 「OK」 をクリックします。

変数へのバージョンの割当て

アクセス可能な任意のバージョン変数に任意の標準バージョンを割り当てることができます。ベースライン・バージョンまたは時点バージョンを変数に割り当てることはできません。1つの変数に割り当てることができるのは1つのバージョンのみです。変数にバージョンが現在割り当てられている場合、このバージョンが除去され、新規バージョンが割り当てられます。

- ▶ 変数にバージョンを割り当てるには、「参照」で、変数に割り当てるバージョンを右クリックし、「変数の設定」を選択し、リストから変数を選択します。
- ▶ バージョン変数割当てに対して複数の変更を実行するには:
 - 1 「参照」から  をクリックします。
 - 2 変更する任意の割当て済バージョンで、行を選択します。「割り当てられたバージョン」列で、変数に割り当てる新規バージョンを選択します。
 - 3 「アクション」列で、 をクリックします。
 - 4 「閉じる」をクリックします。

バージョン変数の削除

管理権限を持つ任意のバージョン変数を削除できます。

- ▶ バージョン変数を削除するには:
 - 1 「参照」から  をクリックします。
 - 2 削除対象の任意のバージョン変数で、削除する変数の行を選択して、「アクション」列で  をクリックします。
 - 3 「変数の削除」をクリックして削除を確認します。

バージョンのコピー

既存のバージョンをコピーして新規バージョンを作成できます。バージョンのコピーにより、標準の処理中バージョンが作成されます。新規バージョンには、階層、ノードおよびプロパティとともにアクセス権および検証割当てがコピーされます。ベースライン・バージョン、時点バージョンおよびトランザクション履歴はコピーされません。

▶ バージョンをコピーするには、次の手順に従います。

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」、「コピー」の順に選択します。
- 3 バージョンの名前と説明を入力します。
- 4 「オプション:」 コピーするバージョンで変更承認システム・プリファレンスが有効である場合、新規バージョンではこれを消去できます。
- 5 「OK」をクリックします。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、新規バージョンが切り離された(保存されていない)状態で表示されます。

バージョンの保存

▶ 切り離されたバージョンを保存するには:

- 1 「参照」から、切り離されたバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」、「保存」の順に選択します。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、バージョンは保存済として表示されます。

時点バージョンの作成

時点バージョンは、特定の時点における標準バージョンのスナップショットです。このタイプのバージョンを作成するには、ベースライン・バージョンを使用して、指定した時点までのトランザクション・ログの変更を適用します。時点バージョンを作成できるのは、バージョンの所有者であるユーザーか、データ・マネージャのユーザー役割を持つユーザーのみです。

次を使用して時点バージョンを指定できます。

- 日時
- 現在の日付からの日付オフセット
- 特定のトランザクション ID

▶ 時点バージョンを作成するには:

- 1 「参照」から標準バージョンを選択します。
- 2 「バージョン」、「時点バージョンの作成」の順に選択します。
- 3 「時点タイプ」として「トランザクション日時」、「トランザクション日付のオフセット(日数)」または「トランザクション ID」を選択します。
- 4 次のいずれかのアクションを行います。
 - 「トランザクション日時」の場合、スナップショットの日時を入力し、「OK」をクリックします。

- 「トランザクション日付のオフセット(日数)」の場合、現在の日付からのオフセット日数と時刻を入力し、「OK」をクリックします。
- 「トランザクション ID」の場合、トランザクション ID を入力し、「OK」をクリックします。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、時点バージョンが標準バージョンの子として表示されます。

バージョン・プロパティの編集

バージョン・プロパティはバージョン・レベルで定義され、すべての階層のすべてのノードで同じです。定義上、バージョン・プロパティは常にグローバル・プロパティです。

表 1 バージョン・プロパティと説明

バージョン・プロパティ	定義
バージョン ID	バージョンの一意の内部識別子。
バージョン名	バージョンの名前。
バージョンの説明	バージョンの説明。
バージョン・ステータス	バージョンのステータス: 「処理中」、「送信済」、「ファイナライズ済」、「期限切れ」。
バージョン所有者	バージョン所有者のユーザー名。
レガシー名	バージョンの以前の名前。
使用中のドメイン	バージョンに割り当てられているドメイン。

▶ バージョン・プロパティを編集するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」、「プロパティ」の順に選択します。
スライダの「プロパティ」タブにバージョン・プロパティが表示されます。
- 3 「カテゴリ」リストからプロパティ・カテゴリを選択します。
- 4 編集して変更を行うプロパティ行をクリックします。

注: 簡単なデータ型の場合、エディタ内でプロパティ値を編集できます。複雑なデータ型の場合、をクリックし、プロパティ値用の詳細エディタにアクセスします。

- 5 必要に応じて、ステップ 2 および 3 を繰り返し、バージョン・プロパティを編集します。
- 6 プロパティ・グリッドで「保存」をクリックします。

バージョンへの検証の割当て

▶ バージョンへの検証の割当ての手順。

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」、「検証の割当て」の順に選択します。
スライダの「プロパティ」タブに検証が表示されます。
- 3 バージョンに割り当てる検証行をクリックします。
- 4 「値」リストから、検証のタイプを選択します。
 - 「リアルタイム」--検証は、階層の変更の実行時またはプロパティの変更の保存時に自動的に実行されます。このタイプの検証では、変更が有効でない場合はこれらの変更は保存できないようになります。リアルタイム検証を実行できるのはノード・レベルでのみです。
 - 「バッチ」--検証は、バージョン・レベル、階層レベルまたはノード・レベルのユーザーによって明示的に実行されます。検証結果は、ノードおよび各ノードの失敗メッセージのリストとして返されます。
 - 「両方」--リアルタイムとバッチで検証を実行します。

注： 検証の構成方法によっては、使用可能なのは一部のタイプのみである場合があります。

注： 検証割当てを削除するには、値を「なし」に変更するか、プロパティ・メニューから「値を除去」を選択します。

- 5 必要に応じて、ステップ2および3を繰り返し、検証をバージョンに割り当てます。
- 6 プロパティ・グリッドで「保存」をクリックします。

ドメインへのノードの割当て

バージョン・レベルでノードをドメインに割り当てることができます。

▶ ドメインへをノードの割当てするには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」から「ドメイン・メンバーシップ」を選択します。
- 3 次のオプションを選択できます:
 - 「デフォルト・ドメイン」のみ--指定したドメインに修飾ノードが割り当てられます。
 - 「プロパティのオーバーライド」のみ--オーバーライド・プロパティに指定したドメインに修飾ノードが割り当てられます。

注： オーバーライド・プロパティは、ドメイン名の修飾およびドメイン割当てに使用されるドメイン名値を持つ指定グローバル・プロパティです。

- 「デフォルト・ドメイン」 および「プロパティのオーバーライド」 --両方のオプションを指定する場合、ノードのオーバーライド・プロパティ値が空である場合のみデフォルト・ドメインが使用されます。オーバーライド・プロパティ値が無効である場合、デフォルト・ドメインは使用されず、エラーが発生します。
- 「包含フィルタ」 --任意の名前修飾オプションとともに使用します; 「プロパティのオーバーライド」 または「デフォルト・ドメイン」 で指定したドメインには、フィルタ結果内の修飾ノードのみが割り当てられます

4 「OK」 をクリックします。

注： バージョンに割り当てられたドメインのメンバーにノードがなった後は、バージョンからすべてのドメイン・ノードが削除されるかドメイン自体が削除されないかぎり、バージョンからドメインを除去することはできません。

バージョンへのドメインの割当て

1つのバージョンに複数のドメインを割り当てることができます。

► ドメインをバージョンに割り当てるには:

- 1 「参照」 からバージョンを選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 「カテゴリ」 ドロップダウン・リストから「システム」を選択し、「使用中のドメイン」 プロパティを選択します。
- 4 「値」 列で  をクリックします。
- 5 「使用可能」 から、バージョンに割り当てるドメインを選択し、これらを「選択済」 リストに移動します。

注： 「選択済」 リストの上下矢印を使用して、ドメインの表示順序を決定できます。

6 「OK」 をクリックします。

バージョンのアンロードおよび削除

注： バージョンをアンロードすると、バージョンはメモリーから消去され、データベースに保存していない場合は削除されます。

► 保存したバージョンをアンロードするには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」、「アンロード」の順に選択します。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、「ロード・ステータス」が「初期化済」として表示されます。

削除できるのは、標準バージョンと時点バージョンのみです。標準バージョンを削除すると、すべてのベースライン・バージョンおよび時点バージョンが、これらのバージョンのトランザクション履歴および要求と同じように削除されます。

► バージョンを削除するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」、「削除」を選択します。
- 3 削除を確認するには、「OK」をクリックします。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、バージョンは表示されなくなります。

バージョンのバックアップおよび復元

Data Relationship Management アプリケーション内に格納されたデータのバージョンは、バックアップおよび復元手順を使用してファイル・システムにアーカイブしたり別のアプリケーションに移行できます。管理者によって定義された外部接続に書き込まれるバックアップ・ファイルには1つ以上のバージョンを選択して含めることができます。バックアップ・ファイルは後で同じアプリケーションまたは別のアプリケーションに復元できます。復元プロセスでは、ファイルに格納されているプロパティと、ターゲット・アプリケーションでのプロパティのロード先のプロパティ定義の間に非互換性があるかどうか Data Relationship Management によって識別されます。「ファイル警告から復元」トランザクションでは、復元プロセス中に発生したプロパティの非互換性がログに記録されます。

注: バイナリ・バックアップ・ファイルを作成後に変更することはできません。

► バージョンをファイルにバックアップするには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」から「ファイルにバックアップ」を選択します。
- 3 「接続」から接続を選択し、保存したバージョン・ファイルのファイル名を入力します。
- 4 選択したバージョンは「選択済」リストにすでに含まれています。保存したバージョン・ファイルにバージョンを追加するには、バージョンを「使用可能」から「選択済」に移動します。
- 5 「OK」をクリックします。

➤ ファイルからバージョンの復元するには:

- 1 アプリケーションにログインします。
- 2 「参照」から「バージョン」、「ファイルから復元」の順に選択します。
- 3 「接続」から接続を選択します。
- 4 ファイルの名前を入力して、「開く」をクリックします。
- 5 アプリケーションにロードする 1 つ以上のバージョンを選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

この章の内容

階層の作成.....	27
階層プロパティの編集.....	28
階層のオープン	30
階層グループ.....	31
制御されたノード・アクセス・グループの割当て	32
検証の割当て.....	33
階層の削除.....	33

Data Relationship Management バージョンには、1 つ以上の階層を含めることができます。階層は、ビジネス・ビュー、レポート構造、または関連アイテムのコレクションを表すことができます。階層では、データをノード、関係およびプロパティにグループ化および編成します。

各階層には最上位ノードが割り当てられ、バージョン内の他のノードの間に親子関係を定義することによってこれらを階層に追加できます。階層の最上位ノードの子孫であるすべてのノードは階層内に含まれます。1 つのノードが複数の階層内に存在可能であり、階層間で同期をとるためにすべての階層で常に同じ子孫を持ちます。各階層では 1 つのノードが同じ親または異なる親を持つことができます。

階層は、ユーザーが Data Relationship Management を操作する際の主要インターフェースを提供します。階層の例としては、貸借対照表、事業部門、地理、法律および管理要約などがあります。

階層の作成

➤ 階層を作成するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「階層」タブで、をクリックします。
- 3 名前と説明を入力します。
- 4 「オプション:」 階層グループを選択します。

注： 階層グループを使用すると、関連階層をまとめることにより、簡単に参照および選択できるようにできます。

- 5 次のいずれかのオプションを選択して新規階層の最上位ノードを選択します。
- 「新規ノード」 --新規ノードの名前を入力します。
 - 「既存ノード」 --ノードが存在する階層を選択し、ノードを選択して「OK」をクリックします。
- 6 最上位ノードの説明を入力します。
- 7 「OK」をクリックします。

階層ツリーがリフレッシュされると、新規階層が表示されます。

階層プロパティの編集

階層プロパティは階層レベルで定義され、階層のすべてノードで同じです。定義上、階層プロパティは常にローカル・プロパティです。

表2 階層プロパティ

階層プロパティ	定義
デフォルト表示プロパティ	階層内のノードを表示するためのデフォルト
デフォルトの貼付けプロパティ	設定すると、「プロパティの貼付け」ダイアログ・ボックスに「デフォルトのプロパティ・リストを使用」オプションが表示されます。このオプションを選択する場合、ここで指定したプロパティのみが貼り付けられます。設定しない場合、オプションは表示されません。
デフォルト照合基準	現在の階層のノードを同期する基準となるデフォルト・プロパティ。
共有ノードの使用可能化	階層内で共有ノードを使用可能にするかどうかを決定します。
階層ノード・タイプ	指定したノードが特定のノード・タイプであるかどうかを決定するために使用されるノード・レベルのプロパティを指し示します。階層に対するノード・タイプの使用を可能にします。
階層 URL	外部リソースから階層に直接アクセスするための URL ハイパーリンク
階層の説明	階層の説明
階層グループ	階層が割り当てられている階層グループを表示します。
階層 ID	階層の一意の内部識別子
階層名	階層名
階層所有者	階層所有者のユーザー名
階層のソート順	階層内のデフォルトのソート順を決定するためのノード・レベルのプロパティを指し示します。
ID 長リーフ・プロパティ	ID の合計の長さ(接頭辞は除きますが、先行ゼロは含みます)を決定するために ID 機能とともに使用されます。指定したリーフ・ノードの長さを指定するために使用されるノード・レベルのプロパティを指し示します。設定されない場合、次の順次 ID の長さが先行ゼロなしで使用されます。

階層プロパティ	定義
ID 長リム・プロパティ	ID の合計の長さ(接頭辞は除きますが、先行ゼロは含みます)を決定するために ID 機能とともに使用されます。指定したリム・ノードの長さを指定するために使用されるノード・レベルのプロパティを指し示します。設定されない場合、次の順次 ID の長さが先行ゼロなしで使用されます。
事前入力リーフ・プロパティ	新規リーフ・ノードの作成時にノード名を事前入力するために使用されるノード・レベルのプロパティを指し示します。
事前入力リム・プロパティ	新規リム・ノードの作成時にノード名を事前入力するために使用されるノード・レベルのプロパティを指し示します。
最上位ノード	階層の最上位ノードの名前
最上位ノード ID	最上位ノードのノード ID
ユーザー表示プロパティ	現在のユーザーの階層ノードの表示方法を決定します。
ユーザーの階層のソート	現在のユーザーの階層内のソート順を決定するためのノード・レベルのプロパティを指し示します。
ユーザー照合基準	現在のユーザーに対して選択した階層のノードを同期する基準となるプロパティ
ユーザーの貼付けプロパティ	設定すると、「プロパティの貼付け」ダイアログ・ボックスに「デフォルトのプロパティ・リストを使用」オプションが表示されます。このオプションを選択する場合、階層レベルのプロパティで指定したプロパティのみが貼り付けられます。設定しない場合、オプションは表示されません。 注： このプロパティと「デフォルトの貼付けプロパティ」の両方が設定されている場合、デフォルトのプロパティよりユーザー・プロパティが優先されます。

➤ 階層プロパティを編集するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「オプション:」 「グループ化基準」ドロップダウン・リストからオプションを選択して階層のサブセットを表示します。
- 3 階層を選択し、 をクリックします。
- 4 「カテゴリ」リストからプロパティ・カテゴリを選択します。
- 5 編集して変更を行うプロパティ行をクリックします。

注： 簡単なデータ型の場合、エディタ内でプロパティ値を編集します。複雑なデータ型の場合、 をクリックし、プロパティ値用の詳細エディタにアクセスします。

- 6 必要に応じて、ステップ 3 および 4 を繰り返し、階層プロパティを編集します。
- 7 プロパティ・グリッドで「保存」をクリックします。

詳細は、[ノード・タイプの有効化および無効化](#)を参照してください。

ノード・タイプの有効化および無効化

ノード・タイプは、HierarchyNodeType プロパティを使用してバージョンの任意の階層に対して有効化および無効化できます。このプロパティは、値がノード・タイプの名前と一致するバージョン・レベル、階層レベル、またはノード・レベルのプロパティを指し示す必要があります。

詳細は、Oracle Data Relationship Management Administrator's Guide のノード・タイプの管理に関する項を参照してください。

▶ 階層のノード・タイプを有効化するには:

- 1 バージョンおよび階層を選択します。
- 2 「階層」から「プロパティ」を選択します。
- 3 プロパティ・グリッドで、「HierarchyNodeType」プロパティを選択します。
- 4 ノード・タイプの名前を返すノード・レベルのプロパティを選択します。
- 5 プロパティ・グリッドで「保存」をクリックします。

▶ 階層のノード・タイプを無効化するには:

- 1 バージョンおよび階層を選択します。
- 2 「階層」から「プロパティ」を選択します。
- 3 プロパティ・グリッドで、「HierarchyNodeType」プロパティを選択します。
- 4 「プロパティ」から「値を除去」を選択します。
- 5 プロパティ・グリッドで「保存」をクリックします。

階層のオープン

▶ 階層を開くには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「オプション:」 「グループ化基準」ドロップダウン・リストからオプションを選択して階層のサブセットを表示します。
- 3 階層または階層グループを右クリックし、「開く」を選択します。

注意 階層グループを開くと、そのグループ内のすべての階層が開きます。

- 4 次のいずれかのアクションを行います。
 - 最上位ノードを展開して子を表示します。
 - 分岐の最後に到達するまでリム・ノードを展開します。
 - 階層からノードの分岐を表示します。ノードを選択し、「オプション」からコマンドを選択します。
 - 「表示元」、「現在のノード」の順に選択し、選択したノードから階層を表示します。

- 「表示元」、「最上位ノード」の順に選択し、最上位ノードから階層を表示します。

階層グループ

階層グループを使用すると、関連階層をまとめることにより、簡単に参照および選択できるようにできます。階層は、1つ以上の階層グループ・プロパティを使用してグループ化できます。1つの階層に関連付けることができるのは、階層グループ・プロパティごとに1つのグループのみです。コア階層グループ・プロパティは、デフォルトのグループ化用として使用できます。別のグループ化要件を処理するために別の階層グループ・プロパティを追加することもできます。階層を参照する場合、「グループ化基準」ドロップダウン・リストを使用して、グループ化に使用する別の階層グループ・プロパティを選択します。

詳細は、次を参照してください:

- [階層グループの作成](#)
- [階層グループへの階層の割当て](#)
- [制御されたプロパティの割当て](#)

階層グループの作成

▶ 階層グループを作成するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「階層」、「新規」、「階層グループ」の順に選択します。
- 3 名前と説明を入力します。
- 4 階層グループに含める階層を「使用可能」から選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

階層ツリーがリフレッシュされると、新規階層グループが表示されます。

注: 新規階層グループに1つも階層を追加しなかった場合、グループはツリーに表示されません。階層はいつでも既存のグループに割り当てることができます。

階層グループへの階層の割当て

▶ 階層を階層グループに割り当てるには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「オプション:」 「グループ化基準」ドロップダウン・リストからオプションを選択して階層のサブセットを表示します。
- 3 階層を右クリックして、「グループへの割当て」を選択します。
- 4 階層グループに含める階層を「使用可能」から選択します。

5 「OK」をクリックします。

階層ツリーがリフレッシュされると、割り当てられた階層グループ内に階層が表示されます。

注： 階層グループ・プロパティの値はプロパティ・グリッドで設定できます。また、階層を別のグループにドラッグ・アンド・ドロップして再割り当てすることができます。

制御されたプロパティの割当て

プロパティ値の継承元を制御する階層にグローバル継承プロパティを割り当てる必要があります。

▶ 制御されたプロパティを階層への割当てするには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「オプション:」 「グループ化基準」 ドロップダウン・リストからオプションを選択して階層のサブセットを表示します。
- 3 グローバル継承プロパティを制御する階層を選択します。
- 4 階層を右クリックし、「制御の割当て」、「プロパティ」の順に選択します。
グローバル継承プロパティのリストが表示されます。
- 5 プロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動し、「OK」をクリックします。

注： 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。

制御されたノード・アクセス・グループの割当て

ノード・アクセス・グループを使用して、階層およびノードに対するユーザー・アクセスを制御します。ノード・アクセス・グループでは、継承を使用してノードとその子孫にセキュリティを割り当てます。アクセスの継承元を制御する階層にグローバル・ノード・アクセス・グループを割り当てる必要があります。

▶ 制御されたノード・アクセス・グループを階層に割り当てるには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「オプション:」 「グループ化基準」 ドロップダウン・リストからオプションを選択して階層のサブセットを表示します。
- 3 階層を右クリックし、「制御の割当て」、「ノード・アクセス・グループ」の順に選択します。

グローバル継承アクセス・グループのリストが表示されます。

- 4 グループを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動し、「OK」をクリックします。

注：「カテゴリ」リストを使用してユーザー・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。

検証の割当て

検証は、階層ルールが遵守されていることを確認するためのテストです。これにより、ビジネス・ルールを適用しやすくなります。

▶ 検証を階層に割り当てるには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「オプション:」 「グループ化基準」ドロップダウン・リストからオプションを選択して階層のサブセットを表示します。
- 3 階層を右クリックして、「検証の割当て」を選択します。

スライダの「プロパティ」タブに階層に使用可能な検証が表示されます。

- 4 階層に割り当てる検証行をクリックします。

- 5 「値」リストから、検証のタイプを選択します。

- 「リアルタイム」 --検証は、階層の変更の実行時またはプロパティの変更の保存時に自動的に実行されます。このタイプの検証では、変更が有効でない場合はこれらの変更は保存できないようになります。リアルタイム検証を実行できるのはノード・レベルでのみです。
- 「バッチ」 --検証は、バージョン・レベル、階層レベルまたはノード・レベルのユーザーによって明示的に実行されます。検証結果は、ノードおよび各ノードの失敗メッセージのリストとして返されます。
- 「両方」 --リアルタイムとバッチで検証を実行します。

注： 検証割当てを削除するには、値を「なし」に変更するか、「プロパティ」メニューから「値を除去」を選択します。

- 6 必要に応じて、ステップ 4 および 5 を繰り返し、検証を階層に割り当てます。

- 7 プロパティ・グリッドで「保存」をクリックします。

階層の削除

階層を削除しても、その階層内のノードは削除されません。バージョン内の他の階層にこれらのノードが存在しない場合、これらは孤立します。孤立のリストを表示するには、「孤立」タブをクリックします。

▶ 階層を削除するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。

- 2 「オプション:」 「グループ化基準」ドロップダウン・リストからオプションを選択して階層のサブセットを表示します。
- 3 階層を右クリックして、「削除」を選択します。
- 4 削除を確認するには、「OK」をクリックします。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、階層は表示されなくなります。

この章の内容

ノードについて	35
ドメインの使用	36
ノードの追加および挿入.....	36
ノードのモデリング	39
ノード・プロパティのコピー	41
ノードの移動および順序付け	41
ノード削除方法	43
検証の割当て.....	47
孤立ノード.....	48
ツリー・ビューでのナビゲート	49
ノードの検索.....	49
ノード・セキュリティ	51
共有ノードの使用	51

ノードについて

サブスクライブ・システムのトランザクション・データの記述、修飾または要約に使用されるマスター・データ・レコードまたは参照データ・レコードは、Data Relationship Management 内でノードとして管理されます。たとえば、組織構造を表す階層内では、ノードは部門または費用センターを表す場合があります。バージョン内のノードには、グローバル・ノード・プロパティと呼ばれるプロパティを設定できます。階層内のノードには、ローカル・ノード・プロパティと呼ばれる階層固有のプロパティを設定できます。

バージョン内では、ノードは複数の階層の一部である場合があります。ノードには多数のユーザー定義プロパティを設定できます。このプロパティは、ノードに関する情報を格納し、組織の情報システム内のノードの使用を制御します。

次の用語は、階層内のノードの位置および動作を定義するために使用されます。

表 3 ノードの用語

用語	定義
リーフ	子を持つことができないノード
リム	子を持つことができるノード
子	別のノードの直下のノード(B が A の直下にある場合、B は A の子)

用語	定義
親	別のノードの直上のノード(前の例では、A は B の親)
子孫	特定のノードの下の子孫(子および子の子を含む)
祖先	ノードと階層の最上位の間のすべてのノード(親、親の親などを含む)
兄弟	階層内の親ノードを共有するすべてのノード
孤立	階層に割り当てられていないノード
グローバル・ノード	バージョン内のノード。
ローカル・ノード	階層内のノード。

ドメインの使用

ノードはその名前によってバージョン内で一意に識別され、同じバージョン内で2つのノードが同じ名前を共有することはできません。デフォルトでは、異なるシステム内で同じ名前を持つノードが異なるバージョン内に存在することは可能です。この状況が問題になるのは、これらのバージョン内のノードを同じバージョンに結合するときに、その目的が参照整合性のためにこれらを個別ノードとして管理することにある場合です。

ドメインを使用すると、整合性を維持し、共通タイプのノードのために複数のバージョン間でノード名と説明プロパティの一貫性を確保できます。ドメインの例としては、アカウント、エンティティ、部門、製品、従業員およびプロジェクトなどがあります。ドメインは管理者によって作成され、データ・マネージャ・ユーザー役割またはバージョン所有者によってバージョンに関連付けられます。「ドメイン・メンバーシップ」機能を使用すると、ノードを作成時に、または後で特定のバージョン内のドメインに割り当てることができます。

ドメイン・ノードは、ドメインに指定された動作に従う必要があります。ドメインのメンバーであるノードの名前を変更することはできません。ドメインを構成することにより、次が可能になります。

- 接頭辞または接尾辞の使用によるノード名の修飾
- ノードの削除の制限
- リム/リーフ指定の変更の制限

ノードの追加および挿入

階層にノードを含める方法は2種類あります。

- 新規ノードの作成
- 現在階層内にない既存のノードの挿入

注意 ノード名にカンマを使用すると、祖先リスト、子リストおよびクライアント作成ノード・リストなどのカンマ区切りの特定のプロパティを操作するときに困難が伴う可能性があります。また、共有ノード区切り文字および階層区切り文字のシステム・プリファレンスに定義された文字を使用すると、予測できない動作が発生する可能性があるため、このような文字は使用しないでください。クエリー・ワイルドカード文字のアスタリスク(*)およびアンダースコア(_)がノード名に使用されている場合、職階機能を使用して派生式を使用して検索しないかぎり、これらを簡単に検索することはできません。

➤ ノードを作成して階層に追加するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 階層を選択します。
- 3 「階層」から「開く」を選択します。
階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。
- 4 「ノード」から「新規」を選択します。
- 5 追加するノードのタイプに応じて、「リーフ・ノード」または「リム・ノード」を選択します。
- 6 「オプション:」 ドロップダウン・リストからドメインを選択します。「新規ノード」ダイアログ・ボックスのドメイン・オプションが表示されるのは、ドメインがバージョンに割り当てられている場合のみです。ドメインの選択時に重要な検討事項は、次のとおりです。
 - 入力したノード名が存在しない場合、この名前にドメイン修飾子テキストを追加した状態で、選択したドメインのメンバーとして追加されます。
 - 正確なドメイン修飾子テキストを「名前」フィールドに入力すると、この修飾子テキストは2回目は追加されません。
 - 入力したノード名がドメイン内に存在するが現在のバージョン内には存在しない場合、このドメイン・ノードをバージョンに追加できます。
 - ノード名がドメイン内に存在する場合、「ドメイン・ノード名」および「非アクティブ日」フィールドに既存のドメイン・ノードの値が移入されます。
 - ノードがドメインとバージョン内に存在する場合、グローバル・プロパティのコピー元オプションを使用して、ドメイン・ノードのグローバル・プロパティを別のバージョンからコピーできます。
 - ドメインがリストから選択されておらず、入力したノード名に、バージョンに割り当てられたドメインに対する修飾テキストが含まれている場合、このノードは、同時にそのドメインに追加されるか、以前に別のバージョンのそのドメインに追加されたことがないかぎり、追加できません。
- 7 ノードに一意の名前を入力します。入力した名前が既存のドメイン・ノードと一致する場合、ドメイン・ノードの名前、説明および非アクティブ日が参照用として表示されます。

注： ノード名が繰り返されている階層ツリーの一部にノードを追加する場合、ID をクリックすると、ノード名を自動的に生成できます。「ID 関数」を参照してください。

8 「」ノードの新規説明を入力します。

注： 説明は、ドメイン・ノードには必要ですが、非ドメイン・ノードの場合はオプションです。

9 選択したノードの子と兄弟のどちらとしてノードを追加するかを選択します。

10 「OK」をクリックします。

▶ 階層に既存のノードを挿入するには:

1 「参照」からバージョンを選択します。

2 階層を選択します。

3 「階層」から「開く」を選択します。

階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。

4 「ノード」から「挿入」を選択します。

5 ノードの場所を選択します。

- 既存の階層
- 孤立メンバー・リスト

6 次のいずれかの操作を行います:

- ステップ 5 で「既存の階層」を選択した場合、次を実行します。
 1. バージョンを選択します。
 2. 階層を選択します。
 3. 次のいずれかを実行して、挿入するノードを選択します。
 - 「検索」にテキストを入力し、 をクリックしてノードを検索します。

注： ワイルドカード文字としてアスタリスク(*)を使用できます。

複数のノードが見つかった場合、 をクリックして検索アイテムの次のインスタンスを検索します。

- 「ノード」ツリーを展開してノードを検索します。

- ステップ 5 で「孤立メンバー・リスト」を選択した場合、リストからノードを選択します。

7 選択したノードの子と兄弟のどちらとしてノードを挿入するかを選択します。

8 現在のバージョンではなく別のバージョンからノードを挿入する場合、次を実行します。

1. ノード・プロパティをコピーするために次のいずれかのオプションを選択します。

- プロパティをコピーしない
 - グローバル・プロパティのコピー
 - ローカルおよびグローバル・プロパティのコピー
2. ノードの子孫をコピーに含める場合、「子孫を含む」を選択します。
 3. コピーする追加ノードに同じ設定を使用する場合、「この設定をデフォルトとして使用」を選択します。

9 「OK」をクリックします。

ID 関数

ID 関数を使用すると、連続数値 ID およびノード接頭辞を使用してノード名を自動的に生成できます。たとえば、各ノードの名前が **Org000xxx** のようになる一連のノードを作成できます。

- **Org** はノード接頭辞で、任意の文字列を使用できます。
- **000xxx** は連続 ID で、1 から始まって 1 ずつ増分します。

ID 関数が機能するには、次のシステム・プリファレンスが有効である必要があります。

- **AllowNextIDGeneration** を **True** に設定する必要があります。
- **AllowNextIDKeyCreation** により、新規 ID キーを作成できるユーザーのレベルが決まります。

次の ID 関数を使用するには、ノード名フィールドに接頭辞を入力し、ID をクリックします。

- この接頭辞がシステム内にすでに存在する場合、以前に生成された最後の ID より 1 大きい ID が返されます。
- この接頭辞が以前に使用されていない場合、ID 値 1 が(先頭に適切な数のゼロが付く)返されます。

ID の合計長(接頭辞は除き、必要に応じて任意の数のゼロが先頭に含まれる)は、次のように決定されます:

- 階層プロパティ **IDLengthLimbProp** および **IDLengthLeafProp** を設定し、指定したノードに必要な ID 長を指定するノード・レベルのプロパティを指し示すことができます。
- **IDLengthLimbProp** および **IDLengthLeafProp** プロパティが設定されていない場合、次の連続 ID の長さが先頭のゼロなしで使用されます。

ノードのモデリング

既存のノードをモデリングすることにより、モデリング対象のノードと同じ階層で同じプロパティを使用して新規ノードを作成できます。

▶ ノードをモデリングしてノードを作成するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 階層を選択します。
- 3 「階層」から「開く」を選択します。
階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。
- 4 モデリングするノードを選択します。
- 5 「ショートカット」メニューで、「スクリプト」、「モデル元」の順に選択します。
「ソース」タブに、選択したノードの情報が移入されます。
- 6 「プロパティ」タブの「プロパティのコピー」で、ノードからコピーするプロパティを選択します。
 - 「なし」 -- プロパティはコピーされません。
 - 「上書き済」 -- 上書きされたプロパティ値のみがコピーされます。
 - 「選択済」 -- 選択したプロパティのみがコピーされます。

注: 「選択済」の場合、をクリックして、プロパティを選択するプロパティ・セレクトアを表示します。

- 「すべて」 -- すべてのプロパティがコピーされます。
- 7 次を実行します:
 - ステップ 4 の選択内容に基づいてアクション・スクリプトに含めるグローバル・プロパティ値を表示するには、「グローバル・プロパティ」タブを選択します。
 - ステップ 4 の選択内容に基づいて各階層から含めるローカル・プロパティ値を表示するには、「ローカル・プロパティ」タブを選択して階層を選択します。必要に応じて、変更を行います。
 - 8 「ターゲット」タブで、次を実行します。
 - 新規ノードのターゲット・バージョンを選択します。
 - 新規ノードの名前を入力します。
 - 新規ノードの説明を入力します。
 - 9 「ロード」をクリックします。
 - 10 ロードが完了したら、スクリプト・アクションおよびパラメータ値を確認します。
次が可能です:
 - をクリックし、行を変更します。
 - 「スクリプト」、「代替バージョン」の順に選択し、バージョンを変更します。置換されるバージョンと置換するバージョンを選択し、「OK」をクリックします。
 - 列ヘッダーをクリックし、アルファベット順にソートします。
 - をクリックし、1 つ以上の列をフィルタします。

-  をクリックし、プロパティをラベル別と名前別のどちらで表示するか切り替えます。

11 実行する各行の横にある「処理」列でチェック・ボックスを選択します。

注：「スクリプト」メニューで「すべて選択」を使用すると、すべてのアクションを処理できます。スクリプトからアクションのサブセットを選択すると、これらのアクションのみを処理できます。

12  をクリックし、アクション・スクリプトを実行します。

各スクリプト・アクションの結果は「ステータス」および「結果の値」列に表示されます。スクリプトと結果は、「スクリプト」メニューの「ダウンロード」オプションを使用してファイルに保存できます。

ノード・プロパティのコピー

ノード間でプロパティをコピーできます。これには、異なるバージョンのノード間でのプロパティのコピーおよび貼付けも含まれます。

➤ ノード・プロパティをコピーするには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 階層を選択します。
- 3 「階層」から「開く」を選択します。
階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。
- 4 プロパティのコピー元のノードを選択します。
- 5 「ノード」から「プロパティのコピー」を選択します。
- 6 プロパティを貼り付けるノードを検索して選択します。

注： 別のバージョンのノードにプロパティを貼り付ける場合、別のバージョンを開き、ノードを検索して選択します。

- 7 「ノード」から「プロパティの貼付け」を選択します。
- 8 「プロパティの貼付け」ダイアログ・ボックスで、コピーするプロパティのタイプを選択します。
 - 上書きされたプロパティのみ
 - すべてのプロパティ
 - 選択したプロパティ--このオプションを選択する場合、コピーするプロパティを選択します。
- 9 「OK」をクリックします。

ノードの移動および順序付け

ノードを階層内で、または別の階層に移動できます。

- 階層内のノードを移動すると、このノードは元の親から除去され、新しい親の下に配置されます。
- 別の階層へのノードの移動は、コピーのように処理されます。ノードは元の階層では変更されずに残ります。この機能は、既存のノードを挿入する場合と同じです。

➤ ノードを移動するには:

- 1 移動するノードを選択します。
- 2 選択したノードを新しい場所にドラッグ・アンド・ドロップします。
- 3 ノードを別の最上位ノードに移動した場合、アクションを選択します。
 - 「子として配置」 --ノードをノードの子として挿入します。
 - 「兄弟として追加するか順序変更します」 --ノードを兄弟として挿入します。

緩やかな移動オプション

ノードを別の階層から除去することが必要な移動を簡略化するために、緩やかな移動オプションを使用できます。システム・プリファレンス `AllowRelaxedMove` が `True` に設定されている場合、緩やかな移動が可能です。システム・プリファレンスが `False` に設定されているか、存在しない場合、標準整合性制約が適用されます。

ノードを移動する場合、緩やかな移動を行うと、主要階層内の新しい親が、他の階層内でこのノードに関して競合する任意の親関係より優先されます。

ノードのソート

Data Relationship Management では、階層内のノードは次のデフォルトのルールに応じてソートされます。

1. リム・ノードはリーフ・ノードの前にソートされます。

注： これはオプションであり、`SortLimbsFirst` システム・プリファレンスによって制御されます。

2. ノードは、名前別に昇順でソートされます。

カスタム・ソート順

ノードは任意の明示的なカスタム・ソート順でソートすることもできます。ソート順は、プロパティ・データ型がソートである任意のプロパティによって定義できます。

ノード・レベルのソート順プロパティの値に応じて階層をソートするには、ソート順が含まれる適切なノード・レベルのプロパティを指し示すよう階層レベルのプロパティ `StandardHierSort` を設定する必要があります。

また、特定の Data Relationship Management ユーザー ID にのみ適用されるカスタム・ソート順を使用して、ユーザーが同じ階層の他のユーザーに影響を与えずに Data Relationship Management データの表示をカスタマイズできるようにすることもできます。これは、階層レベルのプロパティ UserHierSort によって制御されます。データ型がソート順であるノード・レベルのプロパティを指し示すようこのプロパティが設定されている場合、このソート順の方が StandardHierSort プロパティとデフォルトのソート順の両方より優先されます。

階層レベルのプロパティ StandardHierSort または UserHierSort のいずれにも値が割り当てられていない場合、デフォルトのソート・ルールが使用されます。

カスタム・ソート順プロパティの値は、次のいずれかの方法で設定できます。

- ソート順値は、データが最初に Data Relationship Management にインポートされる際にノード・レベルのソート順プロパティにロードできます。
- 任意のノードのソート順プロパティに対して明示的な値を定義できます。このプロパティは整数値を受け入れます。
- 階層の StandardHierSort または UserHierSort プロパティにソート順プロパティが選択されている場合、「取得/配置」オプションまたはドラッグ・アンド・ドロップを階層内のカスタム・オーダー・ノードに対して使用します。
- ノード・レベルのカスタム・ソート順は、派生ソート・プロパティを使用して計算することもできます。

ノード削除方法

ノードを削除するための方法は、次のとおりです。

表 4 ノード削除方法

アクション	結果
破棄	バージョンからノードを削除し、任意の必須マージ・ロジック(有効な場合)を上書きします 注：「破棄」オプションを使用できるのは、「孤立」リストからのみです。 注： ノードが、ドメインでの削除が禁止されているドメイン・ノードである場合、ノードを削除することはできません。
削除	すべての階層内のすべての親からノードを削除します。 注： ノードが、ドメインでの削除が禁止されているドメイン・ノードである場合、ノードを削除することはできません。
削除してマージ	すべての階層内のすべての親からノードを削除し、削除したノードのかわりに使用するノードを選択できます。 注： このオプションが使用可能なのは、UseMerge システム・プリファレンスが有効である場合のみです。 注： ノードが、ドメインでの削除が禁止されているドメイン・ノードである場合、ノードを削除することはできません。

アクション	結果
取消し	同じ親を持つすべての階層からノードを除去し、この際、このノードが孤立である場合はノードの削除も行います。 - たとえば、存在するすべての階層内でノードが同じ親を持つ場合、すべての階層からこのノードを除去し、この際、このノードが孤立であるために削除します。 - ノードがすべての階層内で同じ親を持たない場合、「除去」と同じ結果になります。 注： ノードが、ドメインでの削除が禁止されているドメイン・ノードである場合、ノードを削除することはできません。
下をすべて取消し	選択したノードのすべての子を除きます。任意の子が孤立すると、これらも削除されます。 注： ノードが、ドメインでの削除が禁止されているドメイン・ノードである場合、ノードを削除することはできません。
除去	現在の親からノードを除去しますが、他の階層の他の親からは除去しません。ノードはバージョンからは削除されず、再挿入が可能です。
非アクティブ化	ノードをエクスポートからフィルタできるように非アクティブとしてフラグ設定します。 ドメイン・ノードがバージョン内で非アクティブである場合、ドメインの非アクティブ日の値を指定できます。デフォルトのドメインの非アクティブ日は現在の日付です。
非アクティブ化してマージ	ノードを非アクティブとしてフラグ設定し、非アクティブ・ノードのかわりに使用するノードを選択できます。 注： このオプションが使用可能なのは、UseMerge システム・プリファレンスが有効である場合のみです。

詳細は、次を参照してください:

- [ノードのマージ](#)
- [ノードの削除](#)
- [ノードの除去](#)
- [ノードの取消し](#)
- [ノードの非アクティブ化](#)
- [ノードの再アクティブ化](#)

ノードのマージ

Data Relationship Management によってサポートされるサブスクライブ・システムには、削除されたノードを参照するトランザクションがある場合があります。ノードを削除または非アクティブ化する場合、この状況に対処するために、削除されたノードまたは非アクティブ・ノードのかわりに Data Relationship Management で使用する他のノードを指定できます。マージ・リストを使用すると、これらのノードと外部プロセスとの関係を管理して提供することにより、マージ・ログ・エクスポート・タイプを使用してトランザクション・データを適切にマップできます。

注： マージ・オプション(「削除してマージ」および「非アクティブ化してマージ」)が使用可能なのは、UseMerge システム・プリファレンスが有効である場合のみです。これらのマージ・オプションは、**共有**ノードを削除または非アクティブ化する場合は使用できません。

ノードの削除

▶ ノードを削除するには:

1 「参照」からバージョンを選択します。

2 階層を選択します。

3 「階層」から「開く」を選択します。

階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。

4 ノードを選択します。

5 「ノード」から「削除」を選択します。

注: UseMerge システム・プリファレンスが有効である場合、「削除してマージ」を選択してから、削除したノードのかわりに使用するノードを選択できます。ReqMerge システム・プリファレンスが有効である場合は、マージ・ノードを指定する必要があります。ReqMerge が無効である場合は、ノード承認プロパティが TRUE でないかぎり、マージ・ノードはオプションです。バージョンがファイナライズされている場合、または適切なアクセス権を持つユーザーによってノード承認プロパティが明確に TRUE に設定されている場合、ノード承認プロパティは TRUE に設定されます。

6 「ノードの削除」を選択してノードの削除を確認します。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、ノードは表示されなくなります。

ノードの除去

ノードを除去すると、ノードは現在の親からのみ除去されます。ノードに他の親がある場合、これらの関係は影響を受けません。ノードに他の親がない場合、このノードは孤立ノードになります。

▶ ノードを除去するには:

1 「参照」からバージョンを選択します。

2 階層を選択します。

3 「階層」から「開く」を選択します。

階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。

4 ノードを選択します。

5 「ノード」から「除去」を選択します。

6 「ノードの除去」を選択してノードの除去を確認します。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、ノードは表示されなくなります。

ノードの取消し

ノードを取り消すと、ノードは親から除去され、孤立する場合は孤立ノードが削除されます。たとえば、ノードが存在する複数の階層の1つから取り消されると、このノードはこの階層、および同じ親を持つ他の階層からのみ除去されます。ノードが存在する唯一の階層の親から取り消される場合、このノードは取消しの結果として削除されます。

「下をすべて取消し」コマンドを使用すると、複数のノードを取り消すことができます。子孫を持つノードに対して「下をすべて取消し」を使用すると、分岐全体が階層から除去され、別の階層に存在しないすべてのノードがバージョンから削除されます。

▶ ノードを取消しするには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 階層を選択します。
- 3 「階層」から「開く」を選択します。
階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。
- 4 ノードを選択します。
- 5 「ノード」からアクションを選択します。
 - 「取消し」 --選択したノードを取り消します
 - 「下をすべて取消し」 --選択したノードの下にあるすべてのノードを取り消します

注: このオプションが使用可能なのは、リム・ノードを選択する場合のみです。

- 6 「ノードの取消し」を選択します。
バージョン・ツリーがリフレッシュされると、ノードは表示されなくなります。

ノードの非アクティブ化

アクティブな子のないリーフ・ノードまたはリム・ノードを非アクティブ化できます。

Inactivate および InactiveChanges システム・プリファレンスは、ノードを非アクティブ化できるユーザー、および非アクティブ・ノードを変更できるユーザーを管理します。

▶ ノードを非アクティブ化するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 階層を選択します。
- 3 「階層」から「開く」を選択します。
階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。

- 4 ノードを選択します。
- 5 「ノード」から「非アクティブ化」を選択します。

注： UseMerge システム・プリファレンスが有効である場合、「非アクティブ化してマージ」を選択してから、非アクティブ化したノードのかわりに使用するノードを選択できます。

- 6 「オプション:」 ノードに「ドメインの非アクティブ日」を入力し、「OK」をクリックします。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、ノードはグレー表示され、「非アクティブ」ステータス・アイコン  が表示されます。

ノードの再アクティブ化

▶ ノードを再アクティブ化するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 階層を選択します。
- 3 「階層」から「開く」を選択します。

階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。

- 4 非アクティブ・ノードを選択します。
- 5 「ノード」から「再アクティブ化」を選択します。

バージョン・ツリーがリフレッシュされると、ノードは有効になり、「非アクティブ」は削除されます。

検証の割当て

▶ 検証をノードに割り当てるには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 階層を選択します。
- 3 「階層」から「開く」を選択します。

階層の最上位ノードがノード・ツリーに表示されます。

- 4 ノードを選択します。
- 5 「ノード」から「検証の割当て」を選択します。
- 6 「プロパティ」タブで、検証を選択し、値を「なし」から「バッチ」または「リアルタイム」に変更します。
- 7 「保存」をクリックします。

孤立ノード

孤立ノードは、バージョン内に存在しているがバージョン内の階層に割り当てられていないノードとして定義されています。孤立が存在するのは、孤立を完全に除去するためのクリーンアップを保留している場合や、バージョン内の階層への再割当てを待機している場合などです。

孤立ノードは任意の階層には関連付けられていませんが、これらはバージョン内の他のノードとのグローバル関係を持つ場合があります。孤立ノードは、孤立ではない子孫を持つ場合があります。このような状況を回避するために、孤立ノードのリストは定期的に確認してください。

詳細は、次を参照してください:

- [孤立ノードの表示](#)
- [孤立ノードの削除](#)

孤立ノードの表示

► 孤立ノードを表示するには:

1 「孤立」タブを選択します。

孤立ノードごとに、子孫の数が表示されます。

2 ノードを選択します。

3 次のいずれかのアクションを行います。

- 「関連」、「子孫」または「子」の順に選択し、ノードの関係を表示します。
- 「ノード」、「プロパティ」の順に選択し、ノードのプロパティを表示します。
-  をクリックし、名前、説明または子孫の数別に孤立ノードを検索します。
- 「ノード」、「取得/コピー」の順に選択し、選択したノードをクリップボードにコピーします。
- 「ダウンロード」を選択し、孤立ノードのリストをダウンロードするフォーマットを選択します。

孤立ノードの削除

孤立ノードを削除または破棄できます。破棄を選択すると、マージ要件とは関係なくノードは即時削除されます。孤立ノードを削除すると、ノード、およびノードとバージョン内の他のノードとの関係もすべて削除されます。

► 孤立ノードを削除するには:

1 「孤立」タブを選択します。

2 1つ以上のノードを選択します。

3 「ノード」から「削除」または「破棄」を選択します。

注： UseMerge システム・プリファレンスが有効である場合、「削除してマー
ジ」を選択してから、削除したノードのかわりに使用するノードを選択
できます。

4 「削除」または「破棄」コマンドを確認します。

孤立リストがリフレッシュされると、ノードは表示されなくなります。

ツリー・ビューでのナビゲート

次のツールバー・ボタンを使用して、ツリー・ビュー内をナビゲートします。

ツールバーのボタン	説明
	前に選択したノードにナビゲートします
	選択したノードの親にナビゲートします。
	ツリーを展開して、指定したレベルのすべてのノードを表示します

ノードの検索

選択したバージョンの任意の階層内のノードを検索できます。ワイルドカードお
よび完全一致検索を実行できます。検索結果は、ノードのリストとして表示した
り、階層ツリー内に配置できます。

孤立ノードはこれらの検索には含まれません。グローバル・クエリーを使用する
と、バージョン内のすべてのノードの検索を実行できます。

► バージョン内のノードを検索するには:

1 「参照」からバージョンを選択します。

2 「ノードの検索」タブを選択します。

3  をクリックし、検索方法を選択します。

- 「検索基準」 -- 名前または説明別にノードを検索します。
- 「ドメイン内の検索」 -- 指定したドメイン内のノードを検索します。

検索テキストは、「ドメイン・ノード名」値に対してのみ適用可能であり、
「コア.略語」には適用されません。

注： 「検索基準」 および 「ドメイン内の検索」 オプションは一緒に使用でき
ます。

4 検索対象のテキストを入力します。

注： ワイルドカード文字としてアスタリスク(*)を使用できます。また、完全
一致検索用のエスケープ文字としてバックスラッシュ(\)を使用すること
もできます。

5 「移動」をクリックします。

Versions ▾ 					
Name	Description	Type	Status	Saved	Load Status
 Accounts - 2010 09		Normal	Working		Loaded

Hierarchies Find Nodes Orphans			
 61* Go Node ▾ Related ▾ Download ▾    			
Select	Name	Description	Go
	CashFlow		
☐	 610000	Cash Ending Balance	
☐	 612000	Net Cash from Operations	
☐	 612100	Cash from Current Operations	
☐	 612200	Changes in Assets and Liabilities	
☐	 612210	Changes in Receivables	
☐	 612220	Changes in Inventory	

6 をクリックし、階層内のノードにナビゲートします。

▶ 階層内のノードを検索するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 階層を選択し、 をクリックします。

注： ノードの検索先の階層は複数開くことができます。

3 をクリックし、検索および結果の表示方法を選択します。

- 「検索基準」 -- 「名前」または「説明」
- 「ドメイン内の検索」 -- ドメインを選択してこのドメイン内でのみノードを検索します。
検索テキストは、「ドメイン・ノード名」値に対してのみ適用可能であり、「名前/コア.略語」には適用されません。
- 「結果の表示」 -- 「ツリーで検索」または「リストで表示」

4 検索対象のテキストを入力します。

注： ワイルドカード文字としてアスタリスク(*)を使用できます。

5 「移動」をクリックします。

注： 結果を階層ツリーに表示することを選択した場合、 をクリックすると次の結果に移動できます。

6 見つかったノードの1つを選択し、「関連」から「検索」を選択します。

ノードは、サイドバーの「関係」タブに表示されます。ノード名の上には、ノードが検索された階層およびバージョンがあります。

7 をクリックし、階層内のノードにナビゲートします。

ノード・セキュリティ

Data Relationship Management ユーザーは、階層内のノードおよび複数の階層にわたるノードに対する各種アクセス・レベルを割り当てることができます。ノードの「リム・アクセス」および「リーフ・アクセス」プロパティは、アクセス・レベルを示します。ノード・セキュリティ設定を割り当てることができるのは、アクセス管理権限を持つ Data Relationship Management ユーザーのみです。詳細は、Oracle Data Relationship Management Administrator's Guide のユーザー権限に関する項を参照してください。

共有ノードの使用

共有ノードは、同じ階層内のノードの複数のインスタンスです。共有ノードのグローバル・プロパティはプライマリ・ノードの値を自動的に参照します。グローバル・プロパティはプライマリ・ノードでのみ変更できます。ローカル・プロパティはプライマリ・ノードとは共有されず、各共有ノードに固有のプロパティです。

ノード	説明
プライマリ・ノード	階層およびバージョン内のノードのプライマリ・インスタンス。プライマリが存在しないバージョン内に共有ノードは存在できません。
明示的共有ノード	手動メンテナンス・プロセスまたはインポート・プロセス中に明示的に作成されるノードの重複インスタンス。これらのノードは、階層内のノードのプライマリ・インスタンスと区別するために特別な命名ルールを使用して定義されます。 手動メンテナンス・プロセスまたはインポート・プロセス中に作成される明示的共有ノードは、プライマリ・ノードとグローバル・プロパティ値を共有します。
暗黙的共有ノード	祖先の共有の結果として共有される明示的共有ノードの子孫。これらのノードは読取り専用であり、変更できません。

次が可能です:

- 共有ノードの代替命名の自動化
- 共有ノードをマップするシステム・レベルのプロパティの作成
- 共有ノードの下位の構造の表示
- 共有ノードとプライマリ・ノード間の移動
- プライマリ共有ノードの除去および削除
- プライマリ共有ノードの名前変更(これによるすべての共有ノードの名前変更)
- ナビゲーションと分析を目的として使用する共有ノード・リストの検索および表示

共有ノードが機能するのは、Data Relationship Management の次の領域のみです。

- ツリー・ビューの階層の参照
- ツリー・ビューでの「関連」および「共有ノード」メニューを使用した共有ノードの表示
- 「共有ノードを暗黙的に含める」オプションを使用したエクスポート

詳細は、次を参照してください:

- [共有ノードおよびドメイン](#)
- [共有ノード・プロパティ](#)
- [共有ノードの有効化](#)
- [共有ノードの追加および挿入](#)
- [共有ノードの除去および削除](#)
- [共有ノードの名前変更](#)
- [プライマリ・ノードへの共有ノードの変換](#)
- [共有ノードの表示](#)

共有ノードおよびドメイン

次に示す共有ノードおよびドメインに関する情報を理解することは重要です:

- 「ドメイン・メンバーシップ」メニュー・オプションは、共有ノード(明示的または暗黙的)では使用できません。
- プライマリ・ノードがドメインに追加されている場合、その共有ノードは同じドメイン属性を反映します。
- プライマリ・ノードの子は、読取り専用として表示された暗黙的ノードを持ち、プライマリ・ノードのドメイン属性を反映します。
- ドメイン・メンバーシップ・プロセスがバージョン・レベルから実行されると、共有ノードは、ドメインに追加されたとおりに表示しませんが、例外としてリストに表示します(例: ノード XXX は共有ノードで、ドメインに直接割り当ててはできません)。共有ノードは、プライマリ・ノードからドメイン属性を継承します。

共有ノード・プロパティ

次の読取り専用ノード・プロパティはノードの共有時に自動的に作成され、プライマリ・ノードおよび共有ノードに関する情報を提供します。

注: 共有ノード・プロパティを表示するには、「共有情報」プロパティ・カテゴリをユーザーに手動で割り当てる必要があります。詳細は、Oracle Data Relationship Management Administrator's Guide のユーザーの管理に関する項を参照してください。

プロパティ	説明
プライマリ・ノード	ノードにこのノードを指し示す共有ノードがあるかどうかを示します。
共有ノード	ノードが共有ノードであるかどうかを示します。
プライマリ・ノード名	共有ノード名のプライマリ名部分。非共有ノードの場合、このプロパティは、完全なノード名を返します。

プロパティ	説明
子孫を持つプライマリ・ノード	プライマリ・ノードの下に構造があるかどうかを示します。共有ノードにのみ移入されます。
プライマリ・ノードの子孫	プライマリ・ノードの子孫のリスト。プライマリ・ノードの下に構造がある共有ノードにのみ移入されます。
プライマリ・ノードの祖先	プライマリ・ノードの祖先のリスト。共有ノードにのみ移入されます。
共有マップ	共有ノードとプライマリ・ノードをマップする関連ノード・プロパティ。このプロパティは、共有ノードとプライマリ・ノードに移入されます。
プライマリ・ノード欠落	存在しないプライマリ・ノードを共有ノードが指し示しているかどうかを示します。
プライマリが階層になし	プライマリ・ノードが同じ階層内にあるかどうかを示します。

共有ノードの有効化

アプリケーション内で共有ノードを使用するには、SharedNodeMaintenanceEnabled システム・プリファレンスを有効化する必要があります。ノードを共有する階層では、EnableSharedNodes 階層プロパティを有効化する必要があります。これらの設定はデフォルトでは無効です。

注： 共有ノードを有効化する場合、デフォルトの共有ノードのシステム・プリファレンス(区切り文字、一意の文字列、ゼロ・パディング長)は変更しないでください。

システム・プリファレンスの構成の詳細は、Oracle Data Relationship Management Administrator's Guide を参照してください。

共有ノードの追加および挿入

追加または挿入メニュー・オプションを使用して、共有ノードを作成できます。共有ノードを作成するには、ノードがターゲット階層内にすでに存在するときに、階層全体にわたって「取得/配置」を実行します。横並びの比較結果で2つの階層間でドラッグ・アンド・ドロップを実行しても同じ結果を得ることができます。

注： 共有ノードを作成する前に、「[共有ノードの有効化](#)」が完了していることを確認してください。

► 共有ノードを追加するには:

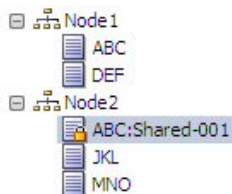
- 1 共有ノードを挿入するノードを選択します。
- 2 「ノード」から「追加」を選択します。
- 3 共有ノードがリーフである場合、「リーフ・ノード」を選択します。
- 4 追加する既存のノードの名前を入力します。

- 5 「ノードがすでに存在する場合は、そのノードを挿入」を選択します。
- 6 「追加形式」では、「子」または「兄弟」を選択します。
- 7 「OK」をクリックします。

▶ 共有ノードを挿入するには:

- 1 共有ノードを挿入するノードを選択します。
- 2 「ノード」から「挿入」を選択します。
- 3 「挿入元」では、「既存の階層」が選択されていることを確認します。
- 4 階層を選択します。
- 5 「ノード」リストから、共有するノードを選択します。
- 6 「挿入形式」では、「子」または「兄弟」を選択します。
- 7 「OK」をクリックします。

この例では、ノード ABC が Node1 の下ではプライマリ・ノードで、Node2 の下では共有ノードです。



共有ノードの除去および削除

共有ノードを除去すると、共有ノードのみが除去され、プライマリ・ノードは残ります。プライマリ・ノードが除去されて共有ノードは存在する場合、共有ノードは除去され、プライマリ・ノードは除去された共有ノードの親に移動します。複数の共有ノードが存在する場合、これらの共有ノードの1つがプライマリ・ノードになります。

バージョンからプライマリ・ノードを削除すると、プライマリ・ノードとそのすべての明示的共有ノードが削除されます。

▶ 共有ノードを除去または削除するには:

- 1 共有ノードを選択します。
- 2 「ノード」から「削除」または「除去」を選択します。
- 3 「ノードの削除」または「ノードの除去」を選択します。

階層ツリーがリフレッシュされると、共有ノードは表示されなくなります。

共有ノードの名前変更

名前変更操作はプライマリ・ノードでのみ実行できます。プライマリ・ノードの名前を変更すると、プライマリ・ノードと共有ノードの名前が変更されます。

▶ 共有ノードを名前変更するには:

- 1 プライマリ・ノードを選択します。
- 2 プロパティ・グリッドで、「名前」値フィールドを選択します。
- 3 名前を変更して、「保存」をクリックします。

階層がリフレッシュされると、プライマリ・ノード名と共有ノード名が新しい名前でも更新されます。

プライマリ・ノードへの共有ノードの変換

プライマリ・ノードと共有ノードは階層の異なる分岐内に配置されていることがあるため、プライマリ・ノードを特定の分岐に配置する方がよい場合があります。プライマリ・ノードを配置する必要がある場所で明示的共有ノードが作成されている場合は、共有ノードをプライマリ・ノードに変換することにより、階層内におけるこれらの場所を1回の操作で切り替えることができます。

▶ 共有ノードをプライマリ・ノードに変換するには:

- 1 共有ノードを選択します。
- 2 「ノード」から「プライマリに変換」を選択します。

階層がリフレッシュされると、選択した共有ノードがプライマリ・ノード・アイコンを使用して表示されます。

共有ノードの表示

▶ ノードのプライマリ・ノード、明示的共有ノードおよび暗黙的共有ノードを表示するには:

- 1 ノードを選択します。
- 2 「関連」から「共有ノード」を選択します。

「関係」タブにプライマリ・ノードと共有ノードが表示されます。

この章の内容

プロパティ・カテゴリ	57
プロパティ値の範囲および元	59
プロパティ・ステータス	60
プロパティ値の編集	61
プロパティのフィルタ	62

プロパティは、バージョン、階層またはノードの属性です。コア・プロパティは、標準製品機能に使用される属性を管理します。アプリケーション管理者は、カスタム・プロパティを追加することにより、サブスクライブ・システムおよびビジネス・プロセスのサポートに必要な追加属性を管理できます。

プロパティは、「プロパティ」タブでバージョン、階層またはノードに対して表示されます。

プロパティ・カテゴリ

バージョン、階層およびノードのプロパティは、カテゴリごとに編成されます。各プロパティ・カテゴリは、特定の外部システム(Oracle Hyperion Planning や Oracle Essbase など)や会社内の特定の機能領域に属するプロパティなど、論理的に関連するプロパティ・セットを表します。アプリケーション管理者は、プロパティ・カテゴリを必要な数だけ作成できます。Data Relationship Management には、デフォルトのプロパティ・カテゴリがあります。

表 5 デフォルトのプロパティ・カテゴリ

カテゴリ	説明
システム	ID、名前および説明など、ノードの識別特性に関連するプロパティ。 このカテゴリで変更できるのは、個々のユーザーに対する読取り専用フラグの割当てのみです。読取り専用アクセス権を持つユーザーは、カテゴリ内の値を編集できませんが、見ることはできます。 注： このカテゴリにプロパティを割り当てることはできません。
統計	子の数や兄弟の数などノードの統計情報を示すプロパティ このカテゴリはノードに対してのみ使用可能です。
検証	ノードに割り当てられる検証; 検証ごとに 1 つのプロパティ このカテゴリはノードに対してのみ使用可能です。

カテゴリ	説明
リーフ・アクセス	ノードのノード・セキュリティ・グループとそのリーフ・アクセス・レベル; グループごとに 1 つのプロパティ このカテゴリはノードに対してのみ使用可能です。
リム・アクセス	ノードのノード・セキュリティ・グループとそのリム・アクセス・レベル; グループごとに 1 つのプロパティ このカテゴリはノードに対してのみ使用可能です。

様々なプロパティ・カテゴリに対して様々なアクセス・レベルを設定できます。表示可能なカテゴリはドロップダウン・リストに表示されます。編集可能なカテゴリでは、上書きされた値をサポートしているプロパティを変更できます。「検証」、「リーフ・アクセス」および「リム・アクセス」カテゴリを使用できるのは、データ・マネージャ役割を持つユーザーのみです。

システム・プロパティ

次の表に、ノード・レベルで通常表示されるシステム・プロパティを示します。

表 6 システム・プロパティ

プロパティ	定義
説明	ノードの説明
文字列の表示	階層内のノードを表示するために使用される結合プロパティの値。「デフォルトの表示基準」および「ユーザーの表示基準」プロパティによって管理されます。
ドメイン名	ノードがメンバーであるドメインの名前
ドメイン・ノードの非アクティブ日	ドメイン・ノードが非アクティブであると宣言するよう指定した日付
ドメイン・ノード名	ドメイン内のノードの名前。この値にドメイン修飾子は含まれません。
ドメイン・ノードの説明	ドメイン・ノードが存在する任意のバージョン内でこのドメイン・ノードに定義された最新の説明
リーフ	- True の場合、ノードはリーフ・ノードであり、子を持つことはできません。 - False の場合、ノードはリム・ノードであり、子を持つことができます。
リーフ・アクセス	ノードに対する現在のユーザーのアクセス・レベルを示します(ノードがリーフである場合のみ適用されます)。
リム・アクセス	ノードに対する現在のユーザーのアクセス・レベルを示します(ノードがリムである場合のみ適用されます)。
名前	バージョン内のノードの一意の名前
ノード ID	システムによって生成されたノードの一意の数値識別子
ノード URL	外部リソースからノードに直接アクセスするための URL ハイパーリンク

統計プロパティ

次の表に、ノード・レベルで表示される統計プロパティを示します。

表 7 統計プロパティ

プロパティ	定義
子の数	ノードの数(1 レベル下位)
子孫の数	下位のノードの合計数(すべてのレベル)
リーフの子の数	子を持つことができない子ノードの数
リーフ子孫の数	子を持つことができない子孫の数
リーフ兄弟の数	子を持つことができない兄弟の数
リムの子の数	子を持つことができる子の数
リム子孫の数	子を持つことができる子孫の数
リム兄弟の数	子を持つことができる兄弟の数
リンクの数	ノードが存在する他の階層の数
兄弟の数	このノードと同じ親を持つノードの数
追加者	ノードを作成したユーザー
追加日	ノードが作成された日時
祖先リスト	親ノードから階層の最上位ノードまでの祖先ノードのリスト
最終変更者	ノードを最後に変更したユーザー
最終変更日	ノードが最後に変更された日時
レベル	最上位ノードがレベル 1 である階層内のノードの数値レベル
リンク済み	少なくとも 1 つの他の階層にノードが存在するかどうかを示すフラグ
リンク	ノードが存在する他のすべての階層のリスト(現在の階層を除く)
ノード変更	バージョンの作成後にノードが変更されたかどうかを示す True または False
参照	ノードが存在するすべての階層のリスト(現在の階層を含む)

プロパティ値の範囲および元

プロパティ・グリッドでは、各プロパティの左側に 2 つのアイコンが表示されます。最初のアイコンは、プロパティの範囲、およびプロパティによる値の継承の可能性を示します。2 番目のアイコンは、プロパティ値の元を示します。

表 8 プロパティの範囲アイコン

プロパティの範囲	説明
グローバル 	プロパティ値は、バージョン内のすべての階層にわたって一定です。
ローカル 	プロパティ値は、プロパティが存在する階層に固有です。
グローバル継承済 	プロパティ値はグローバルで、プロパティの制御階層内の祖先ノードから継承されています。
ローカル継承済 	プロパティ値はローカルで、現在の階層内の祖先ノードから継承されています。

表 9 プロパティの元値

プロパティの元	説明
デフォルト 	プロパティ値は、(アプリケーション管理者によって設定された)デフォルト値によって移入されます。デフォルト値が使用されるのは、次の場合です。 ● プロパティが非継承型であり、値を入力していない場合。 ● プロパティが継承型だが祖先値が見つからない場合。
継承 	プロパティ値は、祖先ノードによって提供されています。(「ステータス」列には、祖先ノードの名前、および継承値の元の階層が表示されます。)
上書き済 	プロパティ値は、このノードでユーザーによって設定されました。
導出 	プロパティ値は、他のプロパティ値から導出(計算)されます。
ロック済 	現在のノードのプロパティ値はロックされており、このプロパティ値を継承する子孫ノードでは変更できません。 このプロパティ値を子孫ノードで表示すると、そのステータスは「静的」アイコンで示されます。
静的 	プロパティ値は、値がロックされている祖先ノードから継承されています。 ● このため、値を子孫ノードで変更することはできません。 ● 「プロパティ」ウィンドウの「ステータス」列には、祖先ノードの名前、および継承値の元の階層が表示されます。

プロパティ・ステータス

プロパティ・グリッドの「ステータス」列には、祖先ノードの名前、および継承値の元の階層が表示されます。プロパティの編集時には、この列に、値の編集方

法を表すステータス・メッセージも表示されます。次の表に、プロパティ・ステータスの説明を示します。

表 10 プロパティ・ステータス

プロパティ・ステータス	定義
下をすべて消去	選択したプロパティの下をすべて消去することが要求されています。継承値を上書きしたすべての子孫ノードで値を消去します。
ロック済	プロパティの分類がロック済に変更されています。
変更された値	値は変更されています。
重複の除去	選択したプロパティの重複を除去することが要求されています。ノードとその子の任意の等価値を除去します。
値を除去	値は除去されています;「上書き済」プロパティ値にのみ適用されます。
ロック解除済	プロパティの分類は「ロック解除済」に変更されており、このプロパティを継承する子孫ノードで値を変更できます。

プロパティ値の編集

プロパティ・エディタでグレー表示されているプロパティは読取り専用であり、変更できません。次のいずれかの条件が存在する場合、プロパティ値は編集できません。

- プロパティに導出値がある場合。たとえば、子ノードの合計数を示すプロパティは Data Relationship Management によって導出されており、編集できません。
- ユーザーに、値の編集に適したセキュリティ権限がない場合。
- プロパティ値が、値がロックされている祖先ノードから継承されている場合。

▶ プロパティ値を編集するには:

- 1 プロパティ・グリッドでプロパティを選択します。
- 2 プロパティの「値」フィールドをクリックし、変更を行います。

注: 編集できるのは、グレー表示されていないプロパティのみです。

- 3 「オプション:」 「プロパティ」で、「プロパティ」メニューからアクションを選択します。
 - 「コピー」 --プロパティ値をコピーします。
 - 「値を除去」 --上書きされたプロパティ値を除去します
 - 「重複の除去」 --定義された標準プロパティの場合、ノードとその子でデフォルト値と等しい任意の値を除去します。継承プロパティの場合、ノードとその子で継承された値と等しい任意の値を除去します。導出された読取り/書込みプロパティの場合、ノードとその子で導出された値と等しい任意の値を除去します。

- 「下をすべて消去」 --継承された値を上書きしたすべての子孫ノードで値を消去し、この値を継承ルールデフォルト値に置き換えます
- 「ロック」 --継承子孫ノードで値の変更を阻止します。

注： ロックできるのは、継承プロパティ値のみです。

ロックの適用前に、継承された子孫ノードの値が上書きされていた場合、このノードはロックの影響を受けません。すべての子孫に影響を及ぼすには、「ロックして下をすべて消去」オプションを使用します。

- 「ロックして下をすべて消去」 --継承子孫ノードの値の変更を阻止し、これには、継承された値が上書きされている任意の子孫ノードも含まれます。

4 次のいずれかのアクションを行います。

- 「保存」をクリックして、変更を保存します。
- 変更を保存せずに「取消し」をクリックして終了します。

プロパティのフィルタ

デフォルトでは、アプリケーションのすべてのノードでノード・レベルのプロパティをすべて使用できます。階層に対してノード・タイプが有効である場合、階層のノードに表示されるプロパティは自動的にフィルタされ、このノード・タイプに適したプロパティにのみ制限されます。カテゴリに表示されるプロパティは、フィルタ行を使用してラベルまたは値別にフィルタできます。データ・マネージャ役割ユーザーは、プロパティに対するノード・タイプ・フィルタを無効化することにより、階層全体のノード・タイプを無効化しなくても、ノードのすべてのプロパティを表示できます。

▶ プロパティをラベルまたは値によってフィルタするには:

- 1 プロパティ・グリッドで、、「フィルタ行の表示」の順にクリックします。
- 2 「ラベル」または「値」テキスト・ボックスで、フィルタ基準となるテキストを入力し、「[Enter]」を押します。

▶ ノード・タイプ別のプロパティのフィルタを無効化するには、プロパティ・グリッドで、、「すべてのプロパティの表示」の順にクリックします。

この章の内容

バージョンの検証	64
階層の検証.....	64
ノードの検証.....	64
検証結果の操作	65

バージョン、階層、ノードおよびこれらのプロパティは、Data Relationship Management 検証を使用してデータ整合性が確認されます。検証は、リアルタイム、バッチ、またはその両方のモードで操作できます。検証を実行するモードは、検証レベル、作成時に指定した操作で選択したモード、およびバージョン、階層またはノードへの割当て時に指定した操作で選択したモードに基づいて制限できます。

リアルタイム検証は、階層ノードに対して変更が行われる際に実行され、検証が失敗した場合は変更の適用が阻止されます。リアルタイム検証を実行するには、バージョン・レベル、階層レベルまたはノード・レベルでリアルタイム検証を事前に割り当てる必要があります。検証は、現在のノードとその親ノードに対して実行されます。検証対象のノードが変更対象の階層内にのみ配置されている場合、この階層に対する検証のみが実行されます。検証対象のノードが他の階層内にも配置されている場合、これらの他の階層に影響するグローバル変更に対してもリアルタイム検証が実行されます。

バッチ検証は、バージョン・レベル、階層レベルまたはノード・レベルでユーザーによって明示的に実行されます。選択した検証セットを実行することも、データに割り当てられているすべての検証を実行することもできます。バージョン・バッチ検証は、バージョン内のすべての階層およびノードに対して実行できます。階層バッチ検証は、階層内のすべてのノードに対して実行できます。ノード・バッチ検証は、現在のノードに対してのみ実行できます。エクスポート・バッチ検証は、エクスポート・プロファイルに関連付けられた階層およびノードに対して実行できます。

ノード・レベルで実行されるリアルタイム検証とバッチ検証は両方とも、ノード・タイプを使用してフィルタできます。階層に対してノード・タイプが有効である場合、この階層のノードに対して実行される検証は、各ノードのノード・タイプに割り当てられた検証にのみ制限されます。ノード・タイプの詳細は、Oracle Data Relationship Management Administrator's Guide を参照してください。

バージョンの検証

▶ バージョン・バッチ検証を実行するには:

- 1 「参照」からバージョンを選択します。
- 2 「バージョン」から、アクションを選択します。
 - 「検証」、「選択済」の順に選択し、実行する検証を選択します。
 - 「検証」、「割当て済」の順に選択し、バージョンに割り当てられたバッチ検証を即時実行します。
- 3 「検証」、「選択済」の順に選択した場合、実行する検証を選択し、「OK」をクリックします。

注：「割当て済」を使用すると、割り当てられている検証をすべて選択できます。

バージョンと階層の検証結果は、ホーム・ページ上の個別タブに表示されます。結果は検証レベル別にグループ化されます。階層ノード結果は、階層を開いたときに個別タブに表示されます。

階層の検証

▶ 階層バッチ検証を実行するには:

- 1 「参照」から、バージョンおよび階層を選択します。
- 2 「階層」から、アクションを選択します。
 - 「検証」、「選択済」の順に選択し、実行する検証を選択します。
 - 「検証」、「割当て済」の順に選択し、階層に割り当てられた検証を即時実行します。
- 3 「検証」、「選択済」の順に選択した場合、実行する検証を選択し、「OK」をクリックします。

注：「割当て済」を使用すると、割り当てられている検証をすべて選択できます。

ノードの検証

▶ ノード・バッチ検証を実行するには:

- 1 「参照」から、バージョンおよび階層を選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 「ノード」からアクションを選択します。
 - 「検証」、「選択済」の順に選択し、実行する検証を選択します。

- 「検証」、「割当て済」の順に選択し、ノードに割り当てられた検証を即時実行します。
- 4 「検証」、「選択済」の順に選択した場合、実行する検証を選択し、「OK」をクリックします。

注：「割当て済」を使用すると、割り当てられている検証をすべて選択できます。

検証結果の操作

検証結果は、次の方法で操作できます：

- リスト・ビューでのバージョンおよび階層結果のナビゲート
- リスト・ビューでのノード結果のナビゲート
- ツリー・ビューでのノード結果のナビゲート
- ノード結果のダウンロード
- 検証結果の消去

リスト・ビューでのバージョンおよび階層結果のナビゲート

バッチ検証結果は、ホーム・ページの「検証結果」タブ上のリストに表示されます。検証失敗メッセージは、バージョンおよび階層別にグループ化されます。階層検証結果からノード・レベルの検証結果にナビゲートできます。

リスト・ビューでのノード結果のナビゲート

バッチ検証に失敗したノードは、オープン階層の「検証結果」タブ上のリストに表示されます。各ノードの失敗メッセージを表示するには、ノード行の横にあるプラス記号をクリックします。検証結果から選択したノードのプロパティを直接編集できます。

「ノード」メニューから、次のオプションを選択できます。

- 「取得」 - ノードをクリップボードにコピーし、ここから別の場所へのノードの挿入、移動、順序変更、またはノードのプロパティの貼付けを行うことができます。
- 「ノードに移動」：ツリー・ビューで選択したノードに移動できます。
- 「フィルタ行の表示」：リストをフィルタするために使用できる空の行を開きます。
- 「プロパティ」：「プロパティ」タブにノード・プロパティを表示します。

ツリー・ビューでのノード結果のナビゲート

オープン階層の「ツリー」タブには、バッチ検証に失敗したノードが、各ノード行の左側に赤い感嘆符が付いた状態で表示されます。

次のツールバー・ボタンを使用できます。

ツールバーのボタン	説明
	選択したノードの親にナビゲートします。
	前に選択したマークされているノードにナビゲートします。
	マークされている次のノードにナビゲートします。
	ツリーを展開して、マークされているノードを表示します。
	マークされているノードを消去します。

ノード結果のダウンロード

リスト・ビューおよびツリー・ビューから、検証結果を次のファイル・タイプにダウンロードできます。

- Portable Document Format (PDF)
- Rich Text Document (RTF)
- スプレッドシート(XLS)

注： リスト・ビューでは、CSV ファイルにダウンロードすることもできます。

▶ リスト・ビューでクエリー結果をダウンロードするには:

- 1 「ダウンロード」から、ファイル・タイプを選択します。
- 2 「保存」をクリックします。
- 3 ドキュメントをダウンロードするディレクトリを参照し、ドキュメントの名前を入力し、「保存」をクリックします。

検証結果の消去

バッチ検証結果を表示から除去するには、バージョン・レベルまたは階層レベルでこれらを消去します。

▶ バージョンおよびバージョン内のすべての階層の検証結果を消去するには:

- 1 バージョンを選択します。
- 2 「バージョン」から、「検証結果の消去」を選択します。

検索結果は、バージョン、階層またはバージョン内のノードに対して表示されなくなります。

▶ 階層およびそのすべてのノードの検証結果を消去するには:

- 1 バージョンおよび階層を選択します。
- 2 「階層」から、「検証結果の消去」を選択します。

この章の内容

ワークフロー・モデル.....	69
要求の操作.....	70
要求のライフサイクル.....	73
ワークリストの移動.....	78
プロセス・コントロールおよび自動化.....	81
アラートおよび通知.....	83

データ・ガバナンスは、情報をエンタープライズ内の資産として扱うことに関連するデータ品質、データ管理、データ・ポリシー、ビジネス・プロセス管理およびリスク管理が一元的に行われることを表します。データ・ガバナンスを行うことにより、組織は、データ・スチュワードやデータ保管者がデータを処理するために使用するプロセスおよび方法を積極的に管理できます。

Data Relationship Management では、Oracle Data Relationship Governance モジュールが、次に示す 2 つのクリティカルな方法でガバナンスの課題に対応します：

- マスター・データに対する変更の作成と管理に関連付けられたプロセスの作成、管理および自動化に、業種や部門、職務の異なるビジネス・ユーザーが貢献できるようにする変更要求管理プロセスを組織が構成できるようにします。
- データ・スチュワードや保管者が、データ品質に関連する問題--欠落している、誤りがある、または標準ではない情報など--を識別できるようにし、データ・アクセス権限に基づいて、それらの問題を一番よく修正または対応できる、組織内の利害関係者にルーティングします。

ガバナンス・ワークフローを使用すると、繰り返し可能なビジネス・プロセスを使用して、データ・スチュワードがデータ変更の入力、検証および承認を管理できるようになり、質の高いデータ、ポリシー準拠、ユーザーのコラボレーション、およびビジネス・コミュニティ全体での意識の変化を実現できます。

ワークフロー・モデル

ワークフロー・モデルは、Data Relationship Management のデータに対する特定の変更セットの管理に関連するユーザー・タスク、ワークフローのステージおよびデータのタイプを制御します。各要求では、ワークフロー・モデルを使用して次を決定します：

- 実行されるワークフロー・タスク

- 完了するワークフロー・ステージ
- 要求を操作できるユーザー・グループ
- 承認方法および順序
- ユーザーが要求について通知される方法とタイミング
- 要求で使用可能なノードのバージョン、階層およびタイプ
- 要求の完了に要する時間の長さ

詳細は、次を参照してください:

- [ワークフロー・タスク](#)
- [ワークフロー・ステージ](#)

ワークフロー・タスク

ワークフロー・タスクは、タスクの際に表示、編集および要求される一連のプロパティとともに、実行される変更アクションを表します。ワークフロー・タスクはワークフロー・モデルの外で定義され、別のビジネス・プロセスで実行される共通タスクの一貫性を保つために、複数のモデルで使用できます。

ワークフロー・ステージ

ワークフロー・モデルは、複数のワークフロー・ステージで構成されています。ステージがワークフロー・モデル用に定義されている場合、ステージ・タイプは、ワークフローのそのステージにおけるユーザーに対して、参加のレベルを定義します。ワークフロー・モデルには、次のものがあります:

- 可能なワークフロー・タスクのリストで定義されている単一の送信ステージ(変更の送信に使用できます)
- 承認またはエンリッチメントの一連のオプション・ステージ(それぞれが単一のワークフロー・タスクで構成されています)
- 最終承認と実行されたすべてのワークフロー・タスクのコミットに使用される単一のコミット・ステージ

要求の操作

要求は、ガバナンス・ワークフローを使用して、その他の Data Relationship Management ユーザーによって完了、承認、エンリッチおよびコミットされる変更を開始するために使用されます。要求は、その要求が検証、承認およびコミットされた後に実行される、特定のデータ・セットへの変更のコレクションを表します。各要求は、単一のワークフロー・モデルを使用して、要求に参加するユーザー、そのユーザーが参加する時期、およびその参加タイプを制御します。

詳細は、次を参照してください:

- [要求の変更](#)
- [改善要求](#)

- [要求アイテム](#)
- [アイテム詳細](#)
- [要求アクティビティ](#)
- [要求アクション](#)

要求の変更

変更要求は、データ・セット、およびデータ・セットとともに使用するために構成されているワークフロー・モデルの両方に送信アクセス権を持つガバナンス・ユーザーによって送信されます。通常、データおよびワークフロー・モデルに対する送信アクセス権を付与されているユーザーは、そのモデルを使用して管理されるデータの変更要求を開始するユーザーです。

改善要求

改善要求は、別のユーザーが実行する修正アクションを開始するために使用されます。改善要求を送信できるのは、ガバナンス・ユーザーであり、かつデータ・セットとワークフロー・モデルに対する読取りインタラクティブ・アクセス権と送信ワークフロー・アクセス権を付与されているインタラクティブ・ユーザーです。改善要求は通常、バッチ検証、クエリー、比較など、別の操作の結果から作成されます。それらの結果のノードを、ノード・クリップボードを使用して改善要求に追加できます。

要求アイテム

ワークフロー・タスクは、Data Relationship Management バージョンの階層ノードに対して実行される一連の変更を定義します。ワークフロー・モデルの各ステージは、そのモデルを使用して要求のステージに適用可能なタスクを識別します。ワークフロー・タスクは、要求アイテムを追加または編集することによって要求の間に実行されます。要求は、要求の最初の送信、またはその後の要求のエンリッチメント時に追加される、1つ以上の要求アイテムで構成されます。送信またはエンリッチ・ワークフロー・ステージの間に、追加のタスクを実行するための要求に、新しい要求アイテムを追加できます。エンリッチ・ステージの間に、ワークフロー・ステージに割り当てられた更新タスクを使用して、前のステージで追加された要求アイテムを編集できます。要求アイテムを削除できるのは、その要求アイテムに一致するワークフロー・タスクがあるワークフロー・ステージの間のみです。要求における要求アイテムの順序は、ターゲット・バージョンに適用される要求の変更順序を、検証およびコミットの目的で制御するため重要です。

アイテム詳細

プロパティ詳細は、要求の選択された要求アイテムに表示されます。表示および編集が可能なプロパティは、各要求アイテムのワークフロー・タスクまたは現在のワークフロー・ステージのタスクによって制御されます。新しい階層ノードが作成される要求アイテムに対しては、提案された新しい値の単一の列が表示されます。既存の階層ノードを参照する要求アイテムに対しては、2列の値(現在と新規)が表示されます。「現在の値」列には既存のプロパティ値が表示され、「新規の

値」列には変更されたプロパティ値が表示されます。変更されたプロパティは、識別しやすいようにマークされます。計算されたプロパティ値は、読取り専用として表示されます。迅速に解決できるよう、プロパティには検証の失敗がタグ付けされています。要求アイテムからプロパティの更新を削除するには、前の値に戻すリンクをクリックします。

要求アクティビティ

要求に対して実行されるすべてのアクティビティは、要求アクティビティに記録されます。これらのアクティビティには、要求の送信、承認、エンリッチなどのユーザー・アクティビティ、および要求の割当てやコミットなど、システムが開始したアクティビティが含まれます。ユーザー・コメントも要求アクティビティとして記録されます。各アクティビティには、該当する場合は、タイムスタンプとユーザー名が含まれます。アクティビティは、最新のアクティビティとともにリストの最上位に表示されます。

要求アクション

要求を処理する際、ページ・ヘッダーの右上にあるアクション・ボタンを使用すると、要求に対してアクションを実行できます。特定のアクションは、状況に応じてのみ使用可能になります。次の表ではアクションを説明し、対応するアクション・ボタンを示します。

アクション・ボタン	説明
保存 	要求の検証または承認は行わず、要求を現在の状態で Data Relationship Management リポジトリに保存します このアクションは、新しい要求および請求済の要求に使用できます。
送信 	要求の要求アイテムを検証し、成功したら、要求をワークフロー・パスの次のステージに割り当てます このアクションはドラフト要求、または送信者にプッシュバックされた要求に使用できます。
計算 	要求の提案された変更に基づいて、要求アイテムの詳細を計算します
検証 	要求の要求アイテムに対する提案された変更を検証します このアクションは必要な値を確認し、要求アイテムまたは現在のワークフロー・ステージのタスクに構成されているバッチ検証を実行します。検証の失敗は修正のために戻されます。 次の場合に要求を検証できます: ● 要求のワークフロー・ステータスがドラフトで、要求アイテムが少なくとも 1 つある ● 要求のワークフロー・ステータスが請求済である

アクション・ボタン	説明
コピー 	要求アイテムを新しい要求にコピーします 要求をコピーするには、選択したタイプの要求を送信するアクセス権が必要です。
請求 	アクティブ・ワークフロー・ステージに要求を請求します。 送信された要求の編集、プッシュバック、エスカレート、承認または拒否を実行できるのは、その要求を請求したユーザーのみです。ユーザーが要求を請求するとその要求がロックされ、その他のユーザーは請求できなくなります。別のユーザーが請求できるようにするには、要求を解放して未請求にする必要があります。
未請求 	請求されたロックを要求から削除しますが、別のステージ、ユーザーまたはグループに対する要求の検証や割当ては行われません ユーザーが要求のプッシュバック、エスカレート、承認または拒否を選択した場合、要求は自動的に未請求になります。
プッシュバック 	要求の一部の要素の修正、または要求に関する情報の追加を求めるために、現在または前のステージにおける前のユーザーに要求をプッシュバックします 要求をプッシュバックするユーザーは、要求がプッシュバックされた理由に関するコメントを指定する必要があります。
エスカレート 	データ・マネージャの役割を持つユーザーに要求をエスカレートします ユーザーは様々な理由で要求をエスカレートします;たとえば、要求の処理方法がわからない場合や、アクセスの問題がある場合です。データ・マネージャは、要求へのコメントの追加、要求アイテムの変更、階層およびノードへのノード・アクセス・グループの割当ての変更、または要求の拒否を行うことで問題を解決できます。
エスカレート解除 	現在のワークフロー・ステージの次のノード・アクセス・グループに再度要求を割り当てます
承認 	要求の変更を、ターゲット・バージョンに承認してコミットします
却下 	要求を却下します ワークフロー・パスの承認ユーザーにより、送信された要求が拒否される場合があります。要求を拒否すると、その要求が送信者に再度割り当てられ、その要求のワークフローが終了します。拒否された要求は再送信できません。拒否された要求の要求アイテムを再送信するには、拒否された要求を新しいドラフト要求にコピーし、新しい要求の要求アイテムを編集して、新しい要求を送信します。

要求のライフサイクル

要求のライフサイクルは、ワークフロー・モデルによって決まります。ワークフロー・モデルは、ワークフローのステージ、実行できるタスク、および要求に参加できるユーザーを制御します。ライフサイクルの間、要求は少なくとも2つの

ワークフロー・ステージ(送信およびコミット)を通過しますが、モデルによっては、コミットされるまでに、その他の承認またはエンリッチメント・ステージを通過する必要があります。参加している各ユーザーが実行できるアクションは、それらのユーザーが参加しているステージと、要求アイテムが参照するデータへのワークフロー・アクセス権によって変わります。

詳細は、次を参照してください:

- [要求の作成](#)
- [要求の送信](#)
- [要求の請求](#)
- [要求の承認](#)
- [要求のエンリッチ](#)
- [要求のプッシュバック](#)
- [要求のエスカレート](#)
- [要求のコミット](#)
- [要求の拒否](#)

要求の作成

要求は、ワークフロー・モデルの最初の送信ステージに割り当てられているガバナンス・ユーザーまたはデータ・マネージャによって作成されます。作成したユーザーは、要求に要求アイテムを追加し、ワークフロー・ステージで使用可能なタスクを実行できます。要求アイテムを追加したら、その要求をドラフト要求として保存できます。

➤ ワークリストから要求を作成するには:

- 1 「ワークリスト」ページから、「新規要求」をクリックし、要求に使用するワークフロー・モデルを選択します。
- 2 要求のターゲット・バージョンを選択します。

注: ワークフロー・モデルにバージョン変数を使用されている場合は、そのバージョンが事前に選択されており、読取り専用ラベルとして表示され、変更できません。

- 3 「アイテムの追加」をクリックします。
- 4 シナリオに応じて、「アイテムの追加」ダイアログ・ボックスには、次に示す 1 つ以上のフィールドが表示されます。要求アイテムの有効な情報を選択します:
 - 「タスク」 -- リストからタスクを選択します。
 - 「階層」 -- 階層を選択して、特定の階層の検索と参照を制限します。
 - 「検索」 -- テキスト値を入力して「検索」をクリックします。検索結果が「使用可能」リストに表示されます。
 - 「参照」 -- 選択した階層の構造を参照するか、検索を実行します。検索結果は階層構造に表示されます。

- 「アイテム」 --既存の要求アイテムに使用されるノードのリストから選択します。このリストを使用すると、同じノードの複数の要求アイテムを1つの要求に含めることができます。
- 「クリップボード」 -- 「参照」、「クエリー」または「比較」 ページから取得され、クリップボードにコピーされたノードのリストから選択します。
- 「使用可能」 リスト、「選択済」 リスト --選択したリストにノードを移動します。

5 「OK」 をクリックします。

6 ページの「アイテムの詳細」 セクションで、要求アイテムの新規プロパティ値を定義します。

注： 必須の値はアスタリスクでマークされています。

7 「更新」 をクリックして、選択した要求アイテムに対する変更を一時的に保存します。選択した要求アイテムに行われた変更を破棄するには、「取消し」 をクリックします。

ヒント： 更新されたプロパティは変更済とマークされます。要求アイテムからプロパティの更新を削除するには、 をクリックします。

8 要求にアイテムを追加するにはステップ 3-7 を繰り返します。

9  をクリックして要求のタイトルを入力し、「OK」 をクリックします。

要求の送信

要求を作成して保存したら、その要求のワークフロー・モデルを使用しているその他のガバナンス・ユーザーによる承認、エンリッチメントおよびコミットのために、その要求を送信できます。要求には少なくとも1つの要求アイテムを追加し、必要なすべての値を指定して、すべての要求アイテムで正常に検証を通過する必要があります。要求が送信されたら、要求はワークフロー・モデルの次のワークフロー・ステージに移動され、送信したユーザーはその要求を編集できなくなります。ガバナンス・ユーザーは、送信した要求の進行状況を「ワークリスト」 ページから追跡できます。

► 要求を送信するには:

1 要求を作成するか、ドラフト済の要求を開きます。

2  をクリックします。

要求の請求

ワークフロー・ステージに要求が割り当てられると、そのステージに関連付けられているすべてのユーザー・グループに要求が割り当てられます。その他のアクションを実行できるようにするには、割り当てられた要求をユーザーが請求する必要があります。割り当てられた要求を請求するユーザーは、割り当てられたその他のユーザーがその要求を使用できないようにして請求します。要求が請求さ

れている間、ユーザーは、アクティブ・ワークフロー・ステージに基づいて、使用可能な任意の操作を実行できます。ユーザーが要求の承認、プッシュバック、エスカレートまたは拒否を行うと、要求は自動的に未請求になり、そのワークフロー・ステージの要求にアクションを実行できなくなります。ユーザーがタスクを完了し、要求の承認、プッシュバック、エスカレートまたは拒否を行わない場合は、要求を未請求にするオプションがあります。要求を未請求にすると、割り当てられたその他のユーザーが、アクティブなワークフロー・ステージに請求するために要求を使用できるようになります。

▶ 要求を請求するには:

1 送信された要求を開きます。

2  をクリックします。

要求の承認

すべての要求アイテムに対する適切なワークフロー・データのアクセス権を持ち、要求のワークフロー・モデルに関連付けられているガバナンス・ユーザーは、使用可能な承認者として割り当てられます。要求を請求するすべての参加者が、要求の実際の承認者になります。要求の承認は、ユーザーが割り当てられたタスクをワークフロー・ステージ中に実行し、要求がコミットに向けて続行されることに同意していることを意味します。要求のすべての要求アイテムに必要な値が指定され、ワークフロー・ステージのアクティブな検証を渡す必要があります。要求を承認すると、ユーザーのステージへの参加が正常に完了します。承認ワークフロー・ステージのユーザーは承認を行うことはできますが、要求の要求アイテムを変更することはできません。

▶ 要求を承認するには:

1 請求された要求を開きます。

2 割り当てられたタスクを実行します。

3  をクリックします。

要求のエンリッチ

エンリッチメント・ステージは、送信中に追加された要求アイテムの更新、別の階層にある同じノードにローカルな変更を行うための要求アイテムの追加、または関連する様々なノードに対する全体的な変更を行うために使用されます。エンリッチメント・ステージに存在できるのは、ワークフロー・タスク 1 つのみです。ユーザーがエンリッチメント・ステージに対して要求を請求すると、そのステージに割り当てられたアクティブなワークフロー・タスクに基づいて要求アイテムを編集できます。アクティブなワークフロー・タスクで、ユーザーが別のワークフロー・ステージで追加した既存の要求アイテムの更新のみを許可する場合は、データに対するユーザーのワークフロー・アクセス権に基づいてアクセス可能なすべての要求アイテムのアイテム詳細を編集できます。ステージのアクティブなワークフロー・タスクで、新しい値の追加や階層関係の保持など、その他のタイ

プのデータ変更を実行する場合は、要求に新しい要求アイテムを追加できますが、前のステージで追加された要求アイテムは変更できません。

要求がエンリッチされたら、要求への変更を保存して検証する必要があります。場合によっては、要求アイテムに、計算済で編集できない詳細値が含まれることがあります。要求の変更に基づいて計算された値を表示するには、要求を計算する必要があります。

▶ 要求をエンリッチするには:

- 1 請求された要求を開きます。
- 2 要求アイテムを更新します。
- 3  をクリックします。

要求のプッシュバック

要求の目的、精度または不完全性について問い合わせるには、請求された要求を承認者が前のワークフロー・ステージにプッシュバックします。プッシュバック中、承認者が要求を割り当てるステージを選択すると、要求をプッシュバックした理由を示すコメントの入力を求められます。要求が前のステージに割り当てられると、割り当てられたユーザーが要求を請求し、変更、再送信または承認を行います。承認ユーザーが適切なワークフロー・データ・アクセス権を持っていない大きなステージで追加された、その他の要求アイテムが要求内にある場合、その要求アイテムの詳細は表示されません。前の参加者がプッシュバックの理由に対応し、再送信または承認を行うと、要求は元々プッシュバックを行った承認者に戻ります。

▶ 要求をプッシュバックするには:

- 1 請求された要求を開きます。
- 2  をクリックします。
- 3 要求をプッシュバックするワークフロー・ステージを選択します。
- 4 プッシュバックを説明するコメントを入力し、「OK」をクリックします。

要求のエスカレート

まれに、ワークフロー・ステージに必要なタスクを承認者が実行できない場合があります。この状況は、ワークフロー・モデルまたはデータ・アクセスが、特定タイプの要求を処理するために適切に構成されていない場合や、ユーザーが続行する方法を理解していない場合に発生します。ユーザーは、データ・マネージャの役割を持ったユーザーに請求された要求をエスカレートし、状況の解決に参加させることができます。エスカレートすると、要求はデータ・マネージャ・ユーザーに割り当てられ、ステージの通常の承認者は、要求を請求して参加することができなくなります。エスカレート中、データ・マネージャは要求の変更、要求に関連するデータの直接編集、参加しているユーザーのワークフロー・データ・アクセス権の変更、またはワークフロー・モデルを変更するためのアプリケーション管理者への問合せを行うことができます。データ・マネージャが要求の続行を

許可すると、要求のエスカレートが解除され、ワークフロー・ステージの元のユーザー・グループに再割当てされます。

▶ 要求をエスカレートするには:

- 1 請求された要求を開きます。
- 2  をクリックします。
- 3 エスカレートを説明するコメントを入力し、「OK」をクリックします。

要求のコミット

要求のワークフロー・モデルの最終コミット・ステージに割り当てられたユーザーは、要求の変更をターゲット・バージョンのデータにコミットするために承認を行う必要があります。コミット・ステージ中に、すべての要求アイテムに必要なすべての値を指定し、検証すべてに合格する必要があります。承認者は要求アイテムを編集し、残りの問題に対応したり、最終調整を行うことができます。コミット・ユーザーは、要求でのすべての要求アイテムを承認する必要があります。要求をコミットする準備ができたなら、承認者が承認を行ってコミット操作を開始します。コミット・ステージに承認者が複数存在する場合は、最後の承認により、要求の変更のコミットがトリガーされます。

要求の拒否

要求の承認者、またはエスカレート中のデータ・マネージャは、コミットされないように要求を拒否することができます。承認者は、要求されている変更の重複、誤り、不完全性などの理由で要求を拒否できます。拒否の間は、拒否の理由を説明するコメントが必要です。要求が拒否されると、ワークフロー・モデルが取り消され、ユーザーは要求に対するあらゆるアクションを実行できなくなります。拒否された要求は、可能であれば、後からコピーして新しい要求として送信できます。

▶ 要求を拒否するには:

- 1 請求された要求を開きます。
- 2  をクリックします。
- 3 拒否を説明するコメントを入力し、「OK」をクリックします。

ワークリストの移動

ワークリストは、変更要求や改善要求を処理する中央の場所です。ガバナンス・ユーザーは、ワークリストから変更要求を送信したり、ユーザー・グループに割り当てられた要求の確認や参加を行います。データ・マネージャは、ガバナンス・ユーザーに改善要求を送信したり、それらのユーザーが送信したエスカレート済の要求に参加したりします。

詳細は、次を参照してください:

- [ワークリスト・ビュー](#)
- [経過時間ごとの要求の表示](#)
- [要求の検索](#)
- [要求のプレビュー](#)
- [要求を開く](#)
- [要求の削除](#)

ワークリスト・ビュー

ワークリストには、ユーザーが参加できる方法に基づいて、表示されている要求をガバナンス・ユーザーがフィルタできる一連のビューが含まれています。各ワークリスト・ビューには、そのビューで使用可能な要求の数が表示されます。「ワークリスト」ページの左側にあるメニューからワークリスト・ビューを選択し、ビューで使用可能な要求を表示します。ワークリスト・ビューは次のとおりです:

- 「割当て済」 --ユーザー、またはユーザーがメンバーであるグループに割り当てられた要求
- 「緊急」 --ユーザーまたはグループに割り当てられた要求で、「緊急」とマークされているもの
- 「遅滞」 --ユーザーまたはグループに割り当てられた要求で、「遅滞」とマークされているもの
- 「請求済」 --ユーザーまたはグループに割り当てられた要求で、現在のユーザーが請求しているもの
- 「送信済」 --現在のユーザーによって送信された要求
- 「ドラフト済」 --ユーザーが「ドラフト済」ステータスで保存したが、送信されていない要求
- 「参加済」 --ユーザーが参加者として追加されている要求(以前に送信または請求されたもの)
- 「通知済」 --ユーザーが通知された要求(参加または参加していないもの)
- 「すべて」 --現在システムに存在するすべての要求(データ・マネージャの役割を持ったユーザーのみ使用可能)

経過時間別の要求の表示

ワークリストに表示されている要求は、要求経過時間フィルタを使用してフィルタできます。要求経過期間フィルタでは要求の表示が、「今日」、今週、「過去 30 日間」、「四半期累計」、「年次累計」または「すべて」に制限されます。

要求の検索

ガバナンス・ユーザーおよびデータ・マネージャは、キーワード検索を使用して既存の要求を検索できます。ワイルドカード検索にアスタリスクを使用できます。ワークフロー・ユーザーは、次に示すいずれかの要求領域を検索できます:

- 要求ヘッダー

- 要求アイテム
- ワークフロー・タグ
- コメント

▶ 要求を検索するには:

1 「ワークリスト」ページで、、「検索」の順にクリックし、検索する要求領域を選択します:

- 要求―指定されたテキストの要求ヘッダーを検索します
- 要求アイテム―指定されたテキストの要求アイテムを検索します
- ワークフロー・タグ―指定されたテキストのワークフロー・タグを検索します
- コメント―指定されたテキストのコメントを検索します

2  をクリックします。

要求のプレビュー

ワークリストで要求を選択すると、ワークリストの下に要求のプレビューが表示されます。要求のプレビューには、次の種類の情報が表示されます:

- 要求ヘッダー
- 要求アイテム
- 要求アクティビティ

要求を開く

要求の詳細を表示する、またはワークリストに表示されている要求に対してアクションを実行するには、要求を開く必要があります。

▶ ワークリストからの要求を開くには、要求をダブルクリックします。

▶ 要求のプレビューから要求を開くには、 をクリックします。

要求の削除

送信されたことのないドラフトの要求は、「ワークリスト」ページで要求をプレビューする際に、作成者が削除できます。要求が送信されると、要求の正確な履歴をガバナンス目的で保持するために、要求を削除できる権限が制限されます。送信された要求を削除できるのは、その要求が関連付けられているターゲット・バージョンと一緒にする場合のみです。

▶ 要求を削除するには:

1 ワークリストから、プレビューするドラフト済の要求を選択します。

- 2 要求のプレビューで、をクリックします。
- 3 「要求の削除」をクリックして、削除を確認します。

プロセス・コントロールおよび自動化

ガバナンス・ワークフローには、次に示す複数の機能があります:

- [ワークフロー・パス](#)
- [ワークフロー・タグ](#)
- [要求および請求期間](#)
- [ステージのスキップおよび自動エスカレーション](#)
- [再承認](#)

ワークフロー・パス

要求のワークフロー・パスは、完了するワークフロー・ステージ、要求のアクティブ・ステージ、前のステージの完了ステータス、およびアクティブ・ステージの承認数を示します。ワークフロー・パスを使用すると、要求にかかる時間、関連する承認の数、および全体的な承認プロセスにおける要求の位置を、参加しているすべてのユーザーが把握できます。ワークフロー・パスは、ユーザーが要求の送信、承認、エンリッチ、プッシュバック、または拒否などのアクションを実行すると自動的に更新されます。

要求のワークフロー・パスは次の内容で決定されます:

- 要求に指定されたワークフロー・モデル
- 要求の要求アイテム
- 要求アイテムに関連付けられた階層ノード
- ワークフロー・ユーザー・グループおよび階層ノードに対するそのアクセス・レベル
- ワークフロー・モデルに構成されたワークフロー・ステージ
- 要求の現在のステージ
- 各ステージのステータス

ワークフロー・タグ

ワークフロー・タグを使用すると、ガバナンス・ワークフローにより、ガバナンス・ユーザーが要求を特別に処理できるようになります。編集可能な要求に、次のワークフロー・タグを追加できます:

- 「期限」 -- 要求の変更をコミットする必要があるユーザー定義の日にちを示します。要求の期限は、コミットされていない場合に、要求が「遅滞」とマークされる日にちを決定します。遅滞の要求では、個別のワークリスト・ビューを使用できます。
- 「緊急」 -- 優先度が高い、または時間に制約があるとして要求がマークされます。緊急の要求では、個別のワークリスト・ビューを使用できます。

▶ ワークフロー・タグを追加するには:

- 1 編集可能な要求を開きます。
- 2 「ワークフロー・タグ」の隣にある要求の右側で、「追加」をクリックします。
- 3 追加するワークフロー・タグを選択します:
 - 期限

注: 必ずカレンダーから日付を選択してください。

- 緊急
- 4 「OK」をクリックします。

▶ ワークフロー・タグを削除するには:

- 1 ワークフロー・タグが割り当てられた要求を開きます。
- 2 要求の右側の「ワークフロー・タグ」の下で、ワークフロー・タグの隣にある ✕ をクリックして、要求から削除します。

要求および請求期間

要求のワークフロー・モデルには、オプションで要求または請求期間の間隔を指定して構成し、特定タイプの要求に予想される見積もりの時間に基づいたガバナンス・ワークフローによる要求の自動処理を制御することができます。

- 「要求期間」—要求が承認およびコミットされるまでにかかると予想される日数。要求の経過時間が要求期間を超えると、その要求は「遅滞」とマークされます。
- 「請求期間」—ガバナンス・ユーザーにより、ワークフロー・ステージに要求が請求されると予想される日数。要求の経過時間が請求期間を超えると、要求は自動的に未請求となり、割り当てられたその他のユーザーが請求できるようになります。

ステージのスキップおよび自動エスカレーション

要求がワークフロー・パスの次のステージに割り当てられると、Data Relationship Management では、ワークフロー・モデルのステージに関連付けられたユーザー・グループが、要求内の要求アイテムのデータに対する適切なワークフロー・アクセス権を持つユーザー・グループと照合され、そのステージの要求に参加できるユーザーが判断されます。通常、この交差はステージごとに少なくとも 1 人のユーザーになりますが、特定のステージに一致するユーザーが存在しない場合もあります。そのような状況では、必要な値すべてがすでに指定されていて、ステージのすべての検証を正常に通過すれば、ガバナンス・ワークフローでワークフロー・ステージのスキップが許可されます。ワークフロー・ステージをスキップする機能により、要求の実際のアイテムに基づき、ワークフロー・モデルで、完了する必要があるステージのみにワークフロー・パスを適応できます。この適応機能により、さらに多くのワークフロー・モデルで、別のワークフロー・モデルやその目的で使用される別の要求を必要とせずに、同じモデルを使用して、特定のデータ・セット固有のワークフロー要件を異なる方法で処理できます。ステージがス

スキップされるのを許可または制限するように、任意の承認、エンリッチまたはコミットのワークフロー・ステージを構成できます。

要求内の要求アイテムに必要な値がない場合、ステージに構成されている検証に失敗した場合、またはこの動作を制限するようにワークフロー・モデルが構成されている場合は、ワークフロー・ステージをスキップできません。この場合、要求はデータ・マネージャの役割を持つユーザーにエスカレートされます。

再承認

すでに完了して、前のユーザーにより承認されている以前のステージに要求がプッシュバックされる場合は、すでに参加しているユーザーが要求を再送信または再承認する必要があります。後続のステージによる再承認が必須かオプションかは、要求がプッシュバックされるステージによって異なります。ワークフロー・モデルの各ワークフロー・ステージの「再承認」オプションにより、そのモデルを使用する要求のこの動作が制御されます。

アラートおよび通知

ガバナンス・ユーザーとデータ・マネージャには、アラートおよび通知を使用して、自身に関連付けられている要求に対する要求アクティビティが通知されます。要求のワークフロー・モデルのステージ構成は、ユーザーに特定のステージで実行されているアクティビティを通知するか、およびどのユーザーに通知するかを制御します。

詳細は、次を参照してください:

- [Web クライアント・アラート](#)
- [電子メール通知](#)

Web クライアント・アラート

ユーザーに要求アクティビティを通知する必要がある場合、ユーザーは、Data Relationship Management Web クライアントでアラートを受信します。ユーザーがアラートを受信すると、Web ページの上部に「アラート」リンクが表示されます。「アラート」リンクには、表示されるアラートの数が示されます。「アラート」リンクにアクセスすると、アラートの詳細なリストを参照できる「アラート」ダイアログが表示されます。現在、Web クライアントにユーザーのアクティブ・セッションがある場合、「アラート」リンクには、そのユーザーに送信されたアラートがすぐに反映されます。

▶ アラートにアクセスするには:

- 1 Web ページの上部で、「アラート」をクリックします。
- 2 詳細情報を表示するアラートをクリックします。

注: 「既読をすべてマーク」をクリックすると、アラートをすべて消去できます。

注： アラートを開くリンクをクリックすると、現在の要求の状態を示す要求インスタンス・ページが開きます。アラートが発行された時期に関係なく、要求のすべてのアクティビティが表示されます。

電子メール通知

ガバナンス・ユーザーには、要求アクティビティに関しても電子メール通知を使用して通知が行われます。このタイプの通信は、アクティブなユーザー・セッションを持たないユーザーや、Data Relationship Management に頻繁にアクセスしないユーザーにアラートを通知する場合に便利です。Web クライアント・アラートが発生すると、電子メール通知が送信されます。

- 電子メールの件名に、要求と実行されたアクティビティが示されます。
- 電子メールの本文に、要求ヘッダー、要求アイテムおよび最近の要求アクティビティが表示されます。
- 要求アイテムのプロパティ詳細の表示、すべての要求アクティビティの表示または要求に対するアクションの実行を行うには、ハイパーリンクを使用し、承認された後に、ユーザーを直接 Web クライアントの要求に移動させます。

この章の内容

クエリー・タイプ	85
クエリーの作成	86
クエリー結果の操作	89
クエリーの管理	91

Data Relationship Management では、プロパティ値に基づいてバージョンおよび階層内のノードをクエリーできます。ホーム・ページ上のクエリー・タスクから、クエリーを作成、オープンおよび管理できます。異なるタブで複数のクエリーを開くことができますが、一度にフォーカスを当てることができるのは1つのクエリーのみです。また、参照対象として選択したデータ・オブジェクトからクエリーを実行することもできます。

Data Relationship Management では、クエリーは、「が次と類似」、「が次の範囲にある」、「長さが次と等しい」などの複数の演算子をサポートしています。一連のノードに対して実行できる基準のリストを作成できます(従来の SQL 文の WHERE 句と同様)。クエリーにより、定義した基準を満たすノードのリストが返されます。クエリーを使用すると、AND または OR を使用して複数の基準をまとめて構成することにより、複雑なクエリーを形成できます。

プロパティ・クエリーを保存することにより、ユーザーがクエリー基準を再定義しなくても繰り返し分析を実行できるようになります。データ・マネージャは、他のすべてのユーザーが使用できる標準クエリーを作成できます。

クエリーの一般的な用途:

- 階層の参照時に特定の基準を満たすノードを検索
- エクスポートおよび比較でのフィルタ・メカニズムとして
- データの整合性を確保するために使用されるカスタム検証のロジックとして

クエリー・タイプ

クエリー・タイプ:

- **グローバル・クエリー**は、バージョン内のすべてのノードに対して実行されます。グローバル・クエリーは特定の階層を参照せずに一連のノードに対して実行されるため、基準に含めることができるのはバージョン・プロパティおよびグローバル・ノード・プロパティのみです。

- ローカル・クエリーは、階層内のノードおよびその子孫に対して定義および実行されます。これらは、階層の最上位ノードまたは階層内のノードから実行できます。ローカル・クエリーは、バージョン、階層、グローバル・ノードおよびローカル・ノードのプロパティを参照できます。

クエリーの作成

クエリーを作成するか開くと、クエリーは名前付きタブに表示されます。

クエリー・ウィザードを使用して、クエリーのパラメータおよび基準を定義します。ウィザードのコンテンツは、入力をサポートする「ソース」、「スタイル」、「フィルタ」および「列」タブにわたって編成されています。ウィザードのタブは入力を順番に収集するよう順序付けられていますが、任意のタブ間でナビゲートできます。

► クエリーを作成するには:

- 1 「ホーム」 ページで、「クエリー」 を選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 「ソース」 タブから、クエリーのバージョンまたはバージョン変数を選択します。
「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」 リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」 リストの下に「標準」 をクリックします。
- 4 次のいずれかのアクションを行います。
 - グローバル・クエリーの場合は、次のステップに移動します。
 - ローカル・クエリーの場合は、 をクリックし、階層および最上位ノードを選択し、「OK」 をクリックします。

注： 階層/最上位ノードの組合せを変更するには、「消去」 をクリックし、ローカル・クエリー用のステップを繰り返します。
- 5 「スタイル」 で、クエリー結果の表示方法を選択します。
 - リスト: 基準を満たすノードは動的リストとして返されます。
 - ノードをマーク: 基準を満たすノードは階層ツリー内でマークされます。
 - 両方: 基準を満たすノードは動的リストとして返され、階層内でマークされます。

注： グローバル・クエリーの場合、結果はリストとしてのみ返すことができます。
- 6 オプション: 「ノードをマーク」 または 「両方」 を選択した場合、「マークされているノードまで展開」を選択すると、階層が開いて展開され、マークされたノードが表示されます。

注： このオプションを適用できるのは、ローカル・クエリーに対してのみです。

- 7 「フィルタ」で、「追加」をクリックして基準行を挿入します。
- 8 プロパティおよび**演算子**を選択し、基準行の値を入力し、[Enter]を押して行を保存します。

注： カッコを含めることにより、基準をグループ化したり、プロパティに継承値を含めるかどうかを定義できます。演算子の詳細は、[88 ページの「演算子の説明」](#)を参照してください。

ヒント：  をクリックし、行を変更します。行を削除するには、 をクリックします。行を移動するには、矢印をクリックします。

- 9 「包含オプション」から、クエリー結果に含めるノードを選択します。
 - 一致のみ: 基準を満たすノードのみを返します。
 - 一致と祖先: 基準を満たすすべてのノードとその祖先を返します。
 - 一致と子孫: 基準を満たすすべてのノードとその子孫を返します。
- 10 **オプション:** ステップ 9 で「一致と祖先」または「一致と子孫」を選択した場合、デフォルトでは、「含める」オプションが選択され、基準を満たすノードが結果に含まれます。
- 11 **オプション:** ステップ 9 で「一致と祖先」を選択した場合、「クエリーの最上位ノードの上の祖先を含める」を選択すると、最上位ノードの上にある祖先ノードを含めることができます。

「クエリーの最上位ノードの上の祖先を含める」オプションに追加祖先が含まれるのは、クエリーに指定した最上位ノードにすべての祖先が含まれていなかった場合のみです(「一致と祖先」オプション)。このため、このオプションは子孫には影響しません(「一致と子孫」オプション)。
- 12 「列」タブを選択し、「カテゴリ」を選択します。
- 13 クエリー結果で列として表示するプロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

注： 列選択は単なるランタイム・パラメータであり、クエリーとともに保存されません。

ヒント： 「選択済」リストでは矢印を使用して列の位置を決定します。リスト内の最初のアイテムが第 1 列、リスト内の 2 番目のアイテムが第 2 列というように続きます。

- 14 **オプション:** クエリー結果のフィルタ基準で参照されるプロパティを自動的に含めるには、「基準プロパティを含める」を選択します。
- 15 次のいずれかの操作を行います。
 -  をクリックしてクエリーを保存します。

クエリーの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・オブジェクト・アクセス・グループまたは次のいずれかを選択します:

- 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準クエリーを作成および変更できるのはデータ・マネージャ・ユーザーのみです。
 - 「システム」 --アプリケーション管理者の役割を持つユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- クエリーを実行するには、をクリックします。

演算子の説明

表 11 演算子の説明

演算子	説明	データ型の制限
が次より上	指定したプロパティ値は、祖先ノードによって使用されています。	
が次より下	指定したプロパティ値は、子孫ノードによって使用されています。	
が次を含む	プロパティのカンマ区切りリスト値には、リストで指定したアイテムが含まれます。	文字列のみ
が次と等しい	プロパティ値は、指定した値と等しいです。	
が次より大きい	プロパティ値は、指定した値より大きい(が、指定した値と等しくない)です。	
が次以上	プロパティ値は、指定した値より大きい、または指定した値と等しいです。	
文字を含む	プロパティ値は、指定した文字を 1 つ以上含みます。	
文字を含まない	プロパティ値は、指定した文字を 1 つも含みません。	
が次の範囲にある	プロパティ値は、指定した値のカンマ区切りリスト内にあります。	文字列のみ
アルファベットである	プロパティ値は、アルファベット文字でのみ構成されています。	
英数字である	プロパティ値は、英数字でのみ構成されています。	
が空白である	プロパティ値は、空白です(指定した値項目は使用できません)。	
が定義済みである	プロパティ値は、定義(上書き)された値です。	
アルファベットではない	プロパティ値は、アルファベット文字のみでは構成されていません。	
英数字ではない	プロパティ値は、英数字のみでは構成されていません。	

演算子	説明	データ型の制限
が空白でない	プロパティ値は、空白ではありません。	
が数値でない	プロパティ値は、数値ではありません。	
が数値である	プロパティ値は、数値です。	
長さが次と等しい	プロパティ値の長さは、指定した値と等しいです。	文字列のみ
長さが次より大きい	プロパティ値の長さは、指定した値より大きい(が、指定した値と等しくない)です。	文字列のみ
長さが次以上	プロパティ値の長さは、指定した値より大きい、または指定した値と等しいです。	文字列のみ
長さが次未満	プロパティ値の長さは、指定した値より小さい(が、指定した値と等しくない)です。	文字列のみ
長さが次以下	プロパティ値の長さは、指定した値より小さい、または指定した値と等しいです。	文字列のみ
長さが次と等しくない	プロパティ値の長さは、指定した値と等しくないです。	文字列のみ
が次未満	プロパティ値は、指定した値より小さい(が、指定した値と等しくない)です。	
が次以下	プロパティ値は、指定した値より小さい、または指定した値と等しいです。	
が次と類似	プロパティ値は、指定した値と類似しています(ワイルドカードを含む)。アスタリスク(*)およびパーセント記号(%)をワイルドカードとして使用できます。	文字列のみ
が次より上ではない	指定したプロパティ値は、祖先ノードによって使用されていません。	
が次より下ではない	指定したプロパティ値は、子孫ノードによって使用されていません。	
が次を含まない	プロパティのカンマ区切りリスト値には、リストで指定したアイテムが含まれません。	文字列のみ
が次と等しくない	プロパティ値は、指定した値と等しくありません。	
が次の範囲にない	プロパティ値は、指定した値のカンマ区切りリスト内にありません。	文字列のみ
が次と類似しない	アスタリスク(*)およびパーセント記号(%)をワイルドカードとして使用できます。	文字列のみ

クエリー結果の操作

クエリーに対して選択した表示オプションに応じて、結果は、リストに表示されるか、ツリーでマークされるか、あるいはその両方になります。ローカル・クエリーの場合、結果のリストでノードのプロパティを編集できます。階層ツリーでマークされたノードとして表示されるローカル・クエリー結果の場合、構造の変

更およびプロパティの編集が可能です。グローバル・クエリー結果は読取り専用です。

詳細は、次を参照してください:

- [リスト・ビューでのナビゲート](#)
- [ツリー・ビューでのナビゲート](#)
- [クエリー結果のダウンロード](#)

リスト・ビューでのナビゲート

リストに表示されるクエリー結果には、クエリー基準を満たすノードのみが表示されます。「ノード」メニューから、次のオプションを選択できます。

- 「取得」 - ノードをクリップボードにコピーし、ここから別の場所へのノードの挿入、移動、順序変更、またはノードのプロパティの貼付けを行うことができます。
- 「ノードに移動」 : ツリー・ビューで選択したノードに移動できます。
- 「フィルタ行の表示」 : リストをフィルタするために使用できる空の行を開きます。
- 「プロパティ」 : 「プロパティ」 タブにノード・プロパティを表示します。

ツリー・ビューでのナビゲート

ツリー内でマークされたノードとして表示されるクエリー結果の場合、クエリー基準を満たす各ノードの横に青いチェックマークが表示された状態で階層ツリー全体が表示されます。

次のツールバー・ボタンを使用できます。

ツールバーのボタン	説明
	選択したノードの親にナビゲートします。
	前に選択したマークされているノードにナビゲートします。
	ツリーを展開して、指定したレベルのすべてのノードを表示します。
	マークされている次のノードにナビゲートします。
	ツリーを展開して、マークされているノードを表示します。
	マークされているノードを消去します。

クエリー結果のダウンロード

リスト・ビューおよびツリー・ビューから、クエリー結果を次のファイル・タイプにダウンロードできます。

- Portable Document (PDF)
- Rich Text Document (RTF)
- スプレッドシート(XLS)

注： リスト・ビューでは、CSV ファイルにダウンロードすることもできます。

▶ ツリー・ビューでクエリー結果をダウンロードするには:

- 1 「ダウンロード」から、ファイル・タイプを選択します。
- 2 「保存」をクリックします。
- 3 ドキュメントをダウンロードするディレクトリを参照し、ドキュメントの名前を入力し、「保存」をクリックします。

クエリーの管理

保存したクエリーはオープン、コピーおよび削除できます。詳細は、次を参照してください:

- [クエリーを開く](#)
- [クエリーのコピー](#)
- [クエリーの移動](#)
- [クエリーの削除](#)

クエリーを開く

クエリーはオープンおよび変更できます。クエリーは実行する前に開く必要があります。

▶ クエリーを実行するには:

- 1 「クエリー」タブを選択し、クエリーを選択します。
- 2  をクリックし、選択したクエリーを開きます。
- 3 タブをクリックしてクエリー・パラメータを変更し、 をクリックしてクエリーを実行します。

クエリーのコピー

▶ クエリーをコピーするには:

- 1 「クエリー」タブを選択し、クエリーを選択します。
- 2 「クエリー」から「コピー」を選択します。
- 3 クエリーの新しい名前と説明を入力します。

- 4 「オブジェクト・アクセス・グループ」から、カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
- 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準比較を作成および変更できるのはデータ・マネージャ・ユーザーのみです。
 - 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- 5 「OK」をクリックします。

クエリーの移動

オブジェクト・アクセス・グループから別のオブジェクト・アクセス・グループにクエリーを移動できます。

注： 移動アクションは、グループに対するオブジェクトの管理権限を持つユーザーにのみ使用可能になります。

▶ クエリーを移動するには:

- 1 「クエリー」タブを選択し、クエリーを選択します。
- 2 「クエリー」から、「移動」を選択します。
- 3 「オブジェクト・アクセス・グループ」から、別のグループを選択し、「OK」をクリックします。

クエリーの削除

▶ クエリーを削除するには:

- 1 「クエリー」タブを選択し、クエリーを選択します。
- 2 「クエリー」から「削除」を選択します。

注： クエリーが別のオブジェクトによって使用されている場合は、このクエリーを使用しているオブジェクトのリストとともにプロンプトが表示されます。削除を続けるか削除を取り消すかを選択できます。

この章の内容

比較タイプ.....	93
比較の作成.....	94
比較結果の操作	96
比較の管理.....	98

Data Relationship Management では、同じバージョン内の階層、または2つの異なるバージョン間の階層を比較できます。ホーム・ページ上の比較タスクから、比較を作成、オープンおよび管理できます。異なるタブで複数の比較を開くことができますが、一度にフォーカスを当てることができるのは1つの比較のみです。また、参照対象の階層から比較を実行することもできます。

比較タイプ

Data Relationship Management には、4つの比較タイプが用意されています。

- 視覚比較
- 構造比較
- プロパティ比較
- 名前変更比較

視覚比較

視覚比較では、比較プロセスを実行せずに階層ツリーが横並びで表示されます。

構造比較

構造比較では、同じ階層の2つのバージョン間、または異なる階層の2つのポイント間で同じであるか異なるノードが識別されます。

構造比較では、実行対象の比較のタイプに基づいて同じであるか異なる各階層のノードが返されます。結果は、2つのリスト、マークされている2つのツリー、またはその両方として表示できます。

プロパティ比較

プロパティ比較では、同じ階層の2つのバージョン間、または異なる階層の2つのポイント間のプロパティ値の差異が識別されます。階層間で共通する各ノードのプロパティを選択して比較できます。結果は、2つのリスト、マークされている2つのツリー、またはその両方として表示できます。

名前変更比較

名前が変更されたノードの比較は、構造比較と同じですが、名前が変更された各ノードを比較のために同じものとして扱います。

たとえば、比較対象の階層1にノードA、BおよびCが含まれ、階層2にも同じノードが含まれるがノードCの名前がCCに変更されている場合、名前が変更されたノードの比較では、これら2つの階層間で差異を識別しません。構造比較では、差異オプションが選択されている場合、ノードCとノードCCは異なるノードとみなします。

名前が変更されたノードの比較では、実行対象の比較のタイプに基づいて同じであるか異なる各階層のノードが返されます。結果は、2つのリスト、マークされている2つのツリー、またはその両方として表示できます。

比較の作成

比較を作成するか開くと、比較は名前付きタブに表示されます。

比較ウィザードを使用して、比較のパラメータおよび基準を定義します。ウィザードのコンテンツは、入力をサポートする「ソース」、「スタイル」、「フィルタ」および「列」タブにわたって編成されています。ウィザードのタブは入力を順番に収集するよう順序付けられていますが、任意のタブ間でナビゲートできます。

► 比較を作成するには:

1 「ホーム」ページで、「比較」を選択します。

2  をクリックします。

3 「ソース」をクリックし、比較する各階層のバージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」リストの下に「標準」をクリックします。

4 バージョンごとに、 をクリックし、「ノードの選択」ダイアログ・ボックスから階層および最上位ノードを選択し、「OK」をクリックします。

5 「スタイル」タブを選択し、比較タイプを選択します。

- 視覚
- 構造
- プロパティ

- 名前変更

6 視覚比較またはプロパティ比較を選択した場合、次のステップに進みます。別の比較タイプを選択した場合は、次を実行します。

- 比較タイプの下で、差異と類似点のどちらを表示するかを選択します。
- 「結合」から、結合プロパティを選択します。

デフォルトでは、比較により、同じ名前を持つ各階層からノードがマップされます。また、別のプロパティに基づいてノードを結合することもできます。たとえば、指定した階層内で SortCode という名前のプロパティが一意のキーを持つ場合、各階層で同じ SortCode を持つノード間の差異を識別するためにこのプロパティが使用されます。

- 「結果表示」から、表示する比較結果を選択します。
 - リスト: 基準を満たすノードは動的リストとして返されます。
 - ノードをマーク: 基準を満たすノードは階層内でマークされます。
 - 両方: 基準を満たすノードは動的リストとして返され、階層内でマークされます。
- オプション: 「ノードをマーク」または「両方」を選択した場合、「マークされているノードまで展開」を選択すると、階層が開いて展開され、マークされたノードが表示されます。

7 「フィルタ」タブを選択し、次のいずれかを実行します。

- 「包含フィルタ」から、保存されたクエリーを選択します。
- 次を実行して、比較のフィルタ基準を定義します。
 1. 「追加」をクリックし、基準行を挿入します。
 2. プロパティおよび演算子を選択し、基準行の値を入力し、[Enter]を押して行を保存します。

注: カッコを含めることにより、基準をグループ化したり、プロパティに継承値を含めるかどうかを定義できます。演算子の詳細は、[88 ページの「演算子の説明」](#)を参照してください。

ヒント:  をクリックし、行を変更します。行を削除するには、 をクリックします。行を移動するには、矢印をクリックします。

8 「リム/リーフ・フィルタ」から、追加するノードを選択します。

9 「列」タブを選択し、「カテゴリ」を選択します。

10 比較結果で列として表示するプロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

注: 列選択はランタイム・パラメータであり、比較とともに保存されません。

ヒント：「選択済」リストでは矢印を使用して列の位置を決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

11 オプション: プロパティ比較のフィルタ基準で参照されるプロパティを自動的に含めるには、「比較/フィルタのプロパティを含める」を選択します。

12 次のいずれかの操作を行います。

-  をクリックして比較を保存します。
比較の名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します：
 - 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 -- すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準比較を作成および変更できるのはデータ・マネージャ・ユーザーのみです。
 - 「システム」 -- アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- 比較を実行するには、 をクリックします。

比較結果の操作

比較を実行する前に選択した表示オプションに応じて、結果は、リスト、ツリーまたはその両方に表示され、横並びで表示されます。

詳細は、次を参照してください：

- [リスト・ビューでのナビゲート](#)
- [ツリー・ビューでのナビゲート](#)
- [クエリ結果のダウンロード](#)

リスト・ビューでのナビゲート

リストに表示される比較結果には、比較基準を満たすノードのみが表示されます。「ノード」メニューから、次のオプションを選択できます。

- 「取得」 - ノードをクリップボードにコピーし、ここから別の場所へのノードの挿入、移動、順序変更、またはノードのプロパティの貼付けを行うことができます。
- 「ノードに移動」：ツリー・ビューで選択したノードに移動できます。
- 「フィルタ行の表示」：リストをフィルタするために使用できる空の行を開きます。
- 「プロパティ」：「プロパティ」タブにノード・プロパティを表示します。

ツリー・ビューでのナビゲート

「ツリー」タブには、マークされたノードが、行の左側に青いチェックマークが付いた状態で表示されます。

マークされたノードとして表示される比較結果の場合、比較基準を満たす各ノードの横に青いチェックマークが表示された状態で両方の階層ツリーが表示されます。

ツールバーのボタン	説明
	選択したノードの親にナビゲートします。
	前に選択したマークされているノードにナビゲートします。
	ツリーを展開して、指定したレベルのすべてのノードを表示します。
	マークされている次のノードにナビゲートします。
	ツリーを展開して、マークされているノードを表示します。
	マークされているノードを消去します。

バージョン間でのノードの移動

比較結果ページでは、ノードをドラッグすることによってバージョン間でノードをコピーできます。

➤ ノードを別のバージョンに移動するには:

- 1 移動するノードを選択し、新しい場所にドラッグします。
- 2 「ノードを配置」ダイアログ・ボックスで、オプションを選択します。
 - 「子として配置」: 選択したノードを子ノードとして追加します。
 - 「兄弟として追加するか順序変更します」: ノードを兄弟ノードとして追加するか、階層内のノードの順序を変更します。
- 3 ノード・プロパティをコピーするためのオプションを選択します。
 - プロパティをコピーしない
 - グローバル・プロパティのコピー
 - ローカルおよびグローバル・プロパティのコピー
- 4 「オプション:」 ノードの子孫をコピーに含めるには、「子孫を含む」を選択します。
- 5 「オプション:」 コピーする追加ノードに同じ設定を使用するには、「この設定をデフォルトとして使用」を選択します。
- 6 「OK」をクリックします。

比較結果のダウンロード

リスト・ビューおよびツリー・ビューから、比較結果を次のファイル・タイプにダウンロードできます。

- Portable Document (PDF)
- Rich Text Document (RTF)
- スプレッドシート(XLS)

注： リスト・ビューでは、CSV ファイルにダウンロードすることもできます。

▶ ツリー・ビューで比較結果をダウンロードするには:

- 1 「ダウンロード」から、ファイル・タイプを選択します。
- 2 「保存」をクリックします。
- 3 ドキュメントをダウンロードするディレクトリを参照し、ドキュメントの名前を入力し、「保存」をクリックします。

比較の管理

保存した比較はオープン、コピーおよび削除できます。詳細は、次を参照してください:

- [比較のオープン](#)
- [比較のコピー](#)
- [比較の移動](#)
- [比較の削除](#)

比較のオープン

既存の比較はオープンおよび変更できます。比較は実行する前に開く必要があります。

▶ 比較をオープンおよび実行するには:

- 1 「ホーム」ページで、「比較」を選択し、開く比較を選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 タブを選択して比較パラメータを変更し、 をクリックして比較を実行します。

比較のコピー

▶ 比較をコピーするには:

- 1 「ホーム」ページで、「比較」を選択し、コピーする比較を選択します。

- 2 「比較」から「コピー」を選択します。
- 3 新しい名前と説明を入力します。
- 4 「オブジェクト・アクセス・グループ」から、カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準比較を作成および変更できるのはデータ・マネージャ・ユーザーのみです。
 - 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- 5 「OK」をクリックします。

比較の移動

オブジェクト・アクセス・グループから別のオブジェクト・アクセス・グループに比較を移動できます。

注： 移動アクションは、グループに対するオブジェクトの管理権限を持つユーザーにのみ使用可能になります。

▶ 比較を移動するには:

- 1 「ホーム」ページで、「比較」を選択し、移動する比較を選択します。
- 2 「比較」から、「移動」を選択します。
- 3 「オブジェクト・アクセス・グループ」から、別のグループを選択し、「OK」をクリックします。

比較の削除

▶ 比較を削除するには:

- 1 「ホーム」ページで、「比較」を選択し、削除する比較を選択します。
- 2 「比較」から「削除」を選択します。

注： 比較が別のオブジェクトによって使用されている場合は、この比較を使用しているオブジェクトのリストとともにプロンプトが表示されます。削除を続けるか削除を取り消すかを選択できます。

この章の内容

アクション・スクリプト・パラメータ	101
フラット・ファイルからのアクション・スクリプトのロード	105
トランザクション・ログからのアクション・スクリプトのロード	107
ノード・モデルからのアクション・スクリプトのロード	109

アクション・スクリプトを使用すると、大量の増分変更を自動方式で処理できます。スクリプト内の各レコードは、実行対象の個別アクションを表し、他のアクションとは別個に処理されます。同じスクリプトに異なるタイプのアクションをグループ化できます。アクション・スクリプトが特に役立つのは、複数のバージョン、階層またはノードに対して同じアクション・セットを実行する必要がある場合です。

注意 アクション・スクリプトを実行する場合、アクション・スクリプトの日時値として予期されるフォーマットを定義するために、クライアント・セッションの地域設定が使用されます。これらの設定が検出されない場合、サーバーの地域設定が使用されます。たとえば、セッションの地域設定で日付を dd.mm.yyyy としてフォーマットするよう指定されている場合、アクション・スクリプトで使用するデータはこのフォーマットにする必要があります。そうでない場合、情報が表示されないか正しく表示されません。

アクション・スクリプト・パラメータ

各フラット・ファイル列の各アクションによって使用されるパラメータは、次のとおりです。

表 12 アクション・スクリプト・パラメータ

アクション名	Param1	Param2	Param3	Param4	Param5	Param6	Param7
Activate 階層内で指定したノードをアクティブ化します。	バージョン	階層	ノード				

アクション名	Param1	Param2	Param3	Param4	Param5	Param6	Param7
Add 指定したノード(またはドメイン・ノード)を指定した階層に追加します(このアクションを使用できるのは、指定したバージョン内にまだ存在しないノードに対してのみです)。	バージョン	階層	ノード	親ノード	リーフ・プロパティ	説明 ドメイン・ノードを追加する場合は必須	ドメイン ドメイン・ノードを追加する場合は必須
AddDomainToVersion バージョンにドメインを追加します。	バージョン	ドメイン					
AddHier バージョンに階層を追加します。	バージョン	階層	説明	最上位ノード			
AddInsert 指定したノード(またはドメイン・ノード)が指定したバージョンにまだ存在しない場合、このノードを追加します。そうでない場合、このノードは挿入されます。	バージョン	階層	ノード	親ノード	リーフ・プロパティ ノードを追加する場合のみ必須	説明 ドメイン・ノードを追加する場合は必須	ドメイン ドメイン・ノードを追加する場合は必須
AddOrphan バージョンに孤立ノード(またはドメイン・ノード)を追加します。	バージョン	ノード	リーフ・プロパティ	説明 ドメイン・ノードを追加する場合は必須	ドメイン ドメイン・ノードを追加する場合は必須		
Annul 指定したノードを取り消します。	バージョン	階層	ノード				
AnnulAllBelow 指定したノードに続くすべてのノードを取り消します。	バージョン	階層	ノード				
AssignHierValidations 階層レベルで検証を割り当てます。	バージョン	階層	検証				
AssignNodeToDomain ノードをドメインに割当て	バージョン	ノード	ドメイン				
AssignVersionValidations バージョン・レベルで検証を割り当てます。	バージョン	検証					

アクション名	Param1	Param2	Param3	Param4	Param5	Param6	Param7
ChangeHierTopNode 指定した階層の最上位ノードを変更します。	バージョン	階層	新規最上位ノード				
ChangeProp 指定したノードの指定したプロパティの値を更新します。	バージョン	階層	ノード	プロパティのラベルまたは名前 「ラベル別のプロパティ参照」オプションによって制御されます。	値		
ClearPropsBelow 指定したノードのすべての子に指定したプロパティの値を消去します (Data Relationship Management 内のユーザーが使用できる「下をすべて消去」コマンドに相当します)。	バージョン	階層	ノード	プロパティ・ラベル			
Delete 指定したノードをバージョンから削除し、マージ・ノード(指定されている場合)とマージします。	バージョン	階層	ノード	(マージ・ノード)			
DeleteHier バージョンから階層を削除します。	バージョン	階層					
DeleteOrphan 孤立ノードを削除します。	バージョン	ノード					
Destroy 指定したノードをバージョンから破棄します。	バージョン	階層	ノード				
Inactivate 階層内で指定したノードを非アクティブ化し、マージ・ノード(指定されている場合)とマージします。	バージョン	階層	ノード	(マージ・ノード)	(ドメイン・ノードの非アクティブ日)		
Insert 指定したノードを指定した階層に挿入します(このアクションを使用できるのは、指定したバージョン内の別の階層にすでに存在するノードに対してのみです)。	バージョン	階層	ノード	親ノード			

アクション名	Param1	Param2	Param3	Param4	Param5	Param6	Param7
LockProp 指定したノードの指定したプロパティをロックまたはロック解除します。	バージョン	階層	ノード	プロパティ・ラベル	はロックされています (0=false、1=true)		
Move 階層内の指定したノードを移動します。	バージョン	階層	ノード	宛先親ノード			
NodeExists 指定したノードが指定したバージョン内に存在する場合は True を返し、そうでない場合は False を返します。	バージョン	ノード					
NodeExistsInHier 指定したノードが指定した階層内に存在する場合は True を返し、そうでない場合は False を返します。	バージョン	階層	ノード				
NodeHasAsParent 指定した親ノードが指定したノードの親である場合は True を返し、そうでない場合は False を返します。	バージョン	階層	ノード	親ノード			
PropCompare 指定したノードの指定したプロパティの値が、フラット・ファイルにリストされている値と等しい場合は True を返し、そうでない場合は False を返します。	バージョン	階層	ノード	プロパティ・ラベル	値		
PropQuery アクション・スクリプト結果セットに指定したノードの指定したプロパティの値を返します。	バージョン	階層	ノード	プロパティ・ラベル			
Rem フラット・ファイル内の備考/コメント行を示します(文書化を目的としてこの行の他の列に任意のテキストを入力できますが、これはアクション・スクリプト・プロセスによって無視されます)。	備考	備考	備考	備考	備考		
Remove 指定したノードを階層から除去します。	バージョン	階層	ノード				
RemoveDomainFromVersion バージョンからドメインを除去します。	バージョン	ドメイン					

アクション名	Param1	Param2	Param3	Param4	Param5	Param6	Param7
RemoveDupProps 指定したノードの重複プロパティを除去(消去)します(Data Relationship Management 内のユーザーが使用できる「重複の除去」コマンドに相当します)。	バージョン	階層	ノード	プロパティ・ラベル			
RemoveHierPropValue 階層プロパティの値を除去(消去)します。	バージョン	階層	プロパティ・ラベル				
RemoveProp 指定したノードの指定したプロパティの値を除去(消去)します(プロパティ自体は、他の多くのノードがこのプロパティを使用している可能性があるため、削除されません)。	バージョン	階層	ノード	プロパティ・ラベル			
RemoveVersionPropValue バージョン・プロパティの値を除去(消去)します。	バージョン	プロパティ・ラベル					
SetControlledProperties 1 つ以上のプロパティの制御階層を設定します。	バージョン	階層	プロパティ・リスト				
UpdateHierPropValue 階層プロパティの値を更新します。	バージョン	階層	プロパティ・ラベル	値			
UpdateVersionPropValue 階層バージョンの値を更新します。	バージョン	プロパティ・ラベル	値				

フラット・ファイルからのアクション・スクリプトのロード

アクション・スクリプトは、指定されたフラット・ファイルから行を読み取ります。各フラット・ファイル行には、Data Relationship Management で実行されるアクションが定義されています。各行が読み取られ、適切なアクションが順番に実行されます。行ごとにステータス・メッセージが表示されます。詳細は「戻り値」列に表示されます。

➤ フラット・ファイルからアクション・スクリプトをロードするには:

- 1 「ホーム」 ページで、「スクリプト」を選択します。
- 2 「ソース・タイプ」 から、「ファイル」を選択します。
- 3 「参照」をクリックし、アクション・スクリプトに使用されるフラット・ファイルを選択します。

4 次のオプションのいずれかを選択します。

- 「列順序」 -- 矢印を使用して、フラット・ファイル内の 6 つの必須列の順序をカスタマイズします。
- 「文字エンコード」 -- エンコード・オプションの 1 つを選択します。
- 「区切り文字」 -- フラット・ファイル内で使用される列区切り文字を選択します。
- 「引用符で囲まれた文字列を削除」 -- 引用符を削除する場合に選択します。
- 「ラベル別のプロパティ参照」 -- 名前かわりにプロパティ・ラベルを使用する場合に選択します。

注意 一意のラベルがないプロパティを参照する場合、スクリプトのロード中に適切なプロパティを選択するために追加情報が必要になります。

- 「デフォルト」 -- すべてのオプションをデフォルト設定にリセットする場合にクリックします。

5 「ロード」をクリックします。

6 ロードが完了したら、スクリプト・アクションおよびパラメータ値を確認します。次が可能です:

-  をクリックし、行を変更します。
- 「スクリプト」、「代替バージョン」の順に選択し、バージョンを変更します。置換されるバージョンと置換するバージョンを選択し、「OK」をクリックします。
- 列ヘッダーをクリックし、アルファベット順にソートします。

注: スクリプトは引き続きロードされたときの順序で処理されます。この順序は「順序」列に示されます。

-  をクリックし、1 つ以上の列をフィルタします。
-  をクリックし、プロパティをラベル別と名前別のどちらで表示するか切り替えます。

7 実行する各行の横にある「処理」列でチェック・ボックスを選択します。

注: 「スクリプト」メニューで「すべて選択」を使用すると、すべてのアクションを処理できます。スクリプトからアクションのサブセットを選択すると、これらのアクションのみを処理できます。

8 をクリックし、アクション・スクリプトを実行します。

各スクリプト・アクションの結果は、「ステータス」および「結果の値」列に表示されます。スクリプトと結果は、「スクリプト」メニューの「ダウンロード」オプションを使用してファイルに保存できます。[「アクション・スクリプト結果のダウンロード」](#)を参照してください。

アクション・スクリプト結果のダウンロード

アクション・スクリプト結果は、次のファイル・タイプにダウンロードできます。

- タブ区切りのアクション・スクリプト(TSV)
- カンマ区切りのファイル(CSV)
- タブ区切りのファイル(TSV)
- Portable Document Format (PDF)
- Rich Text Document (RTF)
- スプレッドシート(XLS)

▶ アクション・スクリプト結果をダウンロードするには:

- 1 「スクリプト」から「ダウンロード」を選択し、ファイル・タイプを選択します。
- 2 「保存」をクリックします。
- 3 ドキュメントをダウンロードするディレクトリを参照し、ドキュメントの名前を入力し、「保存」をクリックします。

トランザクション・ログからのアクション・スクリプトのロード

トランザクション・ログ・クエリーから返されるランザクション・ログからアクション・スクリプトをロードできます。多くの場合、トランザクション・ログから作成されるアクション・スクリプトを使用して、バージョン間で手動で行われる変更を自動化します。

▶ トランザクション・ログからアクション・スクリプトをロードするには:

- 1 「ホーム」ページで、「スクリプト」を選択します。
- 2 「ソース・タイプ」から、「トランザクション・ログ」を選択します。
- 3 「ソース」タブで、次を実行します。
 - ソース・バージョン、階層およびノードを選択します。
 - システム・トランザクション、データ・トランザクション、またはその両方を返すかどうかを選択します。

注: データ・トランザクションを選択する場合、バージョン、階層およびノードを選択できます。

- 4 「フィルタ」タブで、次のオプションから選択します。
 - 「レベル」:をクリックし、フィルタ対象のアクション・レベルを指定します。
 - 「コア」:バージョン・データへの変更を示すアクションを含めます(メタデータ・オブジェクトは含めません)。

- 「ログ済」: 実行されたが結果としてデータの追加、変更または更新は行われなかったシステム・アクティビティを示すアクションを含めます。
- 「損失」: ノードの削除などのコア・アクションが原因で失われたデータを格納するトランザクション履歴レコードを含めます。
- 「結果」: コア・アクションに関連付けられた(コア・アクションの結果である)アクションを含めます。
- 「管理」: メタデータ・オブジェクトに影響するアクションを含めます(バージョン関連のデータは含めません)。
- 「アクション」:  をクリックし、フィルタ対象のトランザクション・ログ・アクション・タイプを指定します。
- 「プロパティ」:  をクリックし、フィルタ対象のプロパティのリストを指定します。
- 「ユーザー」:  をクリックし、フィルタ対象のユーザーを指定します。
- 「子ノードを含める」: 選択し、クエリーによって返されたノードの子ノードを含めます。
- 「共有ノードを含める」: 選択し、クエリーによって返されたノードの共有ノードを含めます。
- 「開始日」: 選択し、開始日を入力します。
- 「終了日」: 選択し、終了日を入力します。
- 「現在のセッションへのフィルタ」: 選択し、フィルタ処理し、現在のセッション中に実行されたトランザクションのみに限定します。
- 「開始トランザクション」: 選択し、開始トランザクション ID を入力します。
- 「終了トランザクション」: 選択し、終了トランザクション ID を入力します。
- 「最大レコード数」: 表示されるトランザクションの数を制限するための値を入力します。

5 「ロード」をクリックします。

6 ロードが完了したら、スクリプト・アクションおよびパラメータ値を確認します。次が可能です:

-  をクリックし、行を変更します。
- 「スクリプト」、「代替バージョン」の順に選択し、バージョンを変更します。置換されるバージョンと置換するバージョンを選択し、「OK」をクリックします。
- 列ヘッダーをクリックし、アルファベット順にソートします。
-  をクリックし、1 つ以上の列をフィルタします。
-  をクリックし、プロパティをラベル別と名前別のどちらで表示するか切り替えます。

7 実行対象の各行の横にある「処理」列のチェック・ボックスを選択します。

注：「スクリプト」メニューで「すべて選択」を使用すると、すべてのアクションを処理できます。スクリプトからアクションのサブセットを選択すると、これらのアクションのみを処理できます。

8  をクリックし、アクション・スクリプトを実行します。

各スクリプト・アクションの結果は「ステータス」および「結果の値」列に表示されます。スクリプトと結果は、「スクリプト」メニューの「ダウンロード」オプションを使用してファイルに保存できます。

ノード・モデルからのアクション・スクリプトのロード

既存のノードのモデルからアクション・スクリプトをロードできます。このタイプのスクリプトを使用すると、新規ノードを作成し、これを複数の階層に挿入し、既存のノードの関係および属性に基づいてプロパティ値を定義できます。

➤ ノード・モデルからアクション・スクリプトのロードするには:

- 1 「ホーム」ページで、「スクリプト」を選択します。
- 2 「ソース・タイプ」から、「ノード・モデル」を選択します。
- 3 「ソース」タブで、次を実行します。
 1. ソース・バージョンを選択します。
 2. 次のいずれかを実行し、ノードを選択します。
 -  をクリックし、ノードを選択し、「OK」をクリックします。
 - 「モデルにするノード」にノード名を入力し、「フェッチ」をクリックします。
- 4 「プロパティ」タブの「プロパティのコピー」で、ノード・モデルからコピーするプロパティを選択します。
 - 「なし」 --プロパティはコピーされません。
 - 「上書き済」 --上書きされたプロパティ値のみがコピーされます。
 - 「選択済」 --選択したプロパティのみがコピーされます。

注： フェッチにより、選択したノードのプロパティ値も取得されます。

注： 「選択済」の場合、 をクリックして、プロパティを選択するプロパティ・セレクタを表示します。

- 「すべて」 --すべてのプロパティがコピーされます。

5 次を実行します:

- ステップ4の選択内容に基づいてアクション・スクリプトに含めるグローバル・プロパティ値を表示するには、「グローバル・プロパティ」タブを選択します。
- ステップ4の選択内容に基づいて各階層から含めるローカル・プロパティ値を表示するには、「ローカル・プロパティ」タブを選択して階層を選択します。必要に応じて、変更を行います。

6 「ターゲット」タブで、次を実行します。

- 新規ノードのターゲット・バージョンを選択します。
- 新規ノードの名前を入力します。
- 新規ノードの説明を入力します。

7 「ロード」をクリックします。

8 ロードが完了したら、スクリプト・アクションおよびパラメータ値を確認します。次が可能です：

-  をクリックし、行を変更します。
- 「スクリプト」、「代替バージョン」の順に選択し、バージョンを変更します。置換されるバージョンと置換するバージョンを選択し、「OK」をクリックします。
- 列ヘッダーをクリックし、アルファベット順にソートします。
-  をクリックし、1つ以上の列をフィルタします。

9 実行する各行の横にある「処理」列でチェック・ボックスを選択します。

注：「スクリプト」メニューで「すべて選択」を使用すると、すべてのアクションを処理できます。スクリプトからアクションのサブセットを選択すると、これらのアクションのみを処理できます。

10 をクリックし、アクション・スクリプトを実行します。

各スクリプト・アクションの結果は「ステータス」および「結果の値」列に表示されます。スクリプトと結果は、「スクリプト」メニューの「ダウンロード」オプションを使用してファイルに保存できます。

この章の内容

インポート・セクション.....	111
インポートの作成	113
インポートの実行、コピー、移動および削除	118
インポート結果の表示	119

Data Relationship Management を使用すると、外部システムまたはリレーショナル・データベース・テーブルから抽出されたデータ、または複数セクションのテキスト・ファイル・フォーマットを使用してユーザーによって手動で作成されたデータをインポートできます。インポートは常に、インポート・プロセスの一部として作成された空の新規バージョンに対して実行されます。この方式を使用すると、データが正しくインポートされたことを検証し、データをデータベースに保存したり他のバージョンのデータとマージする前に問題を解決できます。データを検証した後、ブレンダを使用して、インポートしたデータを、他のソースから生成されたデータと結合できます。

注意 インポートを実行する場合、インポート対象の日時値として予期されるフォーマットを定義するために、クライアント・セッションの地域設定が使用されます。これらの設定が検出されない場合、サーバーの地域設定が使用されます。たとえば、セッションの地域設定で日付を `dd.mm.yyyy` としてフォーマットするよう指定されている場合、インポートで使用されるデータはこのフォーマットにする必要があります。そうでない場合、情報が表示されないか正しく表示されません。

インポートをカスタマイズおよび保存できるのは、アプリケーション管理者、データ・マネージャおよびデータ作成者の役割を持つユーザーです。

インポート・セクション

インポートは、最大 5 つのセクションで構成されています。各インポート・セクションは、特定粒度の一連のソース・データに対応します。インポート・セクションの全レコードの列数は、同一にする必要があります。ソース・ファイルのインポート・セクションは、接頭辞、ラベルおよび接尾辞で構成された一意のセクション・ヘッダーで識別されています。インポート・セクションは、同じタイプの複数のセクションで構成できますが、タイプが同一のすべてのセクションで列数を同じにする必要があります。データベース・ソースの場合、各インポート・セクションは単一のデータベース・テーブルにマップされています。

表 13 インポート・セクション

インポート・セクション	説明
バージョン	新規バージョンのプロパティ値 このインポート・セクションは、インポートで作成された新しいバージョンの名前または説明を、実行ごとに変える場合や、バージョン・プロパティ値をロードする場合にのみ必要です。 必須列: 「バージョン名」
階層	インポート・プロセス、その最上位ノード、および各階層のプロパティ値により作成される階層 このセクションは、階層関係を使用してノード同士を関連付ける際に必要です。 必須列: 「階層名」、「最上位ノード」
ノード	各ノードのインポート・プロセスおよびグローバル・ノードのプロパティ値により作成されるノード 階層に関連付けられていないノードは、新しいバージョンに孤立としてインポートされます。 必須列: 「ノード名」
関係	階層内のノード間の親子関係、および子ノードのグローバルまたはローカル・ノードのプロパティ値 このセクションは、階層関係を使用してノード同士を関連付ける際に必要です。インポートされる階層の最上位ノードに直接または間接的に関連付けられているノードは、挿入によってノードのインスタンスが重複する場合を除き、階層に挿入されます。 必須列: 親ノード名、「ノード名」
階層ノード	指定した階層に固有のローカル・ノード・プロパティ値 このセクションを使用する場合は、階層インポート・セクションが必要です。 必須列: 「階層名」、「ノード名」

ファイルのインポート例

```
[version]
My Version
[hier]Balance Sheet,BALSHEET
[node]
1000,Assets
2000,Liabilities
3000,Equity
[relation]
BALSHEET,1000
BALSHEET,2000
BALSHEET,3000
```

インポートの作成

インポート・ウィザードを使用して、インポートのパラメータおよび基準を定義します。ウィザードのコンテンツは、入力をサポートする「ソース」、「スタイル」、「フィルタ」、「列」および「ターゲット」タブにわたって編成されています。ウィザードのタブは入力を順番に収集するよう順序付けられていますが、任意のタブ間でナビゲートできます。

▶ インポートを作成するには:

1 「ホーム」 ページで、「インポート」 を選択します。

2  をクリックします。

3 「ソース」 タブで、「デバイス」 リストからインポート・ソースを選択します。

- 「クライアント・ファイル」 を選択した場合、「参照」 をクリックし、インポート・ファイルにナビゲートして選択します。
- 「サーバー・ファイル」 を選択した場合、接続およびファイル名を選択します。

注： サーバー・ファイルは、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリのものが使用されます。

- 「データベース・テーブル」 を選択した場合は、次を行います:
 1. 「接続」 で、データベースに対する外部接続を選択します。
 2.  をクリックして接続をテストします。
 3. インポート・セクションごとに、インポート元のデータベース・テーブルを選択します。
 4. **オプション:** インポートが正常に完了したときに、ソース接続からロードされたデータベース・レコードを消去するには、「インポートされたレコードを処理後に消去」を選択します。
 5. 手順 6 に進みます。

4 「ファイル・フォーマット」 オプションを選択します。

- 「文字エンコード」 : エンコード・オプションの 1 つを選択します。
- 「引用符で囲まれた文字列を削除」 : データのインポート時に引用符を削除する場合に選択します。

注： 一重引用符(')および二重引用符(")が削除されます。両方のタイプの引用符が同時に使用されている場合、外側の引用符セットのみが削除されます。

- 「固定幅」 または 「区切り」 : 「区切り」 の場合、区切り文字を入力します。「固定幅」 の場合、「列」 タブの「列のオプション」 に固定幅の列値を入力します。

5 次の「セクション見出し」 オプションのいずれかを選択します。

- 「接頭辞区切り文字」 : セクション見出しの先頭に表示される文字。

- 「接尾辞区切り文字」: セクション見出しの最後に表示される文字。接尾辞区切り文字はオプションです。
- インポート・ソース内のセクション見出しを選択し、セクション見出しのテキストを入力します。

注: デフォルトでは、インポート・セクションはすべて選択されています。インポート・ソース内にないセクションの選択は解除してください。

6 「スタイル」タブを選択し、「関係のソート」オプションを選択します。

- 「関係のソート」: インポート時に、ノードがソース・ファイルの関係セクションに表示される順序に基づいてノードをソートし、次のアクションの両方を完了する場合に選択します。
 - 「伝播するソート・プロパティ」: ソート順を格納するノード・プロパティを選択します。
 - 「ソートされる階層」: ソートを適用する階層を選択します。

注: ここで指定しないかぎり、デフォルトではすべての階層がソートされます。

- 「インポート・プロセスの最後にリーフ・ノードを指定」: インポート・プロセスの最後に子のない任意のノードに対してリーフ・プロパティを自動的に True に設定するよう指定する場合に選択します。

注: このオプションの場合、インポートしたデータの 2 回目の受渡しが必要であり、処理時間が長くなる可能性があります。このオプションを選択しない場合、インポートしたデータの「ノード」または「関係」セクションの列としてリーフ・プロパティが指定されていないかぎり、すべてのノードがリム・ノードとしてインポートされます。

- 「ノード名の無効な文字の適用」: InvName システム・プリファレンスに基づいてノード名を検証する場合に選択します。

7 「ドメイン・オプション」セクションで、オプションを選択することにより、インポートでドメイン名を修飾する方法を指定します。

- 「なし」 - ドメイン名は使用されません
- 「ドメインの選択」 - ドメイン内のすべてのノードを修飾します

注: このオプションを選択する場合、ドロップダウン・リストからドメイン名を選択します。

- 「インポート列の選択」 - 選択した列に基づいてノードを修飾します。ステップ 9 から 11 を参照してください。

注: ノード名を修飾すると、指定したドメインの修飾子テキストが追加されます。このノードはドメインに割り当てられません。

8 「重複する処理」オプションを選択します。

- 「ノード名の最後に一意のテキストを追加」：元のノード名の最後に名前の一意の部分を追加する場合に選択します。

注： このオプションを選択する場合、「一意の文字列」、「区切り文字」、「一意の ID シード」および「ゼロ・パディング長」パラメータを使用して、重複ノードの命名ルールを作成します。元のノード名の最後に名前の一意の部分が追加されます。選択しない場合、名前の一意の部分は先頭に接頭辞として追加されます。たとえば、001NodeA、002NodeA などです。

- 「一意の文字列」：一意の新規ノード名の一部を形成するために使用する文字列を入力します。
- 「区切り文字」：名前の一意の部分から元のノード名を区切るために使用する区切り文字を入力します。
- 「一意の ID シード」：この ID の開始ポイントを選択します。

たとえば、NodeA が階層内で 3 回使用されており、一意の ID シードが 1 である場合、元のノードは変更されず、他のノード名は NodeA1 および NodeA2 に置き換えられます。この例では、一意の ID シードの使用について説明するために他の重複設定は無視しています。

- 「ゼロ・パディング長」：重複名の一意の ID 部分に必要な最小桁数を入力します。

たとえば、ゼロ・パディング長の値を 3 にすると、NodeA001、NodeA002 などの名前の重複ノードが作成されます。値を 2 にすると、NodeA01、NodeA02 などの名前の重複ノードが作成されます。

- 「関連付けられているプロパティ」：インポートの完了後に簡単にクエリーできるように重複ノードのグループ化を可能にするプロパティを選択します。

関連付けられているプロパティが設定されると、このプロパティには、すべての重複ノード内の元のノードのノード名が移入されます。このオプションは、グローバルな関連グループ(AscGroup)プロパティを参照する必要があります。

- 「重複エラー・モード」：インポート・プロセッサが重複を処理する際の重要度を決定するモードを選択します。
 - 「警告の生成」：各重複のログに警告メッセージが追加されます。
 - 「エラーの生成」：各重複のログにエラー・メッセージが追加されます。

注： エラーの数が「最大エラー数」の値(「ターゲット」タブ上)を超えると、処理は中止されます。

9 「列」タブで、「セクション」リストからインポート・セクションを選択します。

10 「列の選択」タブで、インポート用にインポートで移入されるプロパティを選択し、それらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

注： 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。

「列を無視」という名前の特殊列は、インポート時に処理されないようにする必要のある入力ソース内の任意の列のプレースホルダとして使用できます。

ヒント： クライアントおよびサーバー・ファイルのインポートの場合は、選択したリストの右側にある矢印を使用し、ソース・ファイルで列が存在する順序に基づいて列を配置します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

11 「列のオプション」タブで、列を階層にマップできます。列名の行をダブルクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。

- 列の値をすべての階層に適用する場合は、「すべての階層に値を適用」を選択します。このオプションはデフォルトで選択されています。
- 「階層リスト」フィールドで、列を適用する各階層の名前を入力します。プロパティ値は、リストに指定されている階層にのみ設定されます。

注： リストされている階層は、インポート・ソースに指定されている階層の名前と一致する必要があります。

- 「ソース」タブで「固定幅」を選択した場合、「固定幅」列に値を入力します。

12 ステップ7で「インポート列の選択」ドメイン名修飾方法を選択した場合、「ドメイン・オプション」タブが表示されます。次のセクションを構成できます。

- 階層: 「最上位ノード」列
- ノード: 「ノード」列
- 関係: 「子」および「親」列
- 階層ノード: 「ノード」列

13 データベース・テーブルからインポートしている場合、「データベース・オプション」タブが表示されます。インポート・セクションごとに、次の列が表示されます:

- 「列」 -- 移入される Data Relationship Management プロパティの名前を表示します。
- 「ソース・フィールド」 -- 「アクション」列で  をクリックして、セクションのソース・データベース・テーブルからフィールドを選択します。   をクリックして変更を保存します。

注： ソース・フィールドは、複数の Data Relationship Management プロパティにマップできます。

- 「フィールド・タイプ」 -- ソース・データベース・テーブルのフィールドのデータ型を表示します。
- 「長さ」 -- ソース・データベース・テーブルのフィールドの長さを表示します(該当する場合)。

- 「順序」 -- 「アクション」 列で  をクリックして、インポート前にデータの順序付けに使用されたソース・データベース・テーブルからフィールドを選択します。  をクリックして変更を保存します。

14 「フィルタ」 タブで、特定のプロパティ・タイプの空白値およびデフォルト値をスキップするよう選択します。

注： 空白はスキップし、デフォルト値を使用することにより、インポートしたバージョンのサイズを最小限に抑えることをお勧めします。

15 データベース・テーブルからデータをインポートしている場合、次のデータベース・フィルタを使用できます：

- 「なし」 -- インポート中にデータベース・レコードのフィルタは発生しません。
- 「制御テーブル」 -- フィルタを制御するためのソース・データベース・テーブルの使用を指定します。制御テーブルに存在するレコードにより、インポート・セクション・テーブルのどのレコードをインポートするかが決定されます。
 1. 「テーブルのフィルタ」 から、フィルタに使用するソース・データベース・テーブルを選択します。
 2. 「キー・フィールドのフィルタ」 から、インポート・テーブルのデータのフィルタに使用された、指定フィルタ・テーブルのフィールドを選択します。
 3. 「結合フィールドのフィルタ」 セクションで  をクリックし、フィルタに使用される各インポート・セクション・テーブルのフィールドを選択します。  をクリックして変更を保存します。
- 「包含リスト」 -- インポート・セクション・テーブルのレコードのフィルタに使用するリテラル値を指定します。
 1. 「包含リスト」 セクションで、「追加」 をクリックし、結合フィールドのフィルタが指定されたすべてのインポート・セクションのテーブルのフィルタとして使用するリテラル値を入力します。
 2. 「結合フィールドのフィルタ」 セクションで  をクリックし、フィルタに使用される各インポート・セクション・テーブルのフィールドを選択します。  をクリックして変更を保存します。

16 「ターゲット」 タブで、名前を入力し、必要に応じて、インポートによって作成される新規バージョンの説明を入力します。

17 処理中にインポートが停止するまでに発生が許可されるエラーの最大数の値を選択します。

18 をクリックしてインポートを保存します。

インポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します：

- 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。

- 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準のインポートを作成および編集できるのは、データ・マネージャとアプリケーション管理者ユーザーのみです。
- 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。

インポートの実行、コピー、移動および削除

インポートは、実行、コピー、移動および削除できます。インポートは実行する前に開く必要があります。

▶ インポートを実行するには:

- 1 「ホーム」 ページで、「インポート」「」を選択し、実行するインポートを選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 タブをクリックしてインポート・パラメータを変更し、 をクリックしてインポートを実行します。

▶ インポートをコピーするには:

- 1 「ホーム」 ページで、「インポート」を選択し、コピーするインポートを選択します。
- 2 「インポート」 から「コピー」を選択します。
- 3 インポートの新しい名前と説明を入力します。
- 4 「オブジェクト・アクセス・グループ」 から、カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準インポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャ・ユーザーのみです。
 - 「システム」 --アプリケーション管理者の役割を持つユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- 5 「OK」 をクリックします。

▶ インポートを移動するには:

- 1 「ホーム」 ページで、「インポート」を選択し、移動するインポートを選択します。
- 2 「インポート」 から、「移動」を選択します。
- 3 「オブジェクト・アクセス・グループ」 から、別のグループを選択し、「OK」 をクリックします。

▶ インポートを削除するには:

- 1 「ホーム」ページで、「インポート」を選択し、削除するインポートを選択します。
- 2 「インポート」から「削除」を選択します。

インポート結果の表示

インポートの実行後、画面の下部に結果が表示されます。

▶ インポート結果をダウンロードするには:

- 1 「ダウンロード」から、ファイル・タイプを選択します:
 - CSV としてダウンロード
 - PDF としてダウンロード
 - RTF としてダウンロード
 - XLS としてダウンロード
- 2 「保存」をクリックします。
- 3 ドキュメントをダウンロードするディレクトリを参照し、ドキュメントの名前を入力し、「保存」をクリックします。

この章の内容

ブレンダの作成	121
ブレンダの実行、コピー、移動および削除	126
ブレンダの結果の表示	127

Data Relationship Management では、2つの異なるバージョンの要素を同じバージョンに結合できます。

ブレンダを使用すると、次のアクションを実行できます。

- 既存の階層に対する追加、移動または削除の処理
- アクティブ化および上位への移動(リーフからリムへ)の処理
- 階層の任意の組合せの操作
- 新規階層の作成
- ソース階層からターゲット階層内のノードへの最上位ノードのマップ。

ブレンダをカスタマイズおよび保存できるのは、アプリケーション管理者、データ・マネージャおよびデータ作成者の役割を持つユーザーです。

ブレンダの作成

ブレンダを作成するか開くと、ブレンダは名前付きタブに表示されます。

ブレンダ・ウィザードを使用して、ブレンダのパラメータおよび基準を定義します。ウィザードのコンテンツは、入力をサポートする「ソース」、「スタイル」、「フィルタ」、「プロパティ」および「ターゲット」タブにわたって編成されています。ウィザードのタブは入力を順番に収集するよう順序付けられていますが、任意のタブ間でナビゲートできます。

► ブレンダを作成するには:

- 1 「ホーム」ページで、「ブレンド」を選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 「ソース」タブで、ブレンダのソース・バージョンおよびターゲット・バージョンまたはバージョン変数を選択します。
- 4 次のいずれかのアクションを行います。

- 「すべての階層のブレンド」を選択し、選択したバージョン内のすべての階層をブレンドします。

注： このオプションを選択する場合、「すべての階層セットでプロファイルのデフォルトを使用」オプションが必要です。

- 「すべての階層のブレンド」の選択を解除し、「新規」をクリックします。
 1. 「ソース」タブで、ブレンド対象の階層と最上位ノードのマッピングを選択します。
 2. 「ターゲット」タブで、次のいずれかを実行します。
 - ソース・バージョンの階層および最上位ノードからターゲット・バージョン内の同じ階層および最上位ノードにマップするには、ドロップダウン・リストから「指定済」を選択し、「[ソースと同じ]の使用」を選択します。
 - ソース・バージョンの階層および最上位ノードからターゲット・バージョン内の別の階層および最上位ノードにマップするには、ドロップダウン・リストから「選択済」を選択し、ターゲット・バージョン内の階層および最上位ノードを選択します。
 3. 「オプション:」 「ドメイン・オプション」タブで、ドメイン・プロパティを選択します。
 4. 「OK」をクリックします。

注： 「すべての階層セットでプロファイルのデフォルトを使用」を選択すると、すべての階層/最上位ノード・セットでデフォルト値を使用できます。プロパティのプロファイル・デフォルトは、「プロパティ」タブで設定します。このオプションの選択を解除する場合、階層/最上位ノードのペアを選択する際にデフォルトを使用する階層とデフォルトを使用しない階層を選択できます。

5 「スタイル」タブで、次を実行します。

- 次の構造オプションから選択します。
 - 「構造の処理」：ノードや階層関係などの構造要素をブレンドします。
 - 「階層の作成を許可」：ソース・バージョンにのみ存在する階層をターゲット・バージョンで作成します。

注： このオプションが選択されていないときに、ソースには存在するがターゲットには存在しない階層がある場合、エラーが発生します。

- 「リーフの上位への移動を許可」：ソース内に子があるノードをターゲット内のリムに移動します。

注： ソース内のノードに子があるが、ターゲット内で対応するノードがリーフ・ノード(子が許可されていない最も外側のノード)である場合、このオプションを使用すると、このノードをリム・ステータスに上げることができます。これにより、ソースの子ノードがターゲット内のリム・ノードに追加されます。

- 次のプロパティ・オプションから選択します。
 - 「プロパティの処理」：プロパティ値をブレンドします。
 - 「リアルタイム検証を使用不可にする」：ブレンドする前にターゲット・バージョンに対するリアルタイム検証をオフにします。この設定は、ターゲット・バージョンが切り離されている場合にのみ適用されます。ターゲット・バージョンが(切り離されずに)保存される場合、この設定にかかわらず検証は引き続き有効になります。

注： リアルタイム検証を使用すると、変更がターゲットに伝播されるのを阻止できます。

- 「バージョン検証割当ての処理」：ソースからターゲットへのバージョン・レベル検証の割当てを処理します。
- 「ドメイン・オプション」セクションで、オプションを選択することにより、ドメイン名を割り当てる方法を指定します。
 - 「なし」 --ドメイン名は使用されません。
 - 「ドメインの選択」 --すべてのノードに割り当てる単一ドメインを指定します。

注： このオプションを選択する場合、すべてのノードに割り当てるドメインを選択します。

- 「ドメイン・プロパティの選択」 --ドロップダウン・リストからドメイン保持プロパティを選択します。
- 「オプション:」 「ターゲット・バージョンへのドメインの割当て」を選択します。

6 「フィルタ」タブで、「プロファイルのデフォルト」タブまたは「階層上書き」タブの次のオプションから選択します。

注： ステップ3で「すべての階層セットでプロファイルのデフォルトを使用」を選択した場合は、「プロファイルのデフォルト」タブで選択を行います。任意の階層セットが存在し、いずれの階層もデフォルトを使用しないよう設定されている場合、「階層上書き」タブが有効になります。このタブで各階層セットに対する上書きを指定します。

- 「挿入の処理」 --ソース階層にのみ存在する任意のノードをターゲット階層に挿入します。
- 「除去の処理」 -- 「除去モード」リストおよび「除去インジケータ」リストの設定に応じて、ターゲット階層にのみ存在する任意のノードを除去します。

「除去の処理」を選択した場合、次の除去モードのいずれかを選択します。

- 「除去」 --ノードはブレンド時に即時除去されます
- 「マーク」 --ノードは後で除去する対象としてマークされます

「除去モード」が「マーク」に設定されている場合、「除去インジケータ」オプションは、ノードが除去対象としてフラグ設定されているこ

とを示す値がどのプロパティに含まれるかを指定します。除去インジケータ・プロパティは、ローカルのブール・プロパティとして作成する必要があります。プロパティの作成の詳細は、Oracle Data Relationship Management Administrator's Guide を参照してください。

- 「移動の処理」 --ソース内で異なる親を持つノードをターゲット内の親に移動します。
- 「アクティブ化の処理」 --ターゲットからソースへのノードのアクティブ化(非アクティブ化および再アクティブ化)を処理します。
- 「階層検証割当ての処理」 --ソースからターゲットへの階層レベル検証の割当てを処理します。

7 「プロパティ」タブで、「プロパティ選択」から、プロパティをブレンドする次のいずれかの方法を選択します。

- 「すべての除外検証/アクセス」 --すべてのプロパティがブレンドされます; ただし、ノード・レベルの検証や、ノード・アクセス・グループのリーフ・レベルおよびリム・レベルの設定に使用されるプロパティは除きます。
- 「なし」 --プロパティはブレンドされません。
- 「選択済」 --選択したプロパティがブレンドされます。

8 「プロパティ伝播モード」から、次のいずれかのモードを選択し、ターゲットにプロパティを移入する方法を決定します。

注： ステップ 3 で「すべての階層セットでプロファイルのデフォルトを使用」を選択した場合は、「プロファイルのデフォルト」タブで選択を行います。プロファイルのデフォルトを使用することを選択しなかった場合、「階層上書き」タブで選択を行います。

- 「強制」 --プロパティがノードで定義されたものか、継承されたものか、または導出されたものかとは関係なく、プロパティはターゲット内のすべてのノードに割り当てられます。
- 「差分」 --プロパティをターゲットに移入する方法とは関係なく、値が異なる任意のノードに対してプロパティを移入します。
- 「定義済」 --プロパティがブレンドされるのは、ソース内のノードに明確に定義されている場合のみです。

9 「オプション:」 ソース内の継承ロックをターゲットにブレンドする場合は、「プロパティ・ロックの伝播」を選択します。

10 「ターゲット」タブで、ターゲット・バージョンを選択します。

- 「選択したターゲットの使用」 --選択したターゲット・バージョンに変更をブレンドします。
- 「新規バージョンにコピー」 --選択したターゲット・バージョンのコピーに変更をブレンドします。

注： このオプションを選択する場合、新規バージョンの名前および説明を指定する必要があります。

11 「最大反復数」に値を入力します。

注： この値により、ソース・バージョンとターゲット・バージョンの調整時にブレンダによって実行される最大試行回数が決まります。これにより、解決できない競合が発生した場合にブレンダが無限に実行されることを阻止します。推奨値は3です。

12 「最大エラー数」に値を入力します。

注： この値により、処理中にブレンダが完了せずに停止するまでに発生が許可されるエラーの最大数が設定されます。

13 次のブレンダ・ステータスのプロパティ・オプションについて選択を行います。

- 「値の消去」 --処理時に「ブレンダ・ステータスのプロパティ」のすべての値を False に設定します。
- 「値の移入」 --処理時に「ブレンダ・ステータスのプロパティ」の各値を True に設定します。
- 「ブレンドされたバージョン」 --バージョンがブレンドされている場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。これは、定義されたバージョン・レベルのブール・プロパティである必要があります。
- 「移動されたノード」 --ノードがブレンドによって移動された場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。これは、定義されたローカル・ノード・レベルのブール・プロパティである必要があります。
- 「作成されたノード」 --ノードがブレンドによって作成された場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。これは、定義されたグローバル・ノード・レベルのブール・プロパティである必要があります。
- 「変更されたローカル・ノード」 --ノードのローカル・プロパティがブレンドによって変更された場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。これは、定義されたローカル・ノード・レベルのブール・プロパティである必要があります。
- 「ドメインに割り当てられたノード」 --ノードにドメインが割り当てられている場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。
- 「ブレンドされた階層」 --階層がブレンドされている場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。これは、定義された階層レベルのブール・プロパティである必要があります。
- 「変更されたグローバル・ノード」 --ノードのグローバル・プロパティがブレンドによって変更された場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。これは、定義されたグローバル・ノード・レベルのブール・プロパティである必要があります。
- 「挿入されたノード」 --ノードがブレンドによって挿入された場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。これは、定義されたノード・レベルのブール・プロパティである必要があります。
- 「上位に移動されたリーフ」 --ノードがブレンドによってリーフからリムに移動された場合に TRUE に設定されるプロパティの名前。これは、定義されたグローバル・ノード・レベルのブール・プロパティである必要があります。

14 をクリックしてブレンダを保存します。

ブレンダの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:

- 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
- 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準ブレンダを作成および変更できるのはデータ・マネージャ・ユーザーのみです。
- 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。

ブレンダの実行、コピー、移動および削除

保存したブレンダは、実行、コピー、移動および削除できます。ブレンダは実行する前に開く必要があります。

▶ ブレンダを実行するには:

- 1 「ホーム」 ページで、「ブレンド」を選択し、実行するブレンダを選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 タブをクリックしてブレンダ・パラメータを変更し、 をクリックしてブレンダを実行します。

▶ ブレンダをコピーするには:

- 1 「ホーム」 ページで、「ブレンド」を選択し、コピーするブレンダを選択します。
- 2 「ブレンダ」 から「コピー」を選択します。
- 3 ブレンダの新しい名前と説明を入力します。
- 4 「オブジェクト・アクセス・グループ」 から、カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準ブレンダを作成および変更できるのはデータ・マネージャ・ユーザーのみです。
 - 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- 5 「OK」 をクリックします。

▶ ブレンダを移動するには:

- 1 「ホーム」 ページで、「ブレンド」を選択し、移動するブレンダを選択します。
- 2 「ブレンダ」 から、「移動」を選択します。

- 3 「オブジェクト・アクセス・グループ」から、別のグループを選択し、「OK」をクリックします。

▶ ブレンダを削除するには:

- 1 「ホーム」ページで、「ブレンド」を選択し、削除するブレンダを選択します。
- 2 「ブレンダ」から「削除」を選択します。

ブレンダの結果の表示

ブレンダの実行後、画面の下部に結果が表示されます。

▶ ブレンダの結果をダウンロードするには:

- 1 「ダウンロード」から、ファイル・タイプを選択します:
 - CSV としてダウンロード
 - PDF としてダウンロード
 - RTF としてダウンロード
 - XLS としてダウンロード
- 2 「保存」をクリックします。
- 3 ドキュメントをダウンロードするディレクトリを参照し、ドキュメントの名前を入力し、「保存」をクリックします。

この章の内容

エクスポートの作成	129
エクスポート・ブックの作成	167
エクスポートおよびエクスポート・ブックの実行、コピー、移動および削除	168

Data Relationship Management では、システムやユーザーごとに異なるニーズに合わせて様々なフォーマットで情報をエクスポートできます。ブックを使用すると、複数のエクスポートをグループ化してまとめて実行できます。ホーム・ページ上のエクスポート・タスクから、エクスポートとブックを作成、オープンおよび管理できます。異なるタブで複数のエクスポートを開くことができますが、一度にフォーカスを当てることができるのは1つのエクスポートのみです。また、参照対象として選択したデータ・オブジェクトからエクスポートを実行することもできます。

エクスポートの作成

Data Relationship Management には、データを様々なフォーマットで出力するための複数のエクスポート・タイプが用意されています。

次の表に、Data Relationship Management のエクスポート・タイプを示します。

	エクスポート・タイプ	説明
階層エクスポート	階層	階層からノードおよびプロパティを出力します。このエクスポートを使用して、階層ノードの親子フォーマットまたは基本リストを作成できます。 使用頻度: 高 出力フォーマット: ファイル、データベース・テーブル
	階層 XML	階層からノード、その関係およびプロパティを XML フォーマットで出力します。 使用頻度: 高 出力フォーマット: ファイル

	エクスポート・タイプ	説明
	世代	世代、または階層内のノードのレベル・ベースのフォーマットを作成します。各ノード、その祖先ノードおよびプロパティのレコードを出力します。このエクスポート・タイプを使用して、階層関係が列として表されるフォーマットを作成できます。 使用頻度: 中 出力フォーマット: ファイル
比較エクスポート	比較	2つの階層を比較し、比較基準を満たす各ノードのレコードを出力します。このエクスポートを使用して、ターゲット・システムに増分変更を提供できます。 使用頻度: 中 出力フォーマット: ファイル、データベース・テーブル
	差分	2つの階層を比較し、検出された各差分のレコードを出力します。このエクスポートを使用して、ユーザーに増分変更を報告できます。 使用頻度: 低 出力フォーマット: ファイル
統合エクスポート	EPM Architect	Oracle Hyperion Financial Management や Oracle Hyperion Planning などの複数の EPM アプリケーションと共有したりこれらにデプロイできる階層、ノードおよびプロパティを Data Relationship Management から出力します。 使用頻度: Oracle Hyperion EPM Architect と統合する場合のみ 出力フォーマット: ファイル
バージョン・エクスポート	バージョン	バージョン全体の各ノードおよびそのプロパティのレコードを出力します。このエクスポート・タイプでは、階層関係およびローカル・プロパティは使用できません。 使用頻度: 中 出力フォーマット: ファイル、データベース・テーブル
プロパティ・エクスポート	プロパティ・リスト	プロパティ定義の値のリスト内の各アイテムのレコードを出力します。これは、特別なユースケースのエクスポート・タイプです。 使用頻度: 低 出力フォーマット: ファイル
	プロパティ検索	プロパティ定義の参照テーブル内のキーと値の各ペアのレコードを出力します。これは、特別なユースケースのエクスポート・タイプです。 使用頻度: 低 出力フォーマット: ファイル
ログ・エクスポート	トランザクション・ログ	フィルタ基準を満たすトランザクション・ログ内の各アイテムのレコードを出力します。このエクスポートは、監査用として使用できます。 使用頻度: 中 出力フォーマット: ファイル、データベース・テーブル
	ログのマージ	フィルタ基準を満たすマージ・ログ内の各アイテムのレコードを出力します。このエクスポートが使用可能なのは、マージ機能が使用される場合のみです。 使用頻度: 低 出力フォーマット: ファイル

階層エクスポート

階層エクスポートでは、階層からノードおよびプロパティを出力します。この情報は、ファイルまたはデータベース・テーブルに出力できます。このエクスポート・タイプを使用して、階層ノードの親子フォーマットまたは基本リストを作成できます。

▶ 階層エクスポートを作成するには:

1 「ホーム」 ページで、「エクスポート」 を選択します。

2  をクリックします。

3 エクスポート・タイプとして「階層」 を選択します。

4 「ソース」 タブで、バージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」 リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」 リストの下「標準」 をクリックします。

5 「追加」 をクリックし、ノードを選択します。

矢印を使用してノードを再配置します。これにより、階層ノードがエクスポートされる順序が決まります。

6 「スタイル」 タブで、次のオプションから選択します。

- 「ノード選択」 : どのノード(「すべてのノード」、「リム・ノードのみ」および「リーフ・ノードのみ」)をエクスポートに含めるかを決定します。
- 「最上位ノードから再帰」 : 最上位ノードの下にあるすべてのノードの出力を含める場合に選択します。選択しない場合、最上位ノードのみが含まれます。選択した階層ごとに単一レコードをエクスポートする場合、このオプションが役立ちます。
- 「非アクティブ・ノードを含める」 : エクスポートに非アクティブ・ノードを含める場合に選択します。
- 「共有ノードを暗黙的に含める」 : 明示的に共有されている共有リム・ノードの下にある子孫ノードを含める場合に選択します。暗黙的共有ノードがエクスポートされるのは、別のオプションによってフィルタで除外されていない場合のみです。
 - エクスポートにクエリー・フィルタが使用されている場合、管理者は、共有ノードを明示的に含める必要があります。たとえば、フィルタ (#Children=0)を(#Children=0 OR (Shared Node Flag = True))に変更する必要があります。
 - 暗黙的共有ノードの場合、親プロパティには実際のノード(プライマリ・ノード)の値が反映されます。たとえば、暗黙的共有ノードの親ノード・プロパティがエクスポートに含まれる場合、この親はプライマリ・ノードと表されます。
- 「キーに基づいて重複を除去」 : 主キー(「列のオプション」 タブで定義)を使用して重複レコードがエクスポートされないようにする場合に選択します。

- 「タブ区切り出力」: タブ文字を使用して階層の各レベルのノードをインデントして構造化された出力フォーマットを生成する場合に選択します。

7 「バッチ検証」セクションで、実行する検証のタイプを選択します。

注: バッチ検証は、エクスポートに含まれる階層およびノードに対してのみ実行されます。検証はエクスポートの前に実行されます。エラーが発生した場合、エクスポートは停止します。

- 「なし」: 検証は実行されません。
- 「割当て済」: エクスポート対象のバージョン、階層およびノードに割り当てられたすべての検証が実行されます。
- 「選択済」: ☐ をクリックして実行対象の検証を選択します。

8 「繰返しパラメータ」セクションで、次のオプションから選択します。

- 「繰返し数プロパティ」: エクスポート構造内でノードを繰り返すローカルのノード・レベルの整数プロパティを参照します。たとえば、A-B-C という親子階層があるときに、「繰返し数プロパティ」の値が、ノード B は 2、ノード A および C は 1 である場合、エクスポートは A,B,B,C のようになります(ノード B は繰り返されて 2 つになります)。

注: 「繰返し数プロパティ」を使用する場合、エクスポート結果に含めるノードに対して少なくとも値 1 を設定する必要があります。「繰返し数プロパティ」のデフォルト値は 1 に設定することをお勧めします。

- 「最下位レベル・プロパティ」および「最下位レベル値」: エクスポート構造の最大の深さを決定します。この値は、階層レベルの整数プロパティ(「最下位レベル・プロパティ」)または絶対値(「最下位レベル値」)として定義できます。

最下位レベルが定義されている場合、繰返しオプションを使用して、エクスポート構造で定義されているレベルまでノードを自動的に繰り返すことができます。たとえば、親子階層内のノード A-B-C の場合、「最下位レベル値」が 6 に定義されており、ノード B の「繰返し数プロパティ」が 2 であり、「最下位リーフ・ノードの繰返し」オプションが選択されている場合、エクスポート構造は A,B,B,C,C,C のようになります(エクスポート構造の深さは 6 レベルであり、リーフ・ノード C はレベル 6 に達するまで繰り返され、ノード B は繰り返されて 2 つになります)。

9 「フィルタ」タブで、次のオプションから選択します。

- 「検証」から、エクスポートのフィルタに使用される検証を選択します。
- 「クエリー」から、エクスポートに適用するクエリー、またはクエリーを定義するためのクエリーを選択し、☐ をクリックします。
- 「テキスト・ファイルを使用して子孫ノードを含める/除外する」: エクスポートに含めるかエクスポートから除外するノードが含まれるテキスト・ファイルを作成した場合に選択します。ファイル・フォーマットは、1 行ごとにノード名が記載されたリストです。接続を選択し、ファイル名を入力

力し、ノードをエクスポートに含めるかエクスポートから除外するかを選択します。

- 10 「列」タブで、エクスポート結果で列として表示するプロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。**

ヒント： 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。「選択済」リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

ヒント： データベース・テーブルへのエクスポート時のエクスポート順を保持するには、レコード ID 列を出力に追加します。この列は、1 から開始してエクスポート内の行ごとに順次増分して自動生成される数値を提供します。

- 11 「列のオプション」タブで、次のオプションから選択します。**

- 「ピボット」：プロパティに値のカンマ区切りリストが含まれる場合、他のすべてのエクスポート列が同じ値に設定された状態で値ごとに個別レコードがエクスポートされます。「ピボット」オプションは1つの列に対してのみ選択できます。
- 「デフォルトをスキップ」：フィールド値がプロパティのデフォルト値と等しい場合、エクスポートに空白を配置します。
- 「主キー」：重複が存在するかどうかを決定する場合に使用する主キーとして1つのフィールド(または複数のフィールド)を定義します。(これは「スタイル」タブの「重複の除去」オプションによって使用されます。)

- 12 「ターゲット」タブで、結果の出力タイプを選択します。**

- 「クライアント・ファイル」：ブラウザを介して結果をダウンロードします。
- 「サーバー・ファイル」：外部接続を使用し、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリに結果を保存します。
- 「データベース・テーブル」：結果をデータベース・テーブルに保存します。

- 13 次のいずれかのアクションを行います。**

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。
 - 「列見出し」：選択したプロパティのラベルに基づいてエクスポートに列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」：エクスポート内の文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」：固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。

- 「文字エンコード」:エンコード・オプションの1つを選択します。エンコードは、出力ファイルおよびノードを含める/除外するファイル(指定されている場合)に適用します。
 - 「置換」オプション:置換する文字をリストから最大3つ選択します。指定したとおりにエクスポート内のすべてのインスタンスが置換されます。たとえば、すべてのカンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」:ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。
- 注:** カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。
- 「区切り文字」オプション:フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。
 - 「データベース・テーブル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、データベース・テーブルを選択する必要があります。データベースをドロップダウン・リストに表示するには、データベースに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「テーブルの消去」オプション
 - 「テーブルを消去しない」:指定したテーブル内の既存のデータに追加します。
 - 「バージョンIDに基づき消去」:指定した「キー」フィールドがエクスポート対象のデータの現在のバージョンIDと等しいテーブル内のデータを削除します。このオプションを選択する場合、「データベース列オプション」セクションで「キー」フィールドを指定する必要があります。エクスポートが実行されると、「キー」フィールドがエクスポート対象のデータの現在のバージョンIDと等しいテーブル内のすべてのデータが最初に削除されます。他の「テーブルの消去」オプションの場合、「キー」フィールドは無視されます。
 - 「すべての行を消去」:エクスポート出力を書き込む前にテーブルからデータを削除します。
 - 「トランザクションの使用」:エクスポートはデータベース・トランザクション内で実行され、エクスポート・エラーが発生した場合は操作全体をロールバックできます。
 - 「高速追加の使用」:エクスポートのパフォーマンスを向上させるために、ターゲット・データベース・テーブルに対するバルク挿入操作を実行します。データベース固有の接続の場合のみ使用可能です。
 - 「高速削除の使用」:パフォーマンスを向上させるために、ターゲット・データベース・テーブルに対するバルク削除操作を実行します。データベース固有の接続の場合のみ使用可能です。
 - 「データベース列オプション」:エクスポート対象の各列を外部データベース・テーブル内のフィールドにマップする必要があります。「フィー

ルド名」で、フィールドの名前を選択します。「バージョン ID に基づき消去」を指定した場合、「キー」フィールドを指定します。

注： 列は、マップ先のデータベース・フィールドと同じデータ型である必要があります。たとえば、文字列プロパティが数値データベース・フィールドにマップされると、エラーが発生します。

- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「列見出し」：列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」：文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」：固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」：エンコード・オプションの 1 つを選択します。
 - 「置換」オプション：置換する文字をリストから最大 3 つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」：ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、 をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注： カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション：フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。

14 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、 をクリックします。

エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します：

 - 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 -- すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」 -- アプリケーション管理者の役割を持つユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを検証するには、 をクリックします。

検証エラーはクリップボードにコピーできます。

- エクスポートを実行するには、 をクリックします。

「スタイル」タブで検証の実行を選択した場合、 をクリックすると、検証が実行されます。ここで、エラーが発生しない場合、エクスポートが実行されます。検証エラーが発生した場合、エクスポートは停止され、エ

ラーが表示されます。 をクリックすると、検証エラーのリストが表示されます。

カスタマイズ・タグ

カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。次の表に、使用可能なカスタマイズ・タグの説明を示します。オプションのパラメータは大カッコ[]で囲まれています。

表 14 カスタマイズ・タグ

カスタマイズ・タグ	説明
<%Date[(format)]%>	ユーザーの地域設定に基づいて現在の日付を返します(フォーマット = MM/DD/YYYY)。
<%Time[(format)]%>	ユーザーの地域設定に基づいて現在の時刻を返します(フォーマット = HH:MM:SS AMPM)。
<%Timestamp%>	日付と時刻の組合せを返します。
<%CurrentUser%>	現在の Data Relationship Management ユーザーを返します。
<%CurrentVersion%>	このエクスポートの現在の Data Relationship Management バージョンを返します。
<%PreviousVersion%>	このエクスポートの前の Data Relationship Management バージョンを返します。
<%ExportName%>	エクスポートの名前を返します。
<%FileName%>	● 出力ファイル名を返します(指定されている場合)。 ● デフォルトのファイル名を返します(指定されていない場合)。
<%RecordCount%>	エクスポートされたレコードの数を返します(フッターでのみ使用可能)。
<%AppVersion%>	Data Relationship Management 製品番号を返します(11.1.2 など)。
<%PropValue()%>	戻り値は、次のように指定したエクスポート・タイプによって異なります。
<%PropValue([Previous Current(Default)], PropName)%>	比較/差分エクスポートの場合、Previous/Current バージョンの CompareCriteria 内の最初のノードの値を返します。
<%PropValue([HierName], PropName)%>	● 階層エクスポートの場合、リスト内の最初のノードの値を返します。 ● HierName が指定されている場合、HierName と一致する最初のノードの値が返されます。
<%PropValue(PropName)%>	バージョン・エクスポートの場合、バージョン・プロパティのみを返します。

階層 XML エクスポート

階層 XML エクスポートの場合、階層からノード、その関係およびプロパティを XML フォーマットで出力します。この情報は、ファイルに出力できます。

▶ 階層 XML エクスポートを作成するには:

1 「ホーム」 ページで、「エクスポート」を選択します。

2  をクリックします。

3 エクスポート・タイプとして「階層 XML」を選択します。

4 「ソース」 タブで、バージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」 リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」 リストの下に「標準」をクリックします。

5 「追加」をクリックし、ノードを選択します。

矢印を使用してノードを再配置します。これにより、階層ノードがエクスポートされる順序が決まります。

6 「スタイル」 タブで、次のオプションから選択します。

- 「ノード選択」: どのノード(「すべてのノード」、「リム・ノードのみ」および「リーフ・ノードのみ」)をエクスポートに含めるかを決定します。
- 「最上位ノードから再帰」: 最上位ノードの下にあるすべてのノードの出力を含める場合に選択します。選択しない場合、最上位ノードのみがエクスポートに含まれます。選択した階層ごとに単一レコードをエクスポートする場合、このオプションが役立ちます。
- 「非アクティブ・ノードを含める」: エクスポートに非アクティブ・ノードを含める場合に選択します。

7 「バッチ検証」 セクションで、実行する検証のタイプを選択します。

注: バッチ検証は、エクスポートに含まれる階層およびノードに対してのみ実行されます。検証はエクスポートの前に実行され、エラーが発生した場合、エクスポートは停止されます。

- 「なし」: 検証は実行されません。
- 「割当て済」: エクスポート対象のバージョン、階層およびノードに割り当てられたすべての検証が実行されます。
- 「選択済」:  をクリックして実行対象の検証を選択します。

8 「フィルタ」 タブで、次のオプションから選択します。

- 「検証」 から、エクスポートに適用する検証を選択します。
- 「クエリー」 から、エクスポートに適用するクエリー、またはクエリーを定義するためのクエリーを選択し、 をクリックします。

- 「テキスト・ファイルを使用して子孫ノードを含める/除外する」: エクスポートに含めるかエクスポートから除外するノードが含まれるテキスト・ファイルを作成した場合に選択します。ファイル・フォーマットは、1 行ごとにノード名が記載されたリストです。接続を選択し、ファイル名を入力し、ノードをエクスポートに含めるかエクスポートから除外するかを選択します。

9 「列」タブで、エクスポート結果で列として表示するプロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

ヒント: 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。「選択済」リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

10 「ターゲット」タブで、結果の出力タイプを選択します。

- 「クライアント・ファイル」: ブラウザを介して結果をダウンロードします。
- 「サーバー・ファイル」: 外部接続を使用し、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリに結果を保存します。
- 「データベース・テーブル」: 結果をデータベース・テーブルに保存します。

11 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、次のステップに進みます。
- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。

12 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、 をクリックします。
エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 -- すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」 -- アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを検証するには、 をクリックします。
検証エラーはクリップボードにコピーできます。

- エクスポートを実行するには、をクリックします。

「スタイル」タブで検証の実行を選択した場合、をクリックすると、検証が実行され、エラーが発生しない場合はエクスポートが実行されます。検証エラーが発生した場合、エクスポートは停止され、エラーが表示され

ます。をクリックすると、検証エラーのリストが表示されます。

世代エクスポート

世代エクスポートでは、世代、または階層内のノードのレベル・ベースのフォーマットが作成されます。このエクスポートでは、各ノード、その祖先ノードおよびプロパティのレコードを出力します。この情報は、ファイルに出力できます。このエクスポート・タイプを使用して、階層関係が列として表されるフォーマットを作成できます。

➤ 世代エクスポートを作成するには:

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択します。

- 2 をクリックします。

- 3 エクスポート・タイプとして「世代」を選択します。

- 4 「ソース」タブで、バージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」リストの下に「標準」をクリックします。

- 5 「追加」をクリックし、ノードを選択します。

矢印を使用してノードを再配置します。これにより、階層ノードがエクスポートされる順序が決まります。

- 6 「スタイル」タブで、次のオプションから選択します。

- 「ノード選択」: どのノード(「すべてのノード」、「リム・ノードのみ」および「リーフ・ノードのみ」)を含めるかを決定します。
- 「最上位ノードから再帰」: 最上位ノードの下にあるすべてのノードの出力を含める場合に選択します。選択しない場合、最上位ノードのみが含まれます。選択した階層ごとに単一レコードをエクスポートする場合、このオプションが役立ちます。
- 「非アクティブ・ノードを含める」: 非アクティブ・ノードを含める場合に選択します。
- 「共有ノードを暗黙的に含める」: 明示的に共有されている共有リム・ノードの下にある子孫ノードを含める場合に選択します。暗黙的共有ノードがエクスポートされるのは、最上位ノード選択やクエリー・フィルタなどの別のオプションによってフィルタで除外されていない場合のみです。共有親ノードの下にある暗黙的共有ノードの構造は、階層エクスポートの祖先セクションに反映されます。

- エクスポートにクエリー・フィルタが使用されている場合、管理者は、共有ノードを明示的に含める必要があります。たとえば、フィルタ (#Children=0)を(#Children=0 OR (Shared Node Flag = True))に変更する必要があります。
- 暗黙的共有ノードの場合、親プロパティには実際のノード(プライマリ・ノード)の値が反映されます。たとえば、暗黙的共有ノードの親ノード・プロパティがエクスポートに含まれる場合、この親はプライマリ・ノードと表されます。
- 「ルートからノード」:エクスポート順序を設定する場合に選択します(選択しない場合、順序はノードからルートになります)。たとえば、ノード A がノード B の親であるときにこのオプションを選択すると、出力は A,B になります。そうではなく、このボックスが選択されていない場合は、B,A になります。

7 「バッチ検証」セクションで、実行する検証のタイプを選択します。

注： バッチ検証は、エクスポートに含まれる階層およびノードに対してのみ実行されます。検証はエクスポートの前に実行されます。エラーが発生した場合、エクスポートは停止します。

- 「なし」:検証は実行されません。
- 「割当て済」:エクスポート対象のバージョン、階層およびノードに割り当てられたすべての検証が実行されます。
- 「選択済」:☐をクリックして実行対象の検証を選択します。

8 「繰返しパラメータ」セクションで、次のオプションから選択します。

- 「繰返し数プロパティ」:エクスポート構造内でノードを繰り返すローカルのノード・レベルの整数プロパティを参照します。たとえば、A-B-C という親子階層があるときに、「繰返し数プロパティ」の値が、ノード B は 2、ノード A および C は 1 である場合、エクスポートは A,B,B,C のようになります(ノード B は繰り返されて 2 つになります)。

注： 「繰返し数プロパティ」を使用する場合、エクスポート結果に含めるノードに対して少なくとも値 1 を設定する必要があります。「繰返し数プロパティ」のデフォルト値は 1 に設定することをお勧めします。

- 「最下位レベル・プロパティ」および「最下位レベル値」:エクスポート構造の最大の深さを決定します。この値は、階層レベルの整数プロパティ(「最下位レベル・プロパティ」)または絶対値(「最下位レベル値」)として定義できます。

最下位レベルが定義されている場合、繰返しオプションを使用して、エクスポート構造で定義されているレベルまでノードを自動的に繰り返すことができます。たとえば、親子階層内のノード A-B-C の場合、「最下位レベル値」が 6 に定義されており、ノード B の「繰返し数プロパティ」が 2 であり、「最下位リーフ・ノードの繰返し」オプションが選択されている場合、エクスポート構造は A,B,B,C,C,C のようになります(エクスポート構造

の深さは6レベルであり、リーフ・ノードCはレベル6に達するまで繰り返され、ノードBは繰り返されて2つになります)。

9 「祖先オプション」セクションで、次のオプションから選択します。

- 「最大祖先レベル」：エクスポート構造内の祖先レベルの最大数を定義します。
- 「反転レベルの使用」：Oracle Essbase のレベル手法が使用されます。リーフが0の位置となり数が増えていきます。複数の分岐が下位にあるノードの場合、このノードが使用可能な値の最大値になります。
- 「繰返しレベルを空白にする」：繰返しノードが出力に表示されないようにします。消去している場合、指定したレベルに到達するまで出力内でノードが繰り返される可能性があります。
- 「繰返し列のグループ化」 - 繰返し列は祖先列のプロパティでグループ化されます。

10 「フィルタ」タブで、次のオプションから選択します。

- 「検証」から、エクスポートに適用する検証を選択します。
- 「クエリー」から、エクスポートに適用するクエリー、またはクエリーを定義するためのクエリーを選択し、をクリックします。

注： 包含フィルタにより、結果に含める一連のノードが決まります。包含フィルタは、祖先列として表示されるノードを制限します。

- 「テキスト・ファイルを使用して子孫ノードを含める/除外する」：エクスポートに含めるかエクスポートから除外するノードが含まれるテキスト・ファイルを作成した場合に選択します。ファイル・フォーマットは、1行ごとにノード名が記載されたリストです。接続を選択し、ファイル名を入力し、ノードをエクスポートに含めるかエクスポートから除外するかを選択します。

11 「列」タブで、「列セット」リストからオプションを選択します。

- 「前の列」：各エクスポート・レコードの先頭にエクスポートするプロパティ
- 「最下位ノード列」：指定した最下位ノードのプロパティ
- 「祖先の列」：指定した最下位ノードの祖先リストのノード・プロパティ
- 「後の列」：各エクスポート・レコードの末尾にエクスポートするプロパティ

12 エクスポート結果で列として表示するプロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

ヒント： 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。「選択済」リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

13 「列のオプション」タブで、オプションを選択します。

- 「ピボット」: プロパティに値のカンマ区切りリストが含まれる場合、他のすべてのエクスポート列が同じ値に設定された状態で値ごとに個別レコードがエクスポートされます。「ピボット」オプションは1つの列に対してのみ選択できます。
- 「デフォルトをスキップ」: フィールド値がプロパティのデフォルト値と等しい場合、エクスポートに空白を配置します。
- 「主キー」: 重複が存在するかどうかを決定する場合に使用する主キーとして1つのフィールド(または複数のフィールド)を定義します。これは「スタイル」タブの「重複の除去」オプションによっても使用されます。

14 「ターゲット」タブで、結果の出力タイプを選択します。

- 「クライアント・ファイル」: ブラウザを介して結果をダウンロードします。
- 「サーバー・ファイル」: 外部接続を使用し、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリに結果を保存します。

15 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。
 - 「列見出し」: エクスポートに列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」: 文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。
 - 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション: フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。
- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「列見出し」: 列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」: 文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。

- 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。
- 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
- 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション: フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。

16 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、をクリックします。
エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 -- すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」 -- アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを検証するには、をクリックします。
検証エラーはクリップボードにコピーできます。
- エクスポートを実行するには、をクリックします。
「スタイル」タブで検証の実行を選択した場合、をクリックすると、検証が実行されます。ここで、エラーが発生しない場合、エクスポートが実行されます。検証エラーが発生した場合、エクスポートは停止され、エラーが表示されます。をクリックすると、検証エラーのリストが表示されます。

比較エクスポート

比較エクスポートでは、2つの階層を比較し、比較基準を満たす各ノードのレコードを出力します。この情報は、ファイルまたはデータベース・テーブルに出力できます。このエクスポートを使用して、ターゲット・システムに増分変更を提供できます。

ヒント： データベース・テーブルへのエクスポート時のエクスポート順を保持するには、レコード ID 列を出力に追加します。この列は、1 から開始してエクスポート内の行ごとに順次増分して自動生成される数値を提供します。

▶ 比較エクスポートを作成するには:

- 1 「ホーム」 ページで、「エクスポート」 を選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 エクスポート・タイプとして「比較」 を選択します。
- 4 「ソース」 タブで、比較するバージョン、階層および最上位ノードを選択します。

注： 現在のバージョンと前のバージョンの両方に対して階層および最上位ノードを選択する必要があります。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」リストの下「標準」をクリックします。

5 「スタイル」タブで、オプションを選択します。

- 「ノード選択」: エクスポートに含めるノード・タイプ(「すべてのノード」、「リム・ノードのみ」 および 「リーフ・ノードのみ」)を決定します。
- 「プロパティの結合」: デフォルトでは、同じ名前を持つ各階層のマップ・ノードを比較します。また、他のプロパティに基づいてノードを結合することもできます。たとえば、指定した階層内で SortCode という名前のプロパティが一意的なキーを持つ場合、各階層で同じ SortCode を持つノード間の差異を識別するためにこのプロパティが使用されます。
- 「追加」: ソース(開始)階層には存在しないターゲット(終了)階層内のすべてのノードを含めます。
- 「削除」: ターゲット(終了)階層には存在しないソース(開始)階層内のすべてのノードを含めます。
- 「マージ」: エクスポートにマージ情報を含めます(マージ機能が使用可能な場合)。
- 「移動」: 比較階層で親が異なるすべてのノードを含めます。
- 「名前変更」: 比較階層で名前が異なるが内部 NodeID が同じであるすべてのノードを含めます。
- 「プロパティの更新」: 比較階層で指定したプロパティのリスト内で値が異なるすべてのノードを含めます。「編集」を選択し、プロパティを選択します。

6 「バッチ検証」セクションで、実行する検証のタイプを選択します。

注： バッチ検証は、エクスポートに含まれる階層およびノードに対してのみ実行されます。検証はエクスポートの前に実行されます。エラーが発生した場合、エクスポートは停止します。

- 「なし」：検証は実行されません。
- 「割当て済」：エクスポート対象のバージョン、階層およびノードに割り当てられたすべての検証が実行されます。
- 「選択済」：☐をクリックして実行対象の検証を選択します。

7 「フィルタ」タブで、次のオプションから選択します。

- 「検証」から、エクスポートに適用する検証を選択します。
- 「クエリー」から、エクスポートに適用するクエリー、またはクエリーを定義するためのクエリーを選択し、☐をクリックします。

注： 包含フィルタにより、比較する各階層の一連のノードが決まります。除外フィルタにより、エクスポート結果からノードが除外されます。

8 「列」タブで、エクスポート結果で列として表示するプロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

ヒント： 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。「選択済」リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

9 「列のオプション」タブで、次のオプションから選択します。

- 「ピボット」：プロパティに値のカンマ区切りリストが含まれる場合、他のすべてのエクスポート列が同じ値に設定された状態で値ごとに個別レコードがエクスポートされます。「ピボット」オプションは1つの列に対してのみ選択できます。
- 「デフォルトをスキップ」：フィールド値がプロパティのデフォルト値と等しい場合、エクスポートに空白を配置します。
- 「主キー」：重複が存在するかどうかを決定する場合に使用する主キーとして1つのフィールド(または複数のフィールド)を定義します。

10 「ターゲット」タブで、結果の出力タイプを選択します。

- 「クライアント・ファイル」：ブラウザを介して結果をダウンロードします。
- 「サーバー・ファイル」：外部接続を使用し、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリに結果を保存します。
- 「データベース・テーブル」：結果をデータベース・テーブルに保存します。

11 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。

- 「列見出し」: エクスポートに列見出しを含めます。
- 「引用符で囲まれた文字列」: 文字列の前後に引用符を配置します。
- 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
- 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。
- 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
- 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション: フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。
- 「データベース・テーブル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、データベース・テーブルを選択する必要があります。データベースをドロップダウン・リストに表示するには、データベースに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「テーブルの消去」オプション
 - 「テーブルを消去しない」: 指定したテーブル内の既存のデータに追加します。
 - 「バージョンIDに基づき消去」: 指定した「キー」フィールドがエクスポート対象のデータの現在のバージョンIDと等しいテーブル内のデータを削除します。このオプションを選択する場合、「データベース列オプション」セクションで「キー」フィールドを指定する必要があります。エクスポートが実行されると、「キー」フィールドがエクスポート対象のデータの現在のバージョンIDと等しいテーブル内のすべてのデータが最初に削除されます。他の「テーブルの消去」オプションの場合、「キー」フィールドは無視されます。
 - 「すべての行を消去」: エクスポート出力を書き込む前にテーブルからデータを削除します。
 - 「トランザクションの使用」: エクスポートはデータベース・トランザクション内で実行され、エクスポート・エラーが発生した場合は操作全体をロールバックできます。
 - 「高速追加の使用」: エクスポートのパフォーマンスを向上させるために、ターゲット・データベース・テーブルに対するバルク挿入操作を実行します。データベース固有の接続の場合のみ使用可能です。
 - 「高速削除の使用」: パフォーマンスを向上させるために、ターゲット・データベース・テーブルに対するバルク削除操作を実行します。データベース固有の接続の場合のみ使用可能です。

- 「データベース列オプション」: エクスポート対象の各列を外部データベース・テーブル内のフィールドにマップする必要があります。「フィールド名」で、フィールドの名前を選択します。「バージョン ID に基づき消去」を指定した場合、「キー」フィールドを指定します。

注: 列は、マップ先のデータベース・フィールドと同じデータ型である必要があります。たとえば、文字列プロパティが数値データベース・フィールドにマップされると、エラーが発生します。

- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「列見出し」: 列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」: 文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」: エンコード・オプションの 1 つを選択します。
 - 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大 3 つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、 をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション: フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。

12 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、 をクリックします。
エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」: 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」: すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」: アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを検証するには、 をクリックします。

検証エラーはクリップボードにコピーできます。

- エクスポートを実行するには、をクリックします。

「スタイル」タブで検証の実行を選択した場合、をクリックすると、検証が実行され、エラーが発生しない場合はエクスポートが実行されます。検証エラーが発生した場合、エクスポートは停止され、エラーが表示され

ます。をクリックすると、検証エラーのリストが表示されます。

差分エクスポート

差分エクスポートでは、2つの階層を比較し、検出された各差分のレコードを出力します。この情報は、ファイルに出力できます。このエクスポートを使用して、ユーザーに増分変更を報告できます。

▶ 差分エクスポートを作成するには:

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択します。
- 2 をクリックします。
- 3 エクスポート・タイプとして「差分」を選択します。
- 4 「ソース」タブで、差分をエクスポートするバージョン、階層および最上位ノードを選択します。

注： 現在のバージョンと前のバージョンの両方に対して階層および最上位ノードを選択する必要があります。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」リストの下の「標準」をクリックします。

- 5 「スタイル」タブで、次のオプションから選択します。

- 「ノード選択」: どのノード(「すべてのノード」、「リム・ノードのみ」および「リーフ・ノードのみ」)をエクスポートに含めるかを決定します。
- 「プロパティの結合」: デフォルトでは、同じ名前を持つ各階層のマップ・ノードを比較します。また、他のプロパティに基づいてノードを結合することもできます。たとえば、指定した階層内で SortCode という名前のプロパティが一意のキーを持つ場合、各階層で同じ SortCode を持つノード間の差異を識別するためにこのプロパティが使用されます。
- 「要約を含める」: エクスポート結果に差分の要約を含めます。
- 「追加」: ソース(開始)階層には存在しないターゲット(終了)階層内のすべてのノードを含めます。
- 「削除」: ターゲット(終了)階層には存在しないソース(開始)階層内のすべてのノードを含めます。

- 「マージ」: エクスポートにマージ情報を含めます(マージ機能が使用可能な場合)。
- 「移動」: 比較階層で親が異なるすべてのノードを含めます。
- 「名前変更」: 比較階層で名前が異なるが内部 NodeID が同じであるすべてのノードを含めます。
- 「プロパティの更新」: 比較階層で指定したプロパティのリスト内で値が異なるすべてのノードを含めます。「編集」をクリックし、プロパティを選択します。

6 「フィルタ」タブで、オプションを選択します。

- 「検証」から、エクスポートに適用する検証を選択します。
- 「クエリー」から、エクスポートに適用するクエリー、またはクエリーを定義するためのクエリーを選択し、をクリックします。

注: 包含フィルタにより、比較する各階層の一連のノードが決まります。

7 「列」タブで、エクスポート結果で列として表示するプロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

ヒント: 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。「選択済」リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

8 「列のオプション」タブで、オプションを選択します。

- 「ピボット」: プロパティに値のカンマ区切りリストが含まれる場合、他のすべてのエクスポート列が同じ値に設定された状態で値ごとに個別レコードがエクスポートされます。「ピボット」オプションは1つの列に対してのみ選択できます。
- 「デフォルトをスキップ」: フィールド値がプロパティのデフォルト値と等しい場合、エクスポートに空白を配置します。
- 「主キー」: 重複が存在するかどうかを決定する場合に使用する主キーとして1つのフィールド(または複数のフィールド)を定義します。

9 「ターゲット」タブで、結果の出力タイプを選択します。

- 「クライアント・ファイル」: ブラウザを介して結果をダウンロードします。
- 「サーバー・ファイル」: 外部接続を使用し、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリに結果を保存します。
- 「データベース・テーブル」: 結果をデータベース・テーブルに保存します。

10 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。
 - 「列見出し」: エクスポートに列見出しを含めます。

- 「引用符で囲まれた文字列」: エクスポート内の文字列の前後に引用符を配置します。
- 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
- 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。
- 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大3つ選択します。指定したとおりにエクスポート内のすべてのインスタンスが置換されます。たとえば、すべてのカンマをタブに置換できます。
- 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タグ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション: フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。
- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「列見出し」: 列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」: 文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。
 - 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タグ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション: フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。

11 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、をクリックします。

エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:

- 「ユーザー」: 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」: すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」: アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを実行するには、をクリックします。
- 「クライアント・ファイル」を選択した場合、ファイルをローカルにダウンロードできるダウンロード・オプションを使用できます。

EPM Architect エクスポート

Performance Management Architect エクスポートは、Performance Management Architect のインポート・フォーマットの Data Relationship Management から階層、ノードおよびプロパティを出力します。出力は、Oracle Hyperion Financial Management や Oracle Hyperion Planning などの複数の EPM アプリケーションと共有したりこれらにデプロイできます。Performance Management Architect エクスポートは、Data Relationship Management 内から実行することも、Performance Management Architect インポート・プロファイルから実行することもできます。

これらのエクスポートを Oracle Hyperion EPM Architect インポート・プロファイルから実行する方法の詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

► EPM Architect エクスポートを作成するには:

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択します。
- 2 をクリックします。
- 3 エクスポート・タイプとして「EPM Architect」を選択します。
- 4 「ソース」タブで、次を実行します。
 1. バージョンまたはバージョン変数を選択します。
 2. ターゲット・アプリケーション・タイプを選択します。
 - 連結
 - プランニング
 - Essbase (ASO)
 - Essbase (BSO)
 - 共有ライブラリ

3. 次元プロパティを選択します。これは、データ型が階層グループであるプロパティで、エクスポート対象の次元および階層を決定するために使用されます。
4. 次元タイプ・プロパティを選択します。これは、階層レベルの参照プロパティで、エクスポート対象の各次元の次元タイプを決定するために使用されます。

5 「スタイル」タブで、オプションを選択します。

- 「非アクティブ・ノードを含める」：非アクティブ・ノードを含める場合に選択します。
- 「共有ノードを暗黙的に含める」：明示的に共有されている共有リム・ノードの下にある子孫ノードを含める場合に選択します。暗黙的共有ノードがエクスポートされるのは、最上位ノード選択やクエリー・フィルタなどの別のオプションによってフィルタで除外されていない場合のみです。共有親ノードの下にある暗黙的共有ノードの構造は、階層エクスポートの祖先セクションに反映されます。
 - エクスポートにクエリー・フィルタが使用されている場合、管理者は、共有ノードを明示的に含める必要があります。たとえば、フィルタ (#Children=0)を(#Children=0 OR (Shared Node Flag = True))に変更する必要があります。
 - 暗黙的共有ノードの場合、親プロパティには実際のノード(プライマリ・ノード)の値が反映されます。たとえば、暗黙的共有ノードの親ノード・プロパティがエクスポートに含まれる場合、この親はプライマリ・ノードと表されます。

6 「バッチ検証」セクションで、実行する検証のタイプを選択します。

注： バッチ検証は、エクスポートに含まれる階層およびノードに対してのみ実行されます。検証はエクスポートの前に実行されます。エラーが発生した場合、エクスポートは停止します。

- 「なし」：検証は実行されません。
- 「割当て済」：エクスポート対象のバージョン、階層およびノードに割り当てられたすべての検証が実行されます。
- 「選択済」：をクリックして実行対象の検証を選択します。

7 オプション: 「フィルタ」タブで、エクスポートに適用するクエリー、またはクエリーを定義するためのクエリーを選択し、をクリックします。

注： 包含フィルタにより、比較する各階層の一連のノードが決まります。

- 8 「列」タブで、「親キー・プロパティ」および「メンバー・キー・プロパティ」(重複を決定する際のノードの Data Relationship Management プロパティ)を選択します。
- 9 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、をクリックします。

エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:

- 「ユーザー」: 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
- 「標準」: すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
- 「システム」: アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。

- エクスポートを検証するには、 をクリックします。

検証エラーはクリップボードにコピーできます。

- エクスポートを実行するには、 をクリックします。

「スタイル」タブで検証の実行を選択した場合、 をクリックすると、検証が実行されます。ここで、エラーが発生しない場合、エクスポートが実行されます。検証エラーが発生した場合、エクスポートは停止され、エ

ラーが表示されます。 をクリックすると、検証エラーのリストが表示されます。

バージョン・エクスポート

バージョン・エクスポートでは、バージョン全体の各ノードおよびそのプロパティのレコードを出力します。この情報は、ファイルまたはデータベース・テーブルに出力できます。

ヒント: データベース・テーブルへのエクスポート時のエクスポート順を保持するには、レコード ID 列を出力に追加します。この列は、1 から開始してエクスポート内の行ごとに順次増分して自動生成される数値を提供します。

注: このエクスポート・タイプでは、階層関係およびローカル・プロパティは使用できません。

➤ バージョン・エクスポートを作成するには:

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 エクスポート・タイプとして「バージョン」を選択します。
- 4 「ソース」タブで、バージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベー

スライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」リストの下の「標準」をクリックします。

5 「スタイル」タブで、次のオプションから選択します。

- 「ノード選択」: どのタイプのノード(「すべてのノード」、「リム・ノードのみ」および「リーフ・ノードのみ」)をエクスポートに含めるかを決定します。
- 「共有ノードを暗黙的に含める」: 明示的に共有されている共有リム・ノードの下にある子孫ノードを含める場合に選択します。暗黙的共有ノードがエクスポートされるのは、最上位ノード選択やクエリー・フィルタなどの別のオプションによってフィルタで除外されていない場合のみです。共有親ノードの下にある暗黙的共有ノードの構造は、階層エクスポートの祖先セクションに反映されます。
 - エクスポートにクエリー・フィルタが使用されている場合、管理者は、共有ノードを明示的に含める必要があります。たとえば、フィルタ(#Children=0)を(#Children=0 OR (Shared Node Flag = True))に変更する必要があります。
 - 暗黙的共有ノードの場合、親プロパティには実際のノード(プライマリ・ノード)の値が反映されます。たとえば、暗黙的共有ノードの親ノード・プロパティがエクスポートに含まれる場合、この親はプライマリ・ノードと表されます。

6 「バッチ検証」セクションで、実行する検証のタイプを選択します。

注: バッチ検証は、エクスポートに指定したバージョン全体に対して実行されます。検証はエクスポートの前に実行されます。エラーが発生した場合、エクスポートは停止します。

- 「なし」: 検証は実行されません。
- 「割当て済」: 割当て済検証がすべて実行されます。
- 「選択済」: ☐をクリックして実行対象の検証を選択します。

注: 検証は、バージョン全体に対して実行されます。

7 「フィルタ」タブで、オプションを選択します。

- 「検証」から、エクスポートに適用する検証を選択します。
- 「クエリー」から、エクスポートに適用するクエリー、またはクエリーを定義するためのクエリーを選択し、☐をクリックします。

注: 包含フィルタにより、比較する各階層の一連のノードが決まります。

8 「列」タブで、エクスポート結果で列として表示するプロパティを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

ヒント：「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。「選択済」リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

9 「ターゲット」タブで、結果の出力タイプを選択します。

- 「クライアント・ファイル」：ブラウザを介して結果をダウンロードします。
- 「サーバー・ファイル」：外部接続を使用し、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリに結果を保存します。
- 「データベース・テーブル」：結果をデータベース・テーブルに保存します。

10 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。
 - 「列見出し」：エクスポートに列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」：文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」：固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」：エンコード・オプションの1つを選択します。
 - 「置換」オプション：置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」：ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注： カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション：フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。
- 「データベース・テーブル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、データベース・テーブルを選択する必要があります。データベースをドロップダウン・リストに表示するには、データベースに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「テーブルの消去」オプション
 - 「テーブルを消去しない」：指定したテーブル内の既存のデータに追加します。
 - 「バージョンIDに基づき消去」：指定した「キー」フィールドがエクスポート対象のデータの現在のバージョンIDと等しいテーブル内のデータを削除します。このオプションを選択する場合、「デー

データベース列オプション」セクションで「キー」フィールドを指定する必要があります。エクスポートが実行されると、「キー」フィールドがエクスポート対象のデータの現在のバージョン ID と等しいテーブル内のすべてのデータが最初に削除されます。他の「テーブルの消去」オプションの場合、「キー」フィールドは無視されます。

- 「すべての行を消去」:エクスポート出力を書き込む前にテーブルからデータを削除します。
 - 「トランザクションの使用」:エクスポートはデータベース・トランザクション内で実行され、エクスポート・エラーが発生した場合は操作全体をロールバックできます。
 - 「高速追加の使用」:エクスポートのパフォーマンスを向上させるために、ターゲット・データベース・テーブルに対するバルク挿入操作を実行します。データベース固有の接続の場合のみ使用可能です。
 - 「高速削除の使用」:パフォーマンスを向上させるために、ターゲット・データベース・テーブルに対するバルク削除操作を実行します。データベース固有の接続の場合のみ使用可能です。
 - 「データベース列オプション」:エクスポート対象の各列を外部データベース・テーブル内のフィールドにマップする必要があります。「フィールド名」で、フィールドの名前を選択します。「バージョン ID に基づき消去」を指定した場合、「キー」フィールドを指定します。
- 注:** 列は、マップ先のデータベース・フィールドと同じデータ型である必要があります。たとえば、文字列プロパティが数値データベース・フィールドにマップされると、エラーが発生します。
- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「列見出し」:列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」:文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」:固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」:エンコード・オプションの1つを選択します。
 - 「置換」オプション:置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」:ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション：フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。

11 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、 をクリックします。
エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します：
 - 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを検証するには、 をクリックします。
検証エラーはクリップボードにコピーできます。
- エクスポートを実行するには、 をクリックします。
「スタイル」タブで検証の実行を選択した場合、 をクリックすると、検証が実行されます。エラーが発生しない場合、エクスポートが実行されます。検証エラーが発生した場合、エクスポートは停止され、エラーが表示されます。 をクリックすると、検証エラーのリストが表示されます。

プロパティ・リスト・エクスポート

プロパティ・リスト・エクスポートでは、プロパティ定義の値のリスト内の各アイテムのレコードを出力します。この情報は、ファイルに出力できます。

注： これは、特別なユースケースのエクスポート・タイプです。

▶ プロパティ・リスト・エクスポートを作成するには：

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 エクスポート・タイプとして「プロパティ・リスト」を選択します。
- 4 「ソース」タブで、バージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」リストの下の「標準」をクリックします。

注： 結果がバージョンによってフィルタされないとしても、このリリースでは、バージョンを選択する必要があります。

5 「使用可能」から、エクスポートの基準となるリスト・プロパティを選択します。

6 「ターゲット」タブで、結果の出力タイプを選択します。

- 「クライアント・ファイル」：ブラウザを介して結果をダウンロードします。
- 「サーバー・ファイル」：外部接続を使用し、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリに結果を保存します。
- 「データベース・テーブル」：結果をデータベース・テーブルに保存します。

7 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。
 - 「引用符で囲まれた文字列」：文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「列見出し」：列見出しを含めます。
- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」：文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「列見出し」：列見出しを含めます。

8 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、 をクリックします。
エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します：
 - 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 -- すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」 -- アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを実行するには、 をクリックします。
「クライアント・ファイル」を選択した場合、ファイルをローカルにダウンロードできるダウンロード・オプションを使用できます。

プロパティ検索エクスポート

プロパティ検索エクスポートでは、プロパティ定義の参照テーブル内のキーと値の各ペアのレコードを出力します。この情報は、ファイルに出力できます。

注： これは、特別なユースケースのエクスポート・タイプです。

► プロパティ検索エクスポートを作成するには:

1 「ホーム」 ページで、「エクスポート」 を選択します。

2  をクリックします。

3 エクスポート・タイプとして「プロパティ検索」 を選択します。

4 「ソース」 タブで、バージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」 リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」 リストの下「標準」 をクリックします。

注： 結果がバージョンによってフィルタされないとしても、このリリースでは、バージョンを選択する必要があります。

5 「使用可能」 から、エクスポートの基準となる検索プロパティを選択します。

6 **オプション:** 「スタイル」 タブを選択し、「差分のみ」 を選択し、「検索キー」と「結果の値」 が同じである検索ペアをフィルタで除外します。

7 「列」 タブで、エクスポート対象の列を選択します。

このエクスポート・タイプに関連する列は「検索キー」と「結果の値」のみであるため、使用可能な列は2つのみです。

ヒント： 「選択済」 リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

8 「ターゲット」 タブで、結果の出力タイプを選択します。

- 「クライアント・ファイル」: ブラウザを介して結果をダウンロードします。
- 「サーバー・ファイル」: 外部接続を使用し、ネットワーク・ファイル・システムまたはFTPディレクトリに結果を保存します。
- 「データベース・テーブル」: 結果をデータベース・テーブルに保存します。

9 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」 へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。
 - 「列見出し」: エクスポートに列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」: 文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。

- 「置換」オプション：置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
- 「ヘッダー/フッター」：ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注： カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション：フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。
- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「列見出し」：列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」：文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」：固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」：エンコード・オプションの1つを選択します。
 - 「置換」オプション：置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」：ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注： カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション：フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。

10 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、をクリックします。
エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します：
 - 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 -- すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。

- 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを実行するには、をクリックします。
「クライアント・ファイル」を選択した場合、ファイルをローカルにダウンロードできるダウンロード・オプションを使用できます。

トランザクション・ログ・エクスポート

トランザクション・ログ・エクスポートでは、フィルタ基準を満たすトランザクション・ログ内の各アイテムのレコードを出力します。この情報は、ファイルまたはデータベース・テーブルに出力できます。このエクスポートは、監査用として使用できます。

▶ トランザクション・ログ・エクスポートを作成するには:

- 1 「ホーム」 ページで、「エクスポート」を選択します。
- 2 をクリックします。
- 3 エクスポート・タイプとして「トランザクション・ログ」を選択します。
- 4 「ソース」タブで、バージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」リストの下の「標準」をクリックします。

注：「すべてのバージョンのエクスポートを実行」オプションを選択することもできます。

- 5 をクリックし、エクスポート対象の階層およびノードを選択します。
- 6 「フィルタ」タブで、オプションを選択します。
 - 「レベル」:をクリックし、フィルタ対象のレベルを指定します。
 - 「コア」:バージョン・データへの変更を示すアクションを含めます(メタデータ・オブジェクトは含めません)。
 - 「ログ済」:実行されたが結果としてデータの追加、変更または更新は行われなかったシステム・アクティビティを示すアクションを含めます。
 - 「損失」:ノードの削除などのコア・アクションが原因で失われたデータを格納するトランザクション履歴レコードを含めます。
 - 「結果」:コア・アクションに関連付けられた(コア・アクションの結果である)アクションを含めます。
 - 「管理」:メタデータ・オブジェクトに影響するアクションを含めます(バージョン関連のデータは含めません)。
 - 「アクション」:をクリックし、フィルタ対象のトランザクション・ログ・アクション・タイプを指定します。

- 「プロパティ」: をクリックし、フィルタ対象のプロパティのリストを指定します。
- 「ユーザー」: をクリックし、フィルタ対象のユーザーを指定します。
- 「子ノードを含める」: 子ノードを含める場合に選択します。
- 「共有ノードを含める」: 共有ノードを含める場合に選択します。
- 「開始日」: 選択し、開始日を入力します。
- 「終了日」: 選択し、終了日を入力します。
- 「開始トランザクション」: 選択し、開始トランザクション ID を入力します。
- 「終了トランザクション」: 選択し、終了トランザクション ID を入力します。
- 「現在のセッションへのフィルタ」: トランザクションをフィルタして現在のセッション中に実行されるものに限定します。

7 「列」タブで、エクスポート対象の列を選択します。

ヒント: 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。「選択済」リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

8 「ターゲット」タブで、「デバイス」リストから、結果のエクスポート先である場所を選択します(「クライアント・ファイル」、「データベース・テーブル」または「サーバー・ファイル」)。

9 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。
 - 「列見出し」: エクスポートに列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」: 文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。
 - 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、 をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくなります。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」 オプション : フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。
- 「データベース・テーブル」 へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、データベース・テーブルを選択する必要があります。データベースをドロップダウン・リストに表示するには、データベースに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「テーブルの消去」 オプション
 - 「テーブルを消去しない」 : 指定したテーブル内の既存のデータに追加します。
 - 「バージョン ID に基づき消去」 : 指定した「キー」フィールドがエクスポート対象のデータの現在のバージョン ID と等しいテーブル内のデータを削除します。このオプションを選択する場合、「データベース列オプション」セクションで「キー」フィールドを指定する必要があります。エクスポートが実行されると、「キー」フィールドがエクスポート対象のデータの現在のバージョン ID と等しいテーブル内のすべてのデータが最初に削除されます。他の「テーブルの消去」オプションの場合、「キー」フィールドは無視されます。
 - 「すべての行を消去」 : エクスポート出力を書き込む前にテーブルからデータを削除します。
 - 「トランザクションの使用」 : エクスポートはデータベース・トランザクション内で実行され、エクスポート・エラーが発生した場合は操作全体をロールバックできます。
 - 「高速追加の使用」 : エクスポートのパフォーマンスを向上させるために、ターゲット・データベース・テーブルに対するバルク挿入操作を実行します。データベース固有の接続の場合のみ使用可能です。
 - 「高速削除の使用」 : パフォーマンスを向上させるために、ターゲット・データベース・テーブルに対するバルク削除操作を実行します。データベース固有の接続の場合のみ使用可能です。
 - 「データベース列オプション」 : エクスポート対象の各列を外部データベース・テーブル内のフィールドにマップする必要があります。「フィールド名」で、フィールドの名前を選択します。「バージョン ID に基づき消去」を指定した場合、「キー」フィールドを指定します。

注： 列は、マップ先のデータベース・フィールドと同じデータ型である必要があります。たとえば、文字列プロパティが数値データベース・フィールドにマップされると、エラーが発生します。

- 「サーバー・ファイル」 へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「列見出し」 : 列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」 : 文字列の前後に引用符を配置します。

- 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
- 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。
- 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
- 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タグ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション: フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。

10 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、をクリックします。
エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 -- すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」 -- アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを実行するには、をクリックします。
「クライアント・ファイル」を選択した場合、ファイルをローカルにダウンロードできるダウンロード・オプションを使用できます。

マージ・ログ・エクスポート

マージ・ログ・エクスポートでは、フィルタ基準を満たすマージ・ログ内の各アイテムのレコードを出力します。この情報は、ファイルに出力できます。

注: このエクスポートが使用可能なのは、マージ機能が使用される場合のみです。

▶ マージ・ログ・エクスポートを作成するには:

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択します。

2  をクリックします。

3 エクスポート・タイプとして「ログのマージ」を選択します。

4 「ソース」タブで、バージョンまたはバージョン変数を選択します。

「標準」、「ベースライン」または「時点」バージョンを選択できます。「バージョン」リストは、「標準」バージョンにデフォルト設定されています。「ベースライン」または「時点」バージョンを選択するには、「バージョン」リストの下の「標準」をクリックします。

5 「フィルタ」タブで、次のオプションから選択します。

- 「開始日/終了日」: エクスポートの開始日と終了日を設定します。
- 「削除されたノード」: 削除されたノードの名前を入力します。
- 「マージ・ノード」:  をクリックし、マージ・ノードを指定します。
- 「ユーザー」: ユーザーを選択します。
- 「ステータス」: ステータスを選択します。

6 「列」タブで、エクスポート対象の列を選択します。

ヒント: 「カテゴリ」リストを使用してプロパティ・カテゴリを選択すると、ナビゲーションしやすくなります。「選択済」リスト内の列の位置は、上下矢印を使用して決定します。リスト内の最初のアイテムが第1列、リスト内の2番目のアイテムが第2列というように続きます。

7 「ターゲット」タブで、「デバイス」リストから、結果のエクスポート先である場所を選択します(「クライアント・ファイル」または「サーバー・ファイル」)。

8 次のいずれかのアクションを行います。

- 「クライアント・ファイル」へのエクスポートを選択した場合、オプションを選択します。
 - 「列見出し」: エクスポートに列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」: 文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」: 固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」: エンコード・オプションの1つを選択します。
 - 「置換」オプション: 置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」: ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、 をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注: カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション：フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。
- 「サーバー・ファイル」へエクスポートすることを選択した場合、接続を設定し、ファイル名を入力する必要があります。UNC または FTP ファイルに対して有効な外部接続がすでに作成されている必要があります。次のオプションから選択することもできます。
 - 「列見出し」：列見出しを含めます。
 - 「引用符で囲まれた文字列」：文字列の前後に引用符を配置します。
 - 「固定幅」：固定幅、列の左右行揃え、およびパッド文字数を指定できます。列情報は「固定幅オプション」セクションに入力できます。
 - 「文字エンコード」：エンコード・オプションの1つを選択します。
 - 「置換」オプション：置換する文字をリストから最大3つ選択します。たとえば、カンマをタブに置換できます。
 - 「ヘッダー/フッター」：ヘッダー/フッターと本文の間に行を追加したり、エクスポート結果のヘッダーおよびフッターに印刷するテキストを入力します。テキスト行をテキスト・ボックスに入力するか、をクリックしてテキスト・エディタを開きます。

注： カスタマイズ・タブを挿入すると、エクスポート結果をさらに読みやすくできます。詳細は、「[カスタマイズ・タブ](#)」を参照してください。

- 「区切り文字」オプション：フィールド区切り文字およびレコード区切り文字を選択します。

9 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、をクリックします。
エクスポートの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します：
 - 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- エクスポートを実行するには、をクリックします。
「クライアント・ファイル」を選択した場合、ファイルをローカルにダウンロードできるダウンロード・オプションを使用できます。

注： ブック内のエクスポートに対してバッチ検証を実行することを選択した場合、これらの検証が最初に実行されます。

エクスポート・ブックの作成

保存したエクスポートは、エクスポート・ブックでグループ化してまとめて実行できます。これにより、一般的に使用される一連のエクスポートを個別に実行するかわりに1回のアクションで実行できます。また、ブックを使用することにより、複数のエクスポートの出力を単一の出力ファイルに結合できます。

注： ブック・エクスポートは、複数のバージョンを参照できません。ブックのすべてのエクスポートが同じバージョンを参照する必要があります。

▶ エクスポート・ブックを作成するには:

- 1 「ホーム」 ページで、「エクスポート」 を選択します。
- 2  をクリックします。
- 3 「ソース」 タブで、ブックのエクスポートの選択元となるバージョンまたはバージョン変数を選択します。
- 4 「オブジェクトのアクセス権」 から、カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。
 - 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。

注： 選択するアクセス・レベルに応じて、使用可能なエクスポートのリストは制限できます。ユーザー・ブックでは、ユーザー・エクスポートと標準エクスポートを選択できます。標準ブックが参照できるのは標準エクスポートのみであり、システム・ブックが参照できるのは標準エクスポートまたはシステム・エクスポートのみです。

- 5 ブックに含めるエクスポートを選択し、これらを「使用可能」から「選択済」に移動します。

注： 「エクスポート・タイプ」 リストを使用すると、使用可能なエクスポートのリストをフィルタできます。

- 6 「オプション:」 出力を結合する場合、「ターゲット」 タブを選択し、次を実行します:
 - 1 「デバイス」 で、結合されるファイルがサーバー・ファイルであるかクライアント・ファイルであるかを指定します。
 - 2 「結合されたエクスポート出力ファイルを含める」 を選択します。
 - 3 「文字エンコード」 で、結合されるファイル、前ファイルおよび後ファイル(使用する場合)に適用するエンコードを選択します。
 - 4 サーバー・ファイルに結合する場合、外部接続を設定します。

5. **オプション:** 前ファイルおよび後ファイルの外部接続を設定します。

「前ファイル」および「後ファイル」を使用すると、結合した出力ファイルの先頭および末尾に追加されるデータを指定できます。

注: ファイルに出力するよう構成されているエクスポートと、データベース・テーブルに出力するよう構成されているエクスポートの両方がブックに含まれる場合、「結合」オプションは、ファイルに書き込むエクスポートに対してのみ影響します。

7 次のいずれかの操作を行います。

- エクスポートを保存するには、をクリックします。

ブックの名前、説明およびオブジェクト・アクセス・グループを定義するよう求められます。カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:

- 「ユーザー」 --個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
- 「標準」 --すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
- 「システム」 --アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。

- ブックを実行するには、をクリックします。

「クライアント・ファイル」を選択した場合、ファイルをローカルにダウンロードできるダウンロード・オプションを使用できます。

注: 検証を実行するブック内のエクスポートの場合、をクリックすると、検証が実行され、エラーが発生しない場合はブックが実行されます。検証エラーが発生した場合、ブック・プロセスは停止され、

エラーが表示されます。検証を実行する各エクスポートを開き、をクリックしてエラーを検索します。

エクスポートおよびエクスポート・ブックの実行、コピー、移動および削除

エクスポートおよびエクスポート・ブックは、実行、コピー、移動および削除できます。エクスポートおよびエクスポート・ブックは、実行する前に開いておく必要があります。

► エクスポートまたはブックを実行するには:

1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択します。

2 次のいずれかの操作を行います:

- 「エクスポート」タブで、エクスポートをダブルクリックします。

- 「ブック」タブで、エクスポート・ブックをダブルクリックします。
- 3 タブをクリックしてエクスポート・パラメータまたはエクスポート・ブック・パラメータを変更し、をクリックします。

注： エクスポートでは、「スタイル」タブで検証の実行を選択した場合、をクリックすると、検証が実行され、エラーが発生しない場合はエクスポートが実行されます。検証エラーが発生した場合、エクスポートは停止され、エラーが表示されます。をクリックすると、検証エラーのリストが表示されます。ブックの場合、検証エラーが発生したら、検証を実行する各エクスポートを開き、をクリックしてエラーを検索します。

▶ エクスポートまたはエクスポート・ブックをコピーするには:

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」をクリックし、コピーするエクスポートまたはエクスポート・ブックを選択します。
- 2 「エクスポート」から、「コピー」を選択します。
- 3 エクスポートまたはエクスポート・ブックの新しい名前と説明を力します。
- 4 「オブジェクト・アクセス・グループ」から、カスタム・グループまたは次のいずれかを選択します:
 - 「ユーザー」 -- 個別ユーザーのみが表示および実行できる個人オブジェクト。
 - 「標準」 -- すべてのユーザーが表示および実行できるパブリック・オブジェクト。標準エクスポートを作成および変更できるのはデータ・マネージャのみです。
 - 「システム」 -- アプリケーション管理者役割ユーザーのみが表示および実行できる制限オブジェクト。
- 5 「OK」をクリックします。

▶ エクスポートまたはエクスポート・ブックを移動するには:

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択し、移動するエクスポートを選択します。
- 2 「エクスポート」から、「移動」を選択します。
- 3 「オブジェクト・アクセス・グループ」から、別のグループを選択し、「OK」をクリックします。

▶ エクスポートまたはエクスポート・ブックを削除するには:

- 1 「ホーム」ページで、「エクスポート」を選択し、削除するエクスポートまたはエクスポート・ブックを選択します。
- 2 「エクスポート」から、「削除」を選択します。

この章の内容

ジョブの実行.....	172
ジョブの取消し	172
ジョブ結果の削除	172

ジョブ管理により、長時間実行される操作(ジョブ)とそれにより生成される結果を、より強力に制御し、可視化することができます。操作をジョブとして実行すると、ユーザーは、プロセスの実行中に別のタスクを実行でき、そのユーザーが次にアクセスしたときには、その操作のステータスや任意の結果にアクセスできるようになります。Data Relationship Management では、次のタイプの操作がジョブとして処理されます:

- アクション・スクリプト: ロード・ファイル、ロードのログ基準、プロセスのアクション
- 下をすべて取消し
- ブレンド
- ブック
- 比較: 構造、プロパティ、名前変更
- ドメイン割当てメンバーシップ
- エクスポート
- インポート
- プロパティ・プロファイル
- ノードの配置
- クエリー: ローカル、グローバル
- 検証: 選択されたバージョン、割り当てられたバージョン、グローバルに選択されたバージョン、グローバルに割り当てられたバージョン、選択された階層、割り当てられた階層、選択されたノード、割り当てられたノード、選択された特定ノード、割り当てられた特定ノード
- バージョン: バックアップ、閉じる、コピー、時点での作成、削除、ロード、復元、保存

一部のジョブ・タイプはバックグラウンドでの実行が可能で、ユーザーがジョブを取り消すことや、ジョブが実行されたページから移動して別のタスクを実行することができます。次のジョブ・タイプはバックグラウンドで実行でされます:

- ブレンド

- ブック
- 比較(構造、プロパティ、名前変更)
- エクスポート
- インポート
- クエリー

ジョブの実行

ジョブを実行すると、そのジョブは現在実行中のジョブのキューに追加されます。実行中のジョブのタブから離れるか、実行中のジョブのタブを閉じるか、Data Relationship Management をログオフした場合でも、ジョブの実行は続行します。ジョブが完了したときに実行中のジョブのタブが開いている場合、(結果を返すジョブに対する)結果がタブに表示されます。

ジョブの取消し

タブで実行中のジョブに対して、「取消し」ボタン(赤い四角)をクリックして、ジョブを取り消すことができます。ジョブ履歴ウィンドウからジョブを取り消すこともできます。一部のジョブは、取り消すことができません。次のジョブ・タイプは、取り消すことができません:

- アクション・スクリプトの実行
- 保存済バージョンにブレンド(ブレンド・ターゲットが「新規バージョンにコピー」の場合は、ジョブを取り消すことができ、それ以外の場合は、ジョブを取り消すことができません。)
- ドメイン割当てメンバーシップ
- ノードの配置
- バージョンの削除
- バージョンの保存

ジョブ結果の削除

ジョブ結果は、ジョブ履歴から個別に削除できます。また、アプリケーション管理者は、JobResultsRetentionAge システム・プリファレンスを使用し、ジョブ結果がシステムにより自動的に削除されるまでに、どのくらい保持するかを定義できます。

この章の内容

トランザクション履歴の監査	173
トランザクション履歴のデータ・アクション	175
リクエストの監査	179
ジョブ履歴の表示	180

Data Relationship Management では、アプリケーション内で実行された様々なアクティビティの履歴が監査目的で記録されます。トランザクション履歴には、バージョン・データ、アプリケーション・メタデータ、ユーザー・セキュリティへの変更など、実行されたすべての操作が記録されます。ジョブ履歴では、インポート、ブレンダ、エクスポートなど、実行に長い時間がかかるプロセスの完了が追跡されます。要求履歴には、外部アプリケーションから送信された変更要求のレコードが維持されます。

監査ウィザードを使用して、クエリーのパラメータおよび基準を定義します。ウィザードのコンテンツは、入力をサポートする「ソース」、「フィルタ」および「列」タブタブにわたって編成されています。ウィザードのタブは入力を順番に収集するように順序付けられていますが、任意のタブ間でナビゲートできます。

トランザクション、要求およびジョブ履歴は、監査タスクを使用してクエリーおよび表示できます。詳細は、次を参照してください:

- [トランザクション履歴の監査](#)
- [リクエスト履歴の監査](#)

トランザクション履歴の監査

Data Relationship Management 操作はすべてトランザクション履歴に記録されます。それぞれの操作はタイム・スタンプ、ユーザー名、実行したアクションのタイプおよびその他の関連情報とともに記録されます。

➤ トランザクション履歴をクエリーおよび表示するには:

- 1 「ホーム」ページで、「監査」を選択します。
- 2 「監査タイプ」から、「トランザクション」を選択します。
- 3 「ソース」タブで、システム・トランザクション、データ・トランザクションまたはその両方のどちらを返すかを選択します。
- 4 「フィルタ」タブで、次のオプションから選択します。

- 「レベル」:  をクリックし、フィルタ対象のレベルを指定します。
 - 「コア」: バージョン・データへの変更を示すアクションを含めます(メタデータ・オブジェクトは含めません)。
 - 「ログ済」: 実行されたが結果としてデータの追加、変更または更新は行われなかったシステム・アクティビティを示すアクションを含めます。
 - 「損失」: ノードの削除などのコア・アクションが原因で失われたデータを格納するトランザクション履歴レコードを含めます。
 - 「結果」: コア・アクションに関連付けられた(コア・アクションの結果である)アクションを含めます。
 - 「管理」: メタデータ・オブジェクトに影響するアクションを含めます(バージョン関連のデータは含めません)。
- 「アクション」:  をクリックし、フィルタ対象のトランザクション・ログ・アクション・タイプを指定します。
- 「プロパティ」:  をクリックし、フィルタ対象のプロパティのリストを指定します。
- 「ユーザー」:  をクリックし、フィルタ対象のユーザーを指定します。
- 「子ノードを含める」: 選択し、クエリーによって返されたノードの子ノードを含めます。
- 「共有ノードを含める」: 選択し、クエリーによって返されたノードの共有ノードを含めます。
- 「開始日」: 選択し、開始日を入力します。
- 「終了日」: 選択し、終了日を入力します。
- 「現在のセッションへのフィルタ」: 選択し、フィルタ処理し、現在のセッション中に実行されたトランザクションのみに限定します。
- 「開始トランザクション」: 選択し、開始トランザクション ID を入力します。
- 「終了トランザクション」: 選択し、終了トランザクション ID を入力します。
- 「最大レコード数」: 表示されるトランザクションの数を制限するための値を入力します。

5 「列」タブで、クエリー結果で列として表示するフィールドを選択します。

6  をクリックします。

トランザクション履歴のクエリー結果がウィザードの下に表示されます。

7 クエリーの実行後、次を実行できます。

- トランザクションの詳細を表示するには、行の左側にあるプラス記号をクリックします。トランザクション詳細は、「アクション」、「オブジェクト」および「履歴」タブにわたって表示されます。
- 「ダウンロード」をクリックし、ファイルのフォーマット(TSV、CSV、PDF、RTF または XLS)を選択します。

トランザクション履歴のデータ・アクション

トランザクション履歴は、バージョン、階層およびノード・データなどのコア・システムに対するすべてのデータ変更、およびユーザー・ログインなどの多くの基本機能のロギングのレコードを提供します。データ・トランザクションは、アクション・タイプ別に分類されます。記録されるアクション・タイプのリストは、次のとおりです。

コア・データの変更

- ドメインをバージョンに追加
- 階層の追加
- ノードの追加
- 孤立ノードの追加
- ノードの下をすべて取消し
- ノードの取消し
- 要求の承認
- 階層検証の割当て
- ノードをドメインに割当て
- バージョン検証の割当て
- 最上位ノードの変更
- 下をすべて消去
- 階層の削除
- ノードの削除
- 孤立の削除
- ノードの非アクティブ化
- ノードの挿入
- ノード・プロパティのロック
- ノードの移動
- ノードの再アクティブ化
- ドメインをバージョンから削除
- 重複するプロパティ値の除去
- 階層プロパティ値の除去
- ノードの除去
- ノード・プロパティ値の除去
- バージョン・プロパティ値の除去
- ノード・プロパティのロック解除
- 制御されたプロパティの更新
- 階層プロパティ値の更新
- ノード・プロパティ値の更新

- バージョン・プロパティ値の更新

ログに記録されたアクション

- スクリプト実行の追加
- カテゴリの追加
- ドメインの追加
- グリフの追加
- 階層グループの追加
- ノード・アクセス・グループの追加
- ノード・タイプの追加
- オブジェクト・アクセス・グループの追加
- プロパティの定義の追加
- プロパティ検索値の追加
- ユーザーの追加
- 検証の追加
- バージョンの追加
- バージョン変数の追加
- ワークフロー・モデルの追加
- ワークフロー・タスクの追加
- ノード・タイプ・プロパティの適用
- ノード・タイプ検証の適用
- ユーザー・カテゴリの割当て
- ユーザー・ノード・アクセス・グループの割当て
- ファイルにバックアップ
- バッチ検証実行
- ブレンダ・オブジェクト・アクセス・グループ変更済み
- ブレンダ実行
- ブック・オブジェクト・アクセス・グループ変更済み
- バルク・コピー・プロセスの実行
- ユーザーのパスワードの変更
- バージョンを閉じる
- 比較オブジェクト・アクセス・グループ変更済み
- 比較実行
- 接続オブジェクト・アクセス・グループ変更済み
- バージョンのコピー
- ブレンダの削除
- ブックの削除
- カテゴリの削除

- 比較基準の削除
- 基準リストの削除
- ドメインの削除
- エクスポートの削除
- グリフの削除
- 階層グループの削除
- インポートの削除
- ノード・アクセス・グループの削除
- ノード・タイプの削除
- オブジェクト・アクセス・グループの削除
- プロパティ定義の削除
- プロパティ検索値の削除
- 要求の削除
- ユーザーの削除
- 検証の削除
- バージョンの削除
- バージョン変数の削除
- ワークフロー・モデルの削除
- ワークフロー・タスクの削除
- バージョンの切離し
- エクスポート・オブジェクト・アクセス・グループ変更済み
- エクスポート実行
- グローバル・クエリー
- インポート・オブジェクト・アクセス・グループ変更済み
- インポート実行
- ログイン
- ログアウト
- エクスポートの移行
- インポートの移行
- バージョンを開く
- 子の順序付け
- プロファイラ実行
- プロパティ比較実行
- クエリー
- クエリー・オブジェクト・アクセス・グループ変更済み
- 階層ノードの再構築
- 比較基準の名前変更

- 比較実行の名前を変更
- 基準リストの名前変更
- ファイルから復元
- ファイル警告から復元
- ブレンダの保存
- ブックの保存
- 比較基準の保存
- エクスポートの保存
- インポートの保存
- 要求の保存
- バージョンの保存
- ユーザー・パスワードの設定
- 検証レポートの設定
- アクセス・グループの制御階層の更新
- アクセス・グループのメンバーの更新
- カテゴリの更新
- プロパティ定義のカテゴリ・リストの更新
- カテゴリ・プロパティの更新
- カテゴリ・ユーザーの更新
- 比較基準の更新
- 基準リストの更新
- ドメインの更新
- グリフの更新
- 階層検証の更新
- 階層グループの更新
- ノード・アクセス・グループの更新
- ノード・タイプの更新
- オブジェクト・アクセス・グループの更新
- プロパティ定義の更新
- プロパティ定義パラメータの更新
- プロパティ・リスト値の更新
- プロパティ検索値の更新
- システム・プリファレンスの更新
- ユーザーの更新
- ユーザー・ロックアウトの更新
- 検証の更新
- バージョン検証の更新

- バージョン変数の更新
- ワークフロー・モデルの更新
- ワークフロー・タスクの更新
- ソート済検証

損失アクション

- ノード・プロパティ・データの欠落
- 孤立メンバーから除去

リクエストの監査

Data Relationship Management のガバナンス・ワークフローによって処理された変更要求および改善要求は、ワークリストを使用して、ガバナンス・ユーザーおよびデータ・マネージャが監査できます。詳細は、[ワークリストの移動](#)を参照してください。

Web サービス API の要求インターフェースを使用して処理される外部要求は、要求履歴に記録されます。「ワークリスト」ページから使用可能な変更要求または改善要求は、要求履歴には記録されません。要求領域にアクセスするには、ユーザーがワークフロー・ユーザーの役割を持っている必要があります。各リクエストは、タイムスタンプ、リクエスト所有者のユーザー ID、実行対象のアクション、検証および承認ステータス、および他のリクエスト・レベルの情報とともに記録されます。「要求履歴」画面に初めてアクセスする場合、デフォルトのクエリーにより、所有している未承認のリクエストがすべて表示されます。

「要求履歴」画面の最上位セクションでは、クエリー基準を定義できます。下部セクションには、現在のクエリー基準を満たす変更リクエストのリストが表示されます。クエリー基準は、4つのカテゴリに分けられます。

- 要約
 - 要求 ID: 変更できません。リクエストの作成時に自動的に生成されます。
 - 「所有者」ユーザー ID: 変更できません。リクエストの作成時に定義されます。
 - 「コミット者」ユーザー ID: 変更できません。リクエストの承認時に定義されます。
 - リクエストのターゲット・バージョン。
 - 文字列値に対する完全一致の実行オプション。
 - 返されるレコードの最大数に関する設定。
- ワークフロー: アプリケーション・データの定義に使用されます。
 - カスタム ID
 - カスタム・ラベル
 - カスタム・ステータス
 - コメント
- 履歴

- ユーザーを管理するための「作成者」、「更新者」および「承認者」フィールド: ワークフロー・アプリケーションの関連情報。
- リクエストの作成、更新および承認時の「作成日」、更新日および承認日。

▶ リクエスト履歴をクエリーおよび表示するには:

- 1 「ホーム」ページで、「監査」を選択します。
- 2 「監査タイプ」から、「要求」を選択します。
- 3 「ソース」タブで、リクエスト ID、ワークフロー ID を入力するか、クエリーのソースとして使用するバージョン、階層およびノードを選択します。
- 4 「フィルタ」タブで、日付範囲、作成者、更新者および承認者を含むリクエスト履歴クエリーのフィルタ基準を定義します。
- 5 「列」タブで、クエリー結果で列として表示するフィールドを選択します。
- 6  をクリックします。

リクエスト履歴のクエリー結果がウィザードの下に表示されます。

- 7 クエリーの実行後、次を実行できます。
 - リクエストの詳細を表示するには、行の左側にあるプラス記号をクリックします。リクエスト詳細は、「アクション」、「オブジェクト」および「履歴」タブにわたって表示されます。
 - 「ダウンロード」をクリックし、ファイルのフォーマット(TSV、CSV、PDF、RTF または XLS)を選択します。

ジョブ履歴の表示

実行中のジョブおよび完了したジョブのリストは、ジョブ履歴で表示およびクエリーできます。ジョブ結果はアプリケーション・サーバーによって保持され、後で同じユーザー・セッションや今後のセッションで取得できます。次のジョブ・タイプは、ジョブ履歴で表示できる結果を返します:

- アクション・スクリプト
- ブレンド
- 比較
- エクスポートまたはブック--出力デバイスがクライアント・ファイルのみの場合、結果が保管されます。
- インポート
- クエリー

ジョブ履歴リストをフィルタして、ジョブのサブセットを表示できます。フィルタを使用しないと、すべてのジョブが返されます。ジョブ履歴リスト用の列を選択し、順序付けることもできます。

▶ ジョブ履歴を表示するには:

- 1 「ホーム」ページで、「監査」を選択します。

- 2 「監査タイプ」から、「ジョブ」を選択します。
- 3 「フィルタ」タブで、ジョブ履歴リストをフィルタするように、次のフィールドを変更します:
 - 「タイプ」 --をクリックして、ジョブ・タイプを選択します。
 - 「ステータス」 --をクリックして、ジョブ・ステータスを選択します。
 - 「オブジェクト名」 --オブジェクトの名前を入力します。ワイルドカード検索にアスタリスクを使用できます。
 - 「バージョン」 --単一バージョンのジョブに結果をフィルタするためのバージョンを選択します。
 - 「開始日」 --チェック・ボックスを選択し、ジョブの開始日時を入力します。
 - 「終了日」 --チェック・ボックスを選択し、ジョブの終了日時を入力します。
 - 「最大レコード数」 --返すレコードの最大数を入力します。
- 4 「列」タブで、「使用可能」リストから列を選択し、「選択済」リストに移動します。上下の矢印を使用して、列を順序付けします。

注：「タイプ」、「説明」および「アクション」列は、ジョブ履歴リストに常に含まれます。これらの列は、選択解除や順序付けを行うことはできません。「タイプ」と「説明」は最初の2つの列で、「アクション」は最後の列です。

ジョブ履歴リストの列は次のとおりです:

- アクション--結果を返すジョブの場合は、削除アクションを使用できます。現在進行中のジョブの場合は、取消しアクションを使用できます。
- 説明--ジョブの説明
- 経過時間--ジョブの実行にかかった時間
- 終了--ジョブが終了した日時
- ジョブ名--実行されたオブジェクトの名前
- メッセージ--エラーで完了したジョブの情報メッセージ
- パージされた結果--結果がパージされた日時
- 結果サイズ--結果の添付ファイルのサイズ(KB 単位)
- 表示された結果--結果が表示された日時
- 開始--ジョブが開始された日時
- ステータス--「完了しました」または「エラー付きで完了しました」などのジョブのステータス
- タイプ--「バージョンのロード」、「エクスポート」および「アクション・スクリプト・ロード・ファイル」など、実行中のジョブのタイプ
- 開始バージョン--開始バージョンの名前
- 終了バージョン--終了バージョンの名前

5 次のいずれかのアクションを行います。

- ジョブ履歴リストをリフレッシュするには、をクリックします。
- 成功したジョブのジョブ結果を表示するには、「ステータス」列の「完了しました」列をクリックします。
- ジョブ結果をパージするには、「アクション」列で、をクリックします。

注： ジョブ結果がジョブ履歴からパージされると、ジョブ結果の添付ファイルが削除されますが、ジョブ・エントリ自体は履歴に残ります。

この章の内容

バッチ・クライアントの保護	184
バッチ・クライアントの実行	184
コマンドライン構文	186
構成ファイル構文	192
出力および結果コード	201

Data Relationship Management バッチ・クライアントは、次を含む様々な Data Relationship Management 操作にバッチ・モードでアクセスできるコマンドライン・ユーティリティです。

- アクション・スクリプト
- インポート
- ブレンダ
- エクスポート(個別エクスポートおよびブック・エクスポート)
- バージョンのオープンおよびクローズ

バッチ・クライアント・ユーティリティ(drm-batch-client.exe)は、デフォルトでは C:\Oracle \Middleware\EPMSysstem11R1\products \DataRelationshipManagement\client\batch-client\ にインストールされます。

操作に適したコマンドライン・パラメータを渡すことにより、バッチ・クライアントは、指定されたログイン情報を使用して Data Relationship Management エンジンにログインし、特定の操作を実行するためのリクエストを送信し、サーバーから対応する結果を受信しながら、実行時のアクティビティを記録できます。操作が成功すると、エラー・レベル値として 0 が返されます。操作が失敗すると、ゼロ以外のエラー・レベル値が返されます。エラー・レベル値の詳細は、表 36 を参照してください。

バッチ・クライアントは、コマンドライン、構成ファイル、またはこれら 2 つの組合せからオプションを受け入れます。

注： 値の異なる構成ファイルとコマンドラインの両方で値が提供されている場合、コマンドラインの値が構成ファイルの値より優先されます。

バッチ・クライアントの保護

バッチ・クライアントを使用して、Data Relationship Management でバッチ・プロセスを実行します。この場合、Data Relationship Management サーバーに接続するためのユーザー名とパスワードが必要です。

バッチ・クライアントでは、Windows Data Protection Application Interface (DPAPI) を使用することにより、バッチ・クライアントのログイン情報を格納するためによりセキュアな方法を使用できます。DPAPI は、情報を保護し、作成したユーザーのみがアクセスできる場所にこれを格納します。Data Relationship Management には、バッチ・クライアントによって使用されるログイン情報を設定できるコマンドライン・ユーティリティが用意されています。

バッチ・クライアントの実行時に、ログイン情報がコマンドラインまたは構成ファイルに渡されない場合、Windows DPAPI を使用して格納されたログイン情報が使用されます。

詳細は、[バッチ・クライアント・ログイン情報の設定](#)を参照してください。

バッチ・クライアント・ログイン情報の設定

ログイン情報ユーティリティ(drm-batch-client-credentials.exe)を使用して、バッチのユーザー名およびパスワードのログイン情報を設定します。ログイン情報ユーティリティは、バッチ接続ツールをセキュアに実行するために Data Relationship Management ユーザーを現在の Windows アカウントに関連付けます。

次のコマンドライン・パラメータが有効です。

- Add: 現在の Windows アカウントの Data Relationship Management ログイン情報を格納します。
- Clear: 現在の Windows アカウントの Data Relationship Management ログイン情報を消去します。
- Info: 現在の Windows アカウントに関連付けられた Data Relationship Management ユーザー名を表示します。
- ?: ヘルプ・ファイルを表示します。

引数が渡されない場合、ログイン情報ユーティリティは対話型のプロンプトを起動します。

バッチ・クライアントの実行

▶ Data Relationship Management バッチ・クライアントを実行するには:

- 1 コマンド・プロンプトを開きます。
- 2 インストール・プログラムをダウンロードしたディレクトリ(C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products\DataRelationshipManagement\client\batch-client\など)にナビゲートします。

- 3 `drm-batch-client.exe` を入力し、この章で説明されているパラメータを後ろに追加します。

バッチ・クライアントは、コマンド・プロンプトから実行することも、外部プログラムを使用して実行するようスケジュールすることもできます。バッチ・クライアントにより、次のアクションが実行されます。

1. ログ・ファイルを開きます。ログ・ファイルがすでに存在する場合は、これに追加します。ログ・ファイルが存在しない場合は、これを作成します。
2. コマンドラインまたは構成ファイルからオプションを処理および検証します。
3. 提供されたログイン情報を使用して Data Relationship Management にログインします。
4. 適切な操作を実行します。
5. 出力ファイルを作成します。
6. サーバーからログアウトし、ログ・ファイルを閉じ、エラー・レベルを設定し、終了します。

詳細は、次を参照してください:

- [依存関係](#)
- [バッチ・クライアントでのバージョンの保存](#)

依存関係

バッチ・クライアントを実行するマシンに Microsoft .NET Framework がインストールされている必要があります。プロセス・マネージャ・アプリケーションに対する接続性/可視性も必要です。

バッチ・クライアントには、Data Relationship Management に対する TCP/IP 接続が必要です。接続を使用する権限、入力ファイルとして指定されたディレクトリからファイルを読み取る権限、およびログ・ファイルおよびエクスポート・ファイルとして指定されたディレクトリに書き込む権限が必要です。Data Relationship Management 要件の詳細は、Oracle Data Relationship Management Installation Guide を参照してください。

注: バッチ・クライアントは、個別ユーティリティ・プログラムであり、Data Relationship Management クライアント・インタフェースからはアクセスできません。

バッチ・クライアントでのバージョンの保存

バッチ・クライアントは、実行されると、既存の Data Relationship Management アプリケーション・サーバーにログインします。新規バージョンが作成されると、これらは、保存されるまでアプリケーション・サーバー上で切り離されたままになります(データベースには保存されません)。

バッチ・クライアントでインポートまたはブレードを実行する場合、新規バージョンを保存するオプション(Autosave=True)を使用できます。バージョンは保存することも、切り離されたままにすることもできます。

日時を指定できるのは、時点バージョンのみです。日付オフセットまたはトランザクション ID を使用した時点バージョンは無効です。

コマンドライン構文

バッチ・クライアントは、次に説明するコマンドライン・パラメータとともに使用できます。大カッコ([])で囲まれた値は、わかりやすくするために用意されたオプションの拡張部分です。短いバージョンの値と長いバージョンの値の両方がサポートされています。コマンドとパラメータでは大文字と小文字が区別されません。

注意 すべてのパラメータにおいて、スペースが含まれるバージョン名は引用符で囲む必要があります(“April - Production” など)。

次の表に、すべての操作に対するコマンドライン・パラメータを示します。

表 15 すべての操作

パラメータ	説明
/op=	実行する操作を指定します。 ● ActionScript ● BackupVersionToFile ● ブレード ● CloseVersion ● エクスポート ● インポート ● Multi ● OpenVersion ● RefreshVersion ● RestoreVersionFromFile ● DeleteVersion このパラメータは必須です。
/u=	ログイン用の Data Relationship Management ユーザー名を指定します。
/pw=	ログイン用の Data Relationship Management パスワードを指定します。
/url=	Data Relationship Management サーバー・プロセス内のプロセス・マネージャ・アプリケーションの URL (ポート番号を含む)を指定します。この URL は、Data Relationship Management 構成コンソールで構成され使用できます。たとえば、“net.tcp://localhost:5210/Oracle/Drm/ProcessManager”です。 このパラメータは必須です。

パラメータ	説明
/log=	ログ・ファイルのパスおよびファイル名を指定します。ファイルが存在する場合、ログは既存のファイルの末尾に追加されます。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。 注： 値が欠落していたり無効であるパラメータなどの問題のあるパラメータの後ろに/logパラメータが配置されている場合、指定したログ・ファイルが作成されない可能性があります。指定したログ・ファイルが作成されるようにするには、/logパラメータを最初のパラメータとして配置する必要があります。 このパラメータはオプションです。指定されていない場合、DRM_Batch_ClientMMDDYYYY.log という名前が使用されます。MM は月、DD は日、YYYY は年を表します。
/cfgfile=	目的のオプションを表す構成ファイルのパスおよびファイル名を指定します。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。
/h[elp] /?	コマンドライン・パラメータのリストを表示します。
/timezoneid	出力内の日時の表示に使用されます。 このパラメータはオプションです。デフォルトはサーバーのタイムゾーンです。
/culturename	languagecode-country/regioncode というフォーマットのローカル・カルチャ名です。languagecode は ISO 639-1 から導出された小文字の 2 文字のコード、country/regioncode は ISO 3166 から導出された大文字の 2 文字のコードです。たとえば、米国英語の場合は en-US です。 このパラメータはオプションです。デフォルトはサーバーのカルチャです。
/objectaccess	インポート・オブジェクト、エクスポート・オブジェクトおよびブレンダ・オブジェクトにアクセスするためのオブジェクト・アクセス方法です。有効な値は、「標準」、「システム」、「ユーザー」またはカスタム・グループです。 このパラメータはオプションです。デフォルトは Standard です。

次の表に、操作ごとに使用できるコマンドライン・パラメータを示します。

表 16 アクション・スクリプト・パラメータ

パラメータ	説明
/infile=	入力ファイルのパスおよびファイル名を指定します。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。このパラメータは必須です。
/delim=	区切り文字を指定します。次のいずれかの値を指定します： ● タブ ● カンマ ● #nnn #nnn は、任意の有効な 3 桁の ASCII 文字値(0-255)を表します。 デフォルト値は Tab です。
/cols=	列順序を指定します。指定する場合、すべての列識別子が含まれる必要があります。デフォルト値は A12345 です。

パラメータ	説明
/stripq=	引用符で囲まれた文字列を除去するかどうかを指定します。次のいずれかの値を指定します: ● Y[es] ● N[o] ● T[rue] ● F[alse] ● 1 ● 0 デフォルト値は True です。
/propertyrefbylabel	ラベル(名前のかわり)によって参照されるプロパティを検索します。次のいずれかの値を指定します: ● Y[es] ● N[o] ● T[rue] ● F[alse] ● 1 ● 0
/encoding	エンコード名またはエンコード・コード・ページ番号としての入力ファイルの文字エンコード。このパラメータはオプションです。 デフォルトは UTF8 です。

表 17 ブレンド・パラメータ

パラメータ	説明
/bl=	実行するブレンドの名前を指定します。このパラメータは必須です。
/sver=	ブレンドするソース・バージョンの名前を指定します。このパラメータは必須です。
/tver=	ブレンドするターゲット・バージョンの名前を指定します。このパラメータは必須です。
/nvera=	作成する新規バージョンの名前を指定します。
/nverd=	新規バージョンの説明を指定します。値は二重引用符で囲む必要があります。
/save=	ブレンドしたバージョンを保存するか、切り離したままにするかを指定します。次のいずれかの値を指定します: ● Y[es]、T[rue]、または 1 ● N[o]、F[alse]、または 0 デフォルト値は False です。バージョンの保存の詳細は、185 ページの「バッチ・クライアントでのバージョンの保存」を参照してください。
/blendlog=	ブレンド・ログ・ファイルの名前を指定します(バッチ・クライアント・ログ・ファイルと同じではありません)。

表 18 クローズ・パラメータ

パラメータ	説明
/abbrev=	閉じるバージョンの名前を指定します。このパラメータは必須です。

表 19 エクスポート・パラメータ

パラメータ	説明
/xtype	エクスポートのタイプ(個別エクスポートまたはブック)を指定します。次のいずれかの値を指定します: ● E[xport] ● B[ook] このパラメータは必須です。
/fdate=	トランザクション・ログ・エクスポートの開始日時を指定します(オプション)。 注: 日時フォーマットは、クライアント・コンピュータの地域設定によって決定されます。
/tdate=	トランザクション・ログ・エクスポートの終了日時を指定します(オプション)。 注: 日時フォーマットは、クライアント・コンピュータの地域設定によって決定されます。
/outfile=	クライアント・ファイルに出力するよう構成されたエクスポートの場合、このパラメータは、出力ファイルのパスおよびファイル名を指定します。出力ファイルが存在する場合、このファイルは上書きされます。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。このパラメータが指定されており、出力を外部サーバー接続に送信するようエクスポートが構成されている場合、このパラメータによって外部サーバー接続が上書きされ、/outfile を使用して指定されたファイルにエクスポートが書き込まれます。
/xname=	実行する保存済エクスポートの名前を指定します。単一エクスポートを実行する場合、このパラメータは必須です。
/cver=	現在のバージョンの名前を指定します。このパラメータはオプションです。指定されていない場合、DefaultCurrentVersion システム・プリファレンスの値が使用されます。
/pver=	前のバージョンの名前を指定します。このパラメータはオプションです。指定されていない場合、DefaultPreviousVersion システム・プリファレンスの値が使用されます。
/cvertype=	現在のバージョンのバージョン・タイプを指定します。有効な値は次のとおりです。 ● A[s Of] ● N[ormal] デフォルトは N[ormal] です。
/pvertype=	前のバージョンのバージョン・タイプを指定します。有効な値は次のとおりです。 ● A[s Of] ● N[ormal] デフォルトは N[ormal] です。
/casofdate=	エクスポートの現在のバージョンの時点バージョンを作成する場合に使用する時点日時を指定します。 注: 日時フォーマットは、クライアント・コンピュータの地域設定によって決定されます。

パラメータ	説明
/pasofdate=	エクスポートの前のバージョンの時点バージョンを作成する場合に使用する時点日時を指定します。 注： 日時フォーマットは、クライアント・コンピュータの地域設定によって決定されます。
/bk=	実行する保存済ブックの名前を指定します。ブックをエクスポートする場合、このパラメータは必須です。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。
/bkcmb=	/outfile に指定されているファイルにエクスポート出力を結合するかどうかを指定します。次のいずれかの値を指定します： ● Y[es] ● N[o] ● T[rue] ● F[alse] ● 1 ● 0 このパラメータが False である場合、各エクスポートは、エクスポート・プロファイルに格納されているファイル名に保存されます。エクスポート・プロファイル内のファイル名が無効であるエクスポート、または出力がファイル以外の値に設定されているエクスポートは、/outfile に指定されているファイルに結合されます。デフォルト値はブックに格納されています。
/prefile=	結合されたエクスポート・ブックの先頭に追加するパスおよびファイル名を指定します。デフォルト値はブックに格納されています。
/pstfile=	結合されたエクスポート・ブックに追加するパスおよびファイル名を指定します。デフォルト値はブックに格納されています。
/fhier=	開始(前の)階層を指定します。階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートに使用されます。
/thier=	終了(現在の)階層を指定します。階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートに使用されます。
/fabbrrev=	開始(前の)階層の最上位ノードの名前を指定します。階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートに使用されます。
/tabbrrev=	終了(現在の)階層の最上位ノードの名前を指定します。階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートに使用されます。
/hier=	エクスポートする階層の名前を指定します。階層エクスポートおよび他の同様のエクスポートに使用されますが、階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートには使用されません。
/nabbrrev=	エクスポートする最上位ノードの名前を指定します。階層エクスポートおよび他の同様のエクスポートに使用されますが、階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートには使用されません。

パラメータ	説明
/encoding	エンコード名またはエンコード・コード・ページ番号としてのファイルの文字エンコード。このパラメータはオプションです。 エンコードを指定した場合、実行中のエクスポートまたはブックで保存されたエンコードは上書きされます。指定されたエンコードは、バッチ・クライアントの使用可能なローカルの前ファイル・オプションおよび後ファイル・オプションにも適用します。 注： ブックを実行すると、エンコードによって、ブック内のエクスポートのエンコードは上書きされず、ブック自体のエンコード設定のみが上書きされます。 デフォルトは UTF8 です。

表 20 インポート・パラメータ

パラメータ	説明
/infile=	クライアント・ファイルからインポートするよう構成されたインポートの場合、このパラメータは、入力ファイルのパスおよびファイル名を指定します。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。このパラメータが必要なのは、クライアント・ファイルからインポートするよう構成されたインポートの場合のみです。 注意 外部サーバー接続からの入力ファイルを使用するよう構成されたインポートにはこのパラメータを使用しないでください。使用すると、エラーが発生します。
/iabbrev=	実行するインポートの名前を指定します。このパラメータは必須です。
/implog=	インポート・ログ・ファイルの名前を指定します(バッチ・クライアント・ログ・ファイルと同じではありません)。このパラメータは必須です。
/vabbrev=	インポートによって作成されるバージョン名を指定します。デフォルト値はインポート・プロファイルに格納されています。
/vdescr=	インポートによって作成されるバージョンの説明を指定します。デフォルト値はインポート・プロファイルに格納されています。
/save=	インポートしたバージョンを保存するか、切り離したままにするかを指定します。次のいずれかの値を指定します: ● Y[es] ● N[o] ● T[rue] ● F[alse] ● 1 ● 0 デフォルト値は False です。 バージョンの保存の詳細は、185 ページの「バッチ・クライアントでのバージョンの保存」を参照してください。

表 21 オープン・パラメータ

パラメータ	説明
/vabbrev=	開くバージョンの名前を指定します。このパラメータは必須です。

表 22 リフレッシュ・パラメータ

パラメータ	説明
/vabbrev=	リフレッシュする(閉じて再度開く)バージョンの名前を指定します。このパラメータは必須です。

表 23 削除パラメータ

パラメータ	説明
/vabbrev=	削除するバージョンの名前を指定します。このパラメータは必須です。

表 24 ファイルからのバージョンの復元パラメータ

パラメータ	説明
/filename=	外部接続(/conn)を使用して検索するファイルの名前を指定します。
/conn=	外部接続の名前を指定します。
/sver=	復元するソース・ファイル内のバージョンの名前を指定します。複数のバージョンがある場合は、/delim で区切ります。
/tver=	/sver パラメータと相関関係にある新規バージョンの名前を指定します。複数のバージョンがある場合は、/delim で区切ります。
/delim=	印刷可能な区切り文字。コロン(:)、カンマ(;)、ダッシュ(-)などの単一文字を使用します。
/save=	復元後にバージョンを保存します。Y: Yes、N: No、T: True、F: False、1、0

表 25 ファイルへのバージョンのバックアップ・パラメータ

パラメータ	説明
/vabbrev=	バックアップするバージョンの名前を指定します。複数のバージョンがある場合は、/delim で区切ります。
/conn=	外部接続の名前を指定します。
/filename=	外部接続(/conn)を使用して作成するバックアップ・ファイルの名前を指定します。
/delim=	印刷可能な区切り文字。コロン(:)、カンマ(;)、ダッシュ(-)などの単一文字を使用します。

構成ファイル構文

コマンドライン・パラメータを使用する以外に、バッチ・クライアントは構成ファイルを使用して実行することもできます。構成ファイルは INI ファイルのように、セクション、キーおよび値を使用してフォーマットされます。General セクションと特定の操作の追加セクションがあります。セクション名は大カッコ([])で囲まれ、任意の文字列値を使用できますが、操作キーによって指定された値と一致する必要があります。各セクション内の行は、キー=値のペアの形式でフォーマットされます。

構成ファイルの例は、次のとおりです。

```
[General]
```

```
Operation=Export
```

```
UserName=mylogin
```

```
Password=mypassword
```

```
URL=net.tcp://localhost:5210/Oracle/Drm/ProcessManager
```

```
LogFileName=C:\Oracle\Data Relationship Management\rdsc.log
```

```
[Export]
```

```
ExportType=Export
```

```
ExportName=WeeklyExport
```

```
OutFile= C:\Oracle\Data Relationship Management\export_data.txt
```

```
CurrentVersionAbbrev=COA Current
```

```
PrevVersionAbbrev=COA Previous
```

構成ファイルには、複数の操作を含めることができます。各操作は、一意のラベルとともに個別セクションに含まれます。[Operations]というラベルの特別なセクションは、ファイル内の操作セクションの数および各セクションのラベルを指定するために使用されます。これらの操作は、リストされている順序で実行されます。

複数の操作が含まれる構成ファイルの例は、次のとおりです。複数の操作を使用する場合、Operation=Importなどの操作キーを各セクションに含める必要があることに注意してください。

注： セクション、キーおよび値の大文字と小文字は区別されません。

```
[General]
```

```
Operation=Multiple
```

```
UserName=mylogin
```

Password=mypassword

URL=net.tcp://localhost:5210/Oracle/Drm/ProcessManager

LogFileName=C:\Oracle\Data Relationship Management\rdsc.log

[Operations]

OperationCount=3

Operation1=Weekly_Import

Operation2=Update_CostCenters

Operation3=Merge_Data

[Weekly_Import]

Operation=Import

InFile="COA_data.txt"

ImportAbbrev="RDSC Import"

ImportLogFileName="C:\Oracle\Data Relationship Management\Batch Client
\import_log.txt"

VersionAbbrev="COA Current"

VersionDescription="COA for this month"

[Update_CostCenters]

Operation=Action Script

InFile=CostCenter_changes.txt

StripQuotedStrings=True

Delimiter=comma

[Merge_Data]

Operation=Blend

Blendname="COA Blender"

SourceVersionAbbrev="COA Current"

TargetVersionAbbrev="COA Previous"

NewVersionAbbrev="COA Blended"

NewVersionDescription="Current and Previous COA"

次の表に、構成ファイルの各セクションで使用できるキーを示します。

表 26 構成ファイルの General セクション

キー	説明
Operation	実行する操作を指定します。次のいずれかの値を指定します: ● ActionScript ● BackupVersionToFile ● ブレンド ● CloseVersion ● エクスポート ● インポート ● Multi ● OpenVersion ● RefreshVersion ● RestoreVersionFromFile ● DeleteVersion このキーは必須です。
UserName	ログイン用の Data Relationship Management ユーザー名を指定します。このキーは必須です。
Password	ログイン用の Data Relationship Management パスワードを指定します。このキーは必須です。

キー	説明
URL	Data Relationship Management サーバー・プロセス内のプロセス・マネージャ・アプリケーションの URL (ポート番号を含む)を指定します。この URL は、Data Relationship Management 構成コンソールで構成され使用できます。たとえば、<code>net.tcp://localhost:5210/Oracle/Drm/ProcessManager</code> です。 注： 値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。 このキーは必須です。
LogFileName	ログ・ファイルのパスおよびファイル名を指定します。ファイルが存在する場合、ログは既存のファイルの末尾に追加されます。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。 デフォルトのファイル名は <code>DRM_Batch_ClientMMDDYYYY.log</code> です。MM は月、DD は日、YYYY は年を表します。
TimezoneOffset	GMT からのローカル・オフセット分数。たとえば、U.S. CST の GMT からのオフセット分数は-360 です。 このパラメータはオプションです。デフォルトはサーバーのタイムゾーンです。
CultureName	languagecode-country/regioncode というフォーマットのローカル・カルチャ名です。languagecode は ISO 639-1 から導出された小文字の 2 文字のコード、country/regioncode は ISO 3166 から導出された大文字の 2 文字のコードです。たとえば、米国英語の場合は en-US です。 このパラメータはオプションです。デフォルトはサーバーのカルチャです。
/objectaccess	インポート・オブジェクト、エクスポート・オブジェクトおよびブレンダ・オブジェクトにアクセスするためのオブジェクト・アクセス方法です。有効な値は、「標準」、「システム」、「ユーザー」またはカスタム・グループです。 このパラメータはオプションです。デフォルトは Standard です。

表 27 構成ファイルの Multiple セクション

キー	説明
OperationCount	ファイル内の操作セクションの数を指定します。0 より大きい整数を指定します。このキーは必須です。
OperationN	操作セクションのラベルを指定します。N は、1 から OperationCount 値までの数値です。このキーは必須です。

表 28 構成ファイルの Action Script セクション

キー	説明
InFile	入力ファイルのパスおよびファイル名を指定します。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。このキーは必須です。

キー	説明
StripQuotedStrings	引用符で囲まれた文字列を除去するかどうかを指定します。次のいずれかの値を指定します: ● Y[es] ● N[o] ● T[rue] ● F[alse] ● 1 ● 0 デフォルト値は True です。
Delimiter	区切り文字を指定します。次のいずれかの値を指定します: ● タブ ● カンマ ● #nnn #nnn は、任意の有効な 3 桁の ASCII 文字値(0-255)を表します。 デフォルト値は Tab です。
ColumnOrder	列順序を指定します。指定する場合、すべての列識別子が含まれる必要があります。 デフォルト値は A12345 です。

表 29 構成ファイルの Blend セクション

キー	説明
BlendName	実行するブレンダの名前を指定します。このキーは必須です。
BlendLogFileName	ブレンド・ログ・ファイルの名前を指定します(バッチ・クライアント・ログ・ファイルと同じではありません)。デフォルト値はブレンド・プロファイルに格納されています。
SourceVersionAbbrev	ブレンドするソース・バージョンの名前を指定します。このキーは必須です。
TargetVersionAbbrev	ブレンドするターゲット・バージョンの名前を指定します。このキーは必須です。
NewVersionAbbrev	作成する新規バージョンの名前を指定します。
NewVersionDescription	新規バージョンの説明を指定します。値は二重引用符で囲む必要があります。

キー	説明
AutoSave	ブレンドしたバージョンを保存するか、切り離れたままにするかを指定します。次のいずれかの値を指定します: ● Y[es] ● N[o] ● T[rue] ● F[alse] ● 1 ● 0 デフォルト値は False です。 バージョンの保存の詳細は、185 ページの「バッチ・クライアントでのバージョンの保存」を参照してください。

表 30 構成ファイルの Close セクション

キー	説明
VersionAbbrev	閉じるバージョンの名前を指定します。このキーは必須です。

表 31 構成ファイルの Export セクション

キー	説明
ExportType	エクスポートのタイプ(個別エクスポートまたはブック)を指定します。次のいずれかの値を指定します: ● E[xport] ● B[ook] このキーは必須です。
OutFile	出力ファイルのパスおよびファイル名を指定します。出力ファイルが存在する場合、このファイルは上書きされます。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。このキーは必須です。
ExportName	実行する保存済エクスポートの名前を指定します。単一エクスポートを実行する場合、このキーは必須です。
CurrentVersionAbbrev	現在のバージョンの名前を指定します。指定しない場合、デフォルトのバージョンの名前が使用されます。
PrevVersionAbbrev	前のバージョンの名前を指定します。指定しない場合、デフォルトのバージョンの名前が使用されます。
BookName	実行する保存済ブックの名前を指定します。ブックをエクスポートする場合、このキーは必須です。値を二重引用符で囲むことをお勧めします。

キー	説明
CombineExportOutput	/outfile に指定されているファイルにエクスポート出力を結合するかどうかを指定します。次のいずれかの値を指定します: ● Y[es] ● N[o] ● T[rue] ● F[alse] ● 1 ● 0 このパラメータが False である場合、各エクスポートは、エクスポート・プロファイルに格納されているファイル名に保存されます。エクスポート・プロファイル内のファイル名が無効であるエクスポート、または出力がファイル以外の値に設定されているエクスポートは、/outfile に指定されているファイルに結合されます。デフォルト値はブックに格納されています。
PreFileName	結合されたエクスポート・ブックの先頭に追加するパスおよびファイル名を指定します。デフォルト値はブックに格納されています。
PostFileName	結合されたエクスポート・ブックに追加するパスおよびファイル名を指定します。デフォルト値はブックに格納されています。
FromHierarchy	開始(前の)階層を指定します。階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートに使用されます。
ToHierarchy	終了(現在の)階層を指定します。階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートに使用されます。
FromTopNodeAbbrev	開始(前の)階層の最上位ノードの名前を指定します。階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートに使用されます。
ToTopNodeAbbrev	終了(現在の)階層の最上位ノードの名前を指定します。階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートに使用されます。
HierarchyCount	定義した階層/最上位ノードのペアの数を指定します。
Hierarchy _n	エクスポートする階層を指定します。 _n は、現在の階層/最上位ノードのペアを示す数値(1 ~ HierarchyCount)です(Hierarchy1 など)。階層エクスポートおよび他の同様のエクスポートに使用されますが、階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートには使用されません。
TopNodeAbbrev _n	エクスポートする最上位ノードの名前を指定します。 _n は、現在の階層/最上位ノードのペアを示す数値(1 ~ HierarchyCount)です(TopNodeAbbrev1 など)。Hierarchy _n と一致する必要があります。階層エクスポートおよび他の同様のエクスポートに使用されますが、階層比較エクスポートおよび階層差分エクスポートには使用されません。
FromDate	トランザクション・ログ・エクスポートの開始日時を指定します(オプション)。
ToDate	トランザクション・ログ・エクスポートの終了日時を指定します(オプション)。
CurrentVersionType	現在のバージョンのバージョン・タイプを指定します。有効な値は次のとおりです。 ● A[s Of] ● N[ormal] デフォルトは N[ormal] です。

キー	説明
CurrentAsOfDate	エクスポートの現在のバージョンの時点バージョンを作成する場合に使用する時点日時を指定します。
PrevVersionType	前のバージョンのバージョン・タイプを指定します。有効な値は次のとおりです。 ● A[s Of] ● N[ormal] デフォルトは N[ormal] です。
PrevAsOfDate	エクスポートの前のバージョンの時点バージョンを作成する場合に使用する時点日時を指定します。

表 32 構成ファイルの Import セクション

キー	説明
InFile	入力ファイルのパスおよびファイル名を指定します。値は二重引用符で囲んで入力することをお勧めします。このキーは必須です。
ImportAbbrev	実行するインポートの名前を指定します。このキーは必須です。
ImportLogFileName	インポート・ログ・ファイルのパスおよびファイル名を指定します。これは、[General] セクションの LogFileName キーによって定義されるログ・ファイルとは異なります。デフォルトのファイル名は DRM_Batch_ClientMMDDYYYY.log です。MM は月、DD は日、YYYY は年を表します。
VersionAbbrev	インポートによって作成されるバージョン名を指定します。デフォルト値はインポート・プロファイルに格納されています。
VersionDescription	インポートによって作成されるバージョンの説明を指定します。デフォルト値はインポート・プロファイルに格納されています。
AutoSave	インポートしたバージョンを保存するか、切り離れたままにするかを指定します。次のいずれかの値を指定します： ● Y[es] ● N[o] ● T[rue] ● F[alse] ● 1 ● 0 デフォルト値は False です。 バージョンの保存の詳細は、185 ページの「バッチ・クライアントでのバージョンの保存」を参照してください。

表 33 構成ファイルの Open セクション

キー	説明
VersionAbbrev	開くバージョンの名前を指定します。このキーは必須です。

表 34 構成ファイルの Refresh セクション

キー	説明
VersionAbbrev	リフレッシュする(閉じて再度開く)バージョンの名前を指定します。このキーは必須です。このキーは必須です。

表 35 構成ファイルの Delete セクション

キー	説明
VersionAbbrev	削除するバージョンの名前を指定します。このパラメータは必須です。

出力および結果コード

すべてのバッチ・クライアント操作でログ・ファイルが生成されます。また、エクスポートにより、エクスポートしたデータ・ファイルおよびエクスポート・ログ・ファイルが生成されます。ログ・ファイルには、失敗した任意のスクリプト・アイテムに関する警告が記録されます。また、すべてのエラーもログ・ファイルに記録されます(完全なエラー・メッセージを含む)。ログ・ファイルは、/log 起動パラメータによって示されたパス/ファイル名を使用して保存されます。指定しない場合、ログは DRM_Batch_Client_mmdyyy.log という名前にデフォルト設定され、バッチ・クライアントが起動したフォルダと同じフォルダに書き込まれます。

また、成功か失敗かを示すエラー・レベル(終了コードまたは結果コード)も返されます。エラー・レベルは、スケジュール・プログラムまたはバッチ・ファイルによってテストでき、適切なアクションを自動的に行うことができます。

表 36 エラー・レベル値

エラー・レベル値	説明
0	成功/正常終了
1	不明なエラー
2	バッチ操作は完了しましたが、警告が生成されました。
3	バッチ操作はエラーが原因で完了しませんでした。
100	Oracle Data Relationship Management サーバーに送信する/サーバーから返されるエラー
200	バッチ・クライアントの初期化時に発生したエラー
210	無効なパラメータ値が渡されました。
220	無効な URL
230	無効なユーザー名またはパスワード

注： 他エラー・レベル値が返された場合、エラーは Windows オペレーティング・システムのもので、詳細は、Windows のドキュメントを参照してください。

用語集

NULL 値 データのない値です。NULL 値はゼロに等しくありません。

Shared Services レジストリ Shared Services リポジトリの一部で、ほとんどの EPM System 製品の EPM System 配置情報(インストール・ディレクトリ、データベース設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)を管理します。

アイデンティティ 外部認証におけるユーザーまたはグループの一意の識別です。

アプリケーション 1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。2)必要とされる特定の分析のセットまたはレポートのセット、あるいはその両方に対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

アプリケーション管理者 アプリケーションの設定、構成、維持、および制御の担当者です。アプリケーションのすべての権限およびデータ・アクセス権を持ちます。

アーチファクト 個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。

移行 アプリケーション、アーティファクト、またはユーザーを、別の環境またはコンピュータにコピーするプロセスです。たとえば、テスト環境から本番環境にコピーします。

移行ログ アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

エンコード方式 テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングする方法の 1 つです。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。「コード・ページ」、「ロケール」も参照してください。

親 直接レポートする依存エンティティを含むエンティティです。親は少なくとも 1 つのノードに関連付けられたエンティティであるため、エンティティ、ノード、および親の情報が関連付けられています。

カスタム・プロパティ ユーザーが作成した次元または次元メンバーのプロパティです。

カテゴリ データの分類たとえば、月です。

関数 Data Relationship Management で、パラメータを受け入れ動的値を返す、派生プロパティ式の構文要素です。

外部認証 アプリケーションの外部に保管されたユーザー情報を使用して、Oracle EPM System 製品にログオンすることを指します。ユーザー・アカウントは EPM System によって保持されますが、パスワード管理およびユーザー認証は、Oracle Internet Directory(OID)、Microsoft Active Directory(MSAD)などの企業ディレクトリを使用して、外部のサービスによって実行されます。

兄弟 他の子メンバーと同世代で、すぐ上に同じ親を持つ子メンバーです。たとえば、メンバー Florida とメンバー New York はメンバー East の子であり、互いの兄弟です。

グループ 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。

権限 データまたは他のユーザーとグループを管理するために、ユーザーおよびグループに付与されるアクセス・レベルです。

子 データベース・アウトライン内で親を持つメンバーです。

コンテンツ リポジトリに格納されたあらゆるタイプのファイルの情報です。

サービス ビジネス項目を取得、変更、追加、および削除するためのリソースです例: 権限付与および認証

式 Data Relationship Management で、プロパティ値を動的に計算するために派生プロパティによって使用されるビジネス・ロジックです。

子孫 データベース・アウトラインで親の下に位置するメンバーです。たとえば、年、四半期および月を含む次元では、メンバー Qtr2 およびメンバー April がメンバー Year の子孫となります。

ジョブ 出力生成のために起動できる特殊なプロパティを持つドキュメントです。ジョブには Interactive Reporting、SQR Production Reporting、または汎用ドキュメントを含めることができます。

精度 数値に表示される小数点以下の桁数です。

セキュリティ・プラットフォーム Oracle EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

世代 データベースにおけるメンバーの関係を定義する階層ツリー構造内のレイヤーです。各世代は、次元の最上位メンバー(世代 1)から子メンバーへと 1 世代ずつ下に配置されていきます。一意の世代名を使用すると、階層ツリー内のレイヤーを特定できます。

祖先 その下にメンバーを含む分岐メンバーです。たとえば、メンバー Qtr2 とメンバー 2006 はメンバー April の祖先です。

属性 次元メンバーの特性です。たとえば、従業員次元メンバーには、名前、年齢、または住所の各属性がある場合があります。製品次元のメンバーはサイズ、味などの複数の属性を持つ可能性があります。

代替階層 共有メンバーの階層です。代替階層はデータベース・アウトラインの既存の階層に基づきますが、次元に代替レベルを持ちます。代替階層により、異なる視点(POV)から同一データを表示できます。

データベース接続 データ・ソースへの接続に使用する定義とプロパティを保管し、データベース参照を移動可能にして広く使用できるようにするファイルです。

データ・モデル データベース・テーブルのサブセットを示します。

ドリルダウン 次元の階層を使用してクエリ結果セット内をナビゲートすることです。ドリルダウンにより、ユーザーのパーспекティブが集約データから詳細に移ります。たとえば、ドリルダウンにより年と四半期の階層関係または四半期と月の階層関係が明らかになります。

認証 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

ネイティブ認証 サーバーまたはアプリケーション内で、ユーザー名とパスワードを認証するプロセスです。

ビジネス・ルール 期待される一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。

ファイルの区切り文字 データ・ソース内のフィールドを区切る文字です(カンマ、タブなど)。

フィルタ データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスを制御したりする場合に使用されます。

フォーマット文字列 1) Essbase では、セル値の表示方法を変換する方法です。2) Data Relationship Management では、Format または Formatted Date 派生プロパティのパラメータで、返すプロパティ値のフォーマットを指定します。

ブック 1) Financial Reporting では、類似したドキュメントのグループを保持するコンテナです。ブックは、次元セクションまたは次元の変更を指定する場合があります。2) Data Relationship Management では、グループとして同時に実行できるエクスポートの集合です。エクスポート結果は、結合することでも、個別に出力することもできます。

プロビジョニング ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権限を付与するプロセスです。

役割 リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

ライフサイクル管理 製品環境間でのアプリケーション、リポジトリ、または個別のアーチファクトの移行プロセスです。

リソース システムにより管理されるオブジェクトまたはサービスです(役割、ユーザー、グループ、ファイル、ジョブなど)。

リポジトリ ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマット、および注釈の情報の場所を格納します。

レコード データベースで、1つの完全な入力項目を形成するフィールドのグループです。たとえば、顧客レコードには、名前、住所、電話番号、および販売データのフィールドが含まれることがあります。

列 Data Relationship Management における、インポート・ソース、またはクエリー、比較、検証またはエクスポートの結果に関連付けられたデータのフィールドです。

索引

A - Z

Data Relationship Management

起動, [11](#)

Data Relationship Management の起動, [11](#)

EPM Architect エクスポート, [130](#)

作成, [151](#)

あ行

アイテム詳細, [71](#)

アクション・スクリプト

トランザクション・ログからのロード, [107](#)

ノード・モデルからのロード, [109](#)

パラメータ, [101](#)

フラット・ファイルからのロード, [105](#)

アクション・スクリプトのパラメータ, [101](#)

アクション・スクリプトのロード

トランザクション・ログ, [107](#)

ノード・モデル, [109](#)

フラット・ファイル, [105](#)

移動

インポート, [118](#)

ブレンダ, [126](#)

インポート

移動, [118](#)

結果の表示, [119](#)

コピー, [118](#)

削除, [119](#)

作成, [113](#)

実行, [118](#)

セクション, [111](#)

エクスポート

移動, [169](#)

コピー, [169](#)

削除, [169](#)

実行, [168](#)

タイプ, [129](#)

エクスポート・ブック

移動, [169](#)

コピー, [169](#)

削除, [169](#)

作成, [167](#)

実行, [168](#)

演算子の説明, [88](#)

エンリッチ

要求, [76](#)

か行

改善要求, [71](#)

階層

階層グループへの割当て, [31](#)

検証, [64](#)

検証の割当て, [33](#)

削除, [33](#)

作成, [27](#)

制御されたノード・アクセス・グループの割当て, [32](#)

制御されたプロパティの割当て, [32](#)

定義, [27](#)

開く, [30](#)

プロパティの編集, [28](#)

階層 XML エクスポート

作成, [137](#)

定義, [129](#)

階層エクスポート

作成, [131](#)

定義, [129](#)

階層グループ

階層の割当て, [31](#)

作成, [31](#)

階層プロパティ, [28](#)

カスタム・ソート順, [42](#)

監査

トランザクション履歴, [173](#)

要求, [179](#)

管理

ジョブ, [171](#)

兄弟ノード

定義, 36

共有ノード

使用, 51

除去および削除, 54

追加および挿入, 53

名前変更, 54

表示, 55

プライマリへの変換, 55

プロパティ, 52

有効化, 53

クエリー

移動, 92

概要, 85

グローバル, 85

結果のナビゲート, 89

コピー, 91

削除, 92

作成, 86

タイプ, 85

開く, 91

ローカル, 86

クエリー操作, 88

グローバル・ノード

定義, 36

検証

階層での実行, 64

階層への割当て, 33

結果のナビゲート, 65

ノードでの実行, 64

ノードへの割当て, 47

バージョンでの実行, 64

バージョンへの割当て, 22

子ノード

定義, 35

コピー

インポート, 118

ブレンダ, 126

要求, 73

孤立ノード, 48

削除, 48

定義, 36

表示, 48

さ行

削除

インポート, 119

階層, 33

ジョブ履歴, 172

ノード, 45

ブレンダ, 127

要求, 80

ワークフロー・タグ, 82

作成

インポート, 113

階層, 27

階層グループ, 31

時点バージョン, 20

バージョン, 17

ブレンダ, 121

要求, 74

差分エクスポート, 130

作成, 148

子孫ノード

定義, 36

承認

要求, 76

親ノード

定義, 36

実行

インポート, 118

ジョブ, 172

ブレンダ, 126

時点バージョン

作成, 20

ジョブ

実行, 172

取消し, 172

ジョブ管理, 171

ジョブの取消し, 172

ジョブ履歴

削除, 172

表示, 180

請求期間, 82

世代エクスポート

作成, 139

定義, 130

送信

要求, 75

祖先ノード

定義, 36

ソート順

カスタム, 42

た行

追加

ワークフロー・タグ, 82

トランザクション履歴

監査, 173

トランザクション・ログ・エクスポート

作成, 161

定義, 130

ドメイン

使用, 36

ノードの割当て, 22

な行

ナビゲーション・メニュー, 13

ノード

ID 関数, 39

移動, 41

緩やかな移動, 42

共有

使用, 51

除去および削除, 54

追加および挿入, 53

名前変更, 54

表示, 55

プライマリへの変換, 55

プロパティ, 52

有効化, 53

検索, 49

検証, 64

検証の割当て, 47

孤立, 48

孤立の表示, 48

再アクティブ化, 47

削除, 43, 44, 45

孤立, 48

方法, 43

マージ, 44

削除およびマージ, 43

下をすべて消去, 44

挿入, 36

ソート, 42

追加, 36

定義, 35

取消し, 44, 46

破棄, 43

非アクティブ化, 44, 46

非アクティブ化およびマージ, 44

モデリング, 39

ノード・タイプ

有効化および無効化, 30

ノードの検索, 49

ノードの再アクティブ化, 47

ノードの除去, 45

ノードのソート, 42

ノードの取消し, 46

ノードの非アクティブ化, 46

は行

バッチ・クライアント

依存関係, 185

構成ファイル構文, 192

Action Script セクション, 196

Blend セクション, 197

Close セクション, 198

Delete セクション, 201

Export セクション, 198

General セクション, 195

Import セクション, 200

Multiple セクション, 196

Open セクション, 200

Refresh セクション, 201

コマンドライン構文

アクション・スクリプト・パラメータ,
187

インポート・パラメータ, 191

エクスポート・パラメータ, 189

オープン・パラメータ, 191

クローズ・パラメータ, 189

削除パラメータ, 192

すべての操作, 186

ファイルからのバージョンの復元パラメータ,
192ファイルへのバージョンのバックアップ・
パラメータ, 192

ブレンド・パラメータ, 188

リフレッシュ・パラメータ, 192

出力および結果コード, 201

バージョンの保存, 185

バージョン

検証の実行, 64

検証の割当て, 22

コピー, 19

削除, 23

作成, 17

時点の作成, 20
 ステータス, 17
 タイプ, 17
 定義, 15
 閉じる, 23
 ドメインの割当て, 23
 バックアップ, 24
 復元, 24
 保存, 20
 バージョン・エクスポート
 作成, 153
 定義, 130
 バージョン・プロパティ
 編集, 21
 バージョン変数
 概要, 18
 削除, 19
 作成, 18
 使用, 18
 バージョンの割当て, 19
 比較
 移動, 99
 結果のナビゲート, 96
 構造, 93
 コピー, 98
 削除, 99
 作成, 94
 視覚, 93
 タイプ, 93
 名前変更, 94
 開く, 98
 プロパティ, 94
 比較エクスポート
 作成, 143
 定義, 130
 表示
 インポート結果, 119
 ジョブ履歴, 180
 ブレンダの結果, 127
 開く
 階層, 30
 要求, 80
 ブレンダ
 移動, 126
 結果の表示, 127
 コピー, 126
 削除, 127

作成, 121
 実行, 126
 プロパティ
 階層, 28
 フィルタ, 62
 プロパティ・カテゴリ, 57
 プロパティ検索エクスポート
 作成, 158
 定義, 130
 プロパティ・ステータス, 60
 プロパティ・リスト・エクスポート
 作成, 157
 定義, 130
 編集
 階層プロパティ, 28

ま行

マージ・エクスポート
 定義, 130
 マージ・ログ・エクスポート
 作成, 164

や行

要求
 アラート, 83
 エスカレート, 73, 77
 エスカレート解除, 73
 エンリッチ, 76
 拒否, 73
 経過時間別の表示, 79
 計算, 72
 検索, 79
 検証, 72
 コピー, 73
 コミット, 78
 再承認, 83
 削除, 80
 作成, 74
 承認, 73, 76
 自動エスカレーション, 82
 ステージのスキップ, 82
 請求, 73, 75
 送信, 72, 75
 定義, 70
 電子メール通知, 84
 開く, 80
 プッシュバック, 73

プレビュー, 80
 保存, 72
 未請求, 73
 要求の拒否, 78
 要求のプッシュバック, 77
 ワークフロー・タグ, 81
 ワークフロー・パス, 81
 要求アイテム, 71
 要求アクション, 72
 要求アクティビティ, 72
 要求期間, 82
 要求のエスカレート, 73, 77
 要求のエスカレート解除, 73
 要求の拒否, 73
 要求の計算, 72
 要求の検証, 72
 要求のコミット, 78
 要求の承認, 73
 要求の請求, 73, 75
 要求の送信, 72
 要求のプッシュバック, 73
 要求の変更, 71
 要求の保存, 72
 要求の未請求, 73
 要求のライフサイクル, 73
 パス, 81
 モデル, 69
 ワークリスト
 移動, 78
 ビュー, 79

ら行

リクエスト履歴
 監査, 179
 リム・ノード
 定義, 35
 リーフ・ノード
 定義, 35
 ローカル・ノード
 定義, 36

わ行

割当て
 階層に対する制御されたノード・アクセス・
 グループ, 32
 階層に対する制御されたプロパティ, 32
 ワークフロー
 ステージ, 70
 タグ, 81
 削除, 82
 追加, 82
 タスク, 70

